－文 芸－

草の丘

第 6 号

2014 年 6 月 印旛文学の会

文芸

草の丘 第六号（二〇一四年 六月）

目次　草の丘　第六号

《詩》
宝物　中川　とら……一
《創作》
遠い夕景　畑中　康郎……三
《連載》
青い実り（第二話・チューボーたち）　唐瀬　光……三六
初初しい季節（夏の抄）　中川　とら……五九
《短編》
理由　土方　杏……七五
《創作》
アクアリウムのゆりかご　いんば　華子……九四
《カット》　高橋　より
（中川とら・唐瀬　光のカットは著者による）

詩

中川とら

宝物

私の宝物
すがすがしい朝の空気を　呼吸する悦び
うれしい時に　笑える気持ち
切ない時に　流れる涙
雨上がりの空を　見上げたくなる感受性
つき上げてくる情熱
雌伏の時を　じっと耐えられる意志
染み込んでくる音楽に　ふるえる心
温かいミルクを飲みながら

癒されていく身体
読書して深まっていく人生観
悩み抜けるようになった強さ
勝ちたいと願う一念
あなたの心に共感し
手を繋ぎたくなる感情
それは違いますと主張する
真っ直ぐな勇気
全てに感謝したくなる
満たされた衝動
明日を待つことができる確信

君達の成長を　見守り続けるうれしさ
何故？と
自分に問えるようになった冷静
師を仰ぐ歓喜
役に立ちたいと祈る思い
生まれてきた歓び
自分自身を仕上げていく感動
そして
今生きて、私がここに在るということ

遠い夕景

畑中　康郎

（一）

吉井が入社して丁度三年が経とうとしていた昭和五十×年二月、彼は初めてその男を見た。

その風貌はやや痩せ形で長身、ふちなしの眼鏡をかけた白皙の好男子であった。吉井の第一印象は、真面目そうな研究者であって、温厚な紳士に見えた。

男は林田宏明といい、本社の財務部長として着任した。吉井はなぜかほっとした。それは、林田がそんなに厳しい人ではないと期待する気持ちが強すぎて錯覚したためかもしれない。別のところから聞こえてきた男の噂は、やはり非常に厳しいものであったが、吉井はなぜかそう感じなかった。思えば不思議なことである。

本社では、指導を厳しくすることが、将来のリーダーを育てるために肝要と考えられていた。そのため、行き過ぎると、往々にして現在でいうところのパワハラにつながった。

財務部には財務課、決算課、資金計画課、資金管理課の四課があり、どの課の意見も、彼はよく聞いた。叱ることもしない。鷹揚であるし、部下に仕事を任せ、そのうえで

責任は自分がしっかりと取る、そういった大将の器を感じさせた。

もともと本社には優秀な人材が集まっている。だから、肝心なポイント以外は、任せて育てる方法もある。

前部長のときも、部の雰囲気は悪くなかった。和やかだったし、部員がお互いに助け合っていた。今度も前の部同様、いやそれ以上に雰囲気はよくなるだろう。これが吉井の最初の印象であり、期待でもあった。

☆

吉井は都内の私立大学を卒業した。何年か浪人してやっと合格した大学ではあったが、一流ではなかった。

それでも当時大学卒の学歴は今よりずっと重みがあった。おそらく当時全サラリーマンの三分の一もいなかったから、吉井もエリートといえないこともない。

しかし、彼は会社が認定する有資格者ではなかった。

この会社では東大等の旧帝大系の国立大学や、ごく一部の有名私立大学卒業者を形ばかりの選抜試験の後、有資格者として採用していた。いわゆるキャリア組であり、これがこの会社におけるエリートであった。

キャリアになると、当初から出世のスピードが違う。一般の大学卒が急行電車としたなら、キャリアは特急電車、いや新幹線であろう。それ以外の学歴の者は各駅停車である。

キャリア組は、仕事の出来不出来に関わらず、余程の失態がない限りたいてい二年あるいは三年で昇進昇格した。となると当然のことだが、役員等のポストは限られているため、出世競争に敗れた同期入社のキャリアは、早めに子会社や取引会社に上級ポストを得て天下りした。

ただし競争に負けた人たちすべてが劣等ということではない。むしろ人格的には立派な人が多い。

生き残る人間は、組織の中を上手に泳ぎ、上に弱く下に強い者が多い。そして生き残るために何でもやる人間もいた。例えば、会社の金をうまく捻出して上司を接待するモラルのない人間もそうだ。その他、枚挙にいとまがない。一定の倫理観を持つ人にはとうてい無理なことだ。

それはそれとして、周囲の一般社員は、キャリア組と自分たちの歴然たる差を意識しないわけにいかなかった。卒業した大学と、たった一度の入社試験の出来不出来で一生の進路が決まってしまうのだ。

そのうえ一般社員にはハンディがあった。昇進昇格のための人数枠に制限があるのだ。順番待ちの上に、人事権を持つ人間の匙加減で決まる。その人事権はキャリア組が握っていた。組織によってノンキャリアが握っている場合であっても、キャリア組の影響は免れない。

そうなると一般社員はキャリア組に頭が上がらないし、彼らを別世界の住人と意識した。彼らは短い年数で栄転する。だから一般社員はどんな嫌なことがあっても、キャリアに仕えた場合その間じっと我慢をしなければならない。そうすることでやっと彼らに好印象を残せるのだ。

サラリーマンの習性として、自分たちの頭上に君臨するこの人たちに、腫れ物に触るように接し、嫌われないようにすることが肝要であった。そして彼らに失態があったときには、彼らに代わって泥をかぶる。その経歴に傷をつけないためである。

最も怖れるのは、この人たちに嫌われたためのダメ評価が、その後の会社人生にずっとついて回ることだった。そうなると出世はとても覚束ない。キャリア組の連中は、周囲が自分たちに気を遣い自分たちを盛り立てることが当然と考えている。彼らにとって、一般社員は道具であり、決して一緒に仕事を達成する仲間ではない。そうした意識はキャリアとして入社した瞬間から彼らの中に育ち始める。

吉井は入社間もないころ、そうした制度とその制度が作り出す社員の意識や雰囲気に何度も反発した。だが彼自身、時間が経つにつれ、やがてその感覚が麻痺し、いつの間にかキャリア組に従属することが当たり前になっていた。自然と頭が下がるようになっていたのである。

ところが、中にはそうしたことを素直に受け容れることのできない人がいた。財務課長の遠山である。

彼は都内の有名私立大学を卒業したが、キャリア組ではなかった。選抜試験がまずかったのか、あるいは在学中一時属した中核派における活動が影響したのか、会社は彼を有資格者としては採用しなかった。しかしそれでも彼が入社を選んだのは、この会社に夢を持てると思ったからだ。

だがそれからが苦難の連続であった。どこに行ってもキャリアと衝突した。彼は自分の仕事に自信があったから、決して主張を譲らない。いつも激しく議論をした。相手がキャリアであれば、なおさら闘志を燃やしたのだ。

優れた業績をいくつも残してきたし、いつも熱心に仕事に取り組んだが、案の定、出世は遅れた。

遠山はすでに四十七歳であり、とても本社部長のポスト

を望めなくなっていた。支店の部長でさえも難しいのではないか、吉井にはそのように映った。

一方着任した林田は遠山より七歳年下の四十歳。出身は東大法学部である。彼は昔でいう銀時計組であったから、当然大蔵省か通産省に行くと周囲は見ていた。しかし次期社長と目されていた大物役員がわざわざ東大に出向き、説得して入社を実現させた。彼はそれほどに優秀な人物であった。

そして遠山の第一印象も、林田はやはり温厚な紳士であった。

実際仕事にいちいち口出ししなかったし、仕事も任せてくれた。任せてくれればやる気も出る。このことは後に遠山が吉井に直接語ったことである。

☆

しかし林田が穏やかであり鷹揚だったのは、三ヶ月という短い間にすぎなかった。三ヶ月を過ぎるころから、徐々にその本性を現わし始めた。彼はその間、財務を徹底的に勉強し、同時に在籍する部の人たちの仕事ぶりをじっと事細かに観察していたようだ。

仕事の全貌を詳細に、そして部内の人物を十分に把握したころからか、林田に具申する案は通りにくくなり、突き返されることが多くなった。

最初の出来事は、五月下旬に起きた。

その朝、遠山はいつもどおり、軽い気持ちで林田の机の前に座った。

そのとき会社には、遣うあてのない余裕資金が生じていた。吉井の記憶では確か五十億円だったと思う。予算執行までの間、五十億円もの金を数ヶ月の短期間とはいえ、遊ばせておくわけにはいかない。少しでも利益を生み出し、常時資金を潤沢に確保しておく必要がある。それも財務部の仕事であった。

そのとき遠山が主たる運用先としたのが、株式と国債である。運用案はその投資比率と具体的な株式銘柄、そして国債は何年ものにするかについてまとめた。それを林田に説明していたときのことだ。

それまで静かに聞き、納得し仕事を任せるだけであった林田の態度が豹変した。いきなり敬称を省略して怒鳴ったのである。

「遠山、お前、仕事をどこまで理解している？　十社のうち八社はまあいいだろう。問題はＡ社とＤ社だよ。そんなところへ投資してどうする？　財務分析、どこまでやったんだ？　こんな将来性のない会社に大金をつぎ込んでどうするつもりだ？　今までは確かに順調だった。だがこれが続くと思うのか？」

林田は、質問というより詰問を矢継ぎ早に浴びせた。

事業は常に変化していると林田はいった。二社の直近における設備投資も失敗、経営者の姿勢もすでに守りに入り、過去の成功に胡坐をかいているだけだと続けた。先を見ていないというのだ。

ついには、遠山の二社に関する分析が全般的に甘いと声を荒げて断じた。そして最後に中期国債の投資も的外れと指摘した。

「少しは勉強しろ、何年財務の仕事やっているんだ。恥ずかしくないのか」

それに対し、遠山は反論できなかった。

いつの間に勉強したのか、遠山は内心驚いたに違いない。

林田は、財務とは無縁の社内歴であった。それが、財務のベテランを自負する遠山を怒鳴りつけたのだ。そのくらい詳細に勉強し自信を持ったに違いない。

遠山はかつて吉井に語っていた。

『林田は横柄な人間だが、勉強はするし頭もいい』

何度か意見を闘わせた遠山は、次第に林田を手強い相手と思う気持ちが徐々に強くなっていたに違いない。

遠山は黙って、すごすごと自席に戻った。

それともうひとつ驚いたことは、部下に対する、その態度である。極めて横柄なものに変わっていたのだ。イメージの激変だった。ふだんから全くしゃべらないことは同じだったが、一度口を開いたら怒鳴りまくった。しかし吉井にとって悔しいことに、指摘する内容は、どれも正確にポイントを押さえていた。

やがて財務部はシーンとして話し声ひとつなくなり、暗い雰囲気に変わった。林田が一切無駄口をきかなかったから、自然おしゃべりはなくなった。

芸能界のゴシップもスポーツの結果も仕事の合間の潤滑油であるが、そうした無駄話がない。かつては、誰かが買ってきたお菓子を食べながら、楽しいお茶の時間もあった。ところが、そうしたものが一切なくなったのである。

一方遠山は、もともと無駄話がなく、常に真面目過ぎるほど仕事に取り組んだ。そして林田の態度にもめげず、その後も色々な施策や改善策を提言した。しかしその出来事

以来、全部といっていいほど突き返されるようになった。林田は提案文書を一瞥程度で否決し、まともに見ようとしなくなった。相手にしないといった方がいい。そのうえ、たまに発する言葉は、遠山を見下すものばかりであった。

その度に彼は悄然と席に戻り、気の毒なくらいに以前の元気さがなくなった。

ある日の夕方のことだ。部の中で比較的遠山と仲のいい同僚、資金管理課長の中井が遠山の席まで酒を誘いに来た。元気のない遠山を励ましそうとしたのかもしれない。

中井はキャリア組で、そのときまだ三十代半ばだった。その晩の都合を聞きにきたのである。だが、その会話に林田が聞き耳を立てていた。話をさえぎるように、どうでもいい用事を中井に言いつけた。

「中井君、丸善に行って君の判断でいいから適当な統計資料を手に入れてくれ。今すぐ必要なんだ」

中井は仕方なく話を中断し急いで外出した。そのため酒の話は自然取り止めになった。中井は、林田の意図を感じたのだろう。空気をみるに敏感な人だったから、以後林田の前では遠山と話をすることはなくなった。

中井は、決して仕事の出来る人ではない。林田に従順なだけで、極端に言えば平身低頭、指示どおりに仕事をするだけの、いわゆる指示待ち人間である。それでも中井に対する林田の態度は、遠山に対するそれよりずっと穏やかであった。

吉井は遠山こそが仕事熱心で、能力のある人と考えていた。部下に対する指導も的確なのだ。

遠山から、以前こういうことを聞いたことがある。

「仕事は近いところと遠いところ、その両方を睨みながらするものだ。夢は持った方がいい。結果は会社のためばかりでなく、世の中のためになることを優先させる。そういう仕事をするべきだ」

吉井は、こうした姿勢で仕事に取り組んでいる遠山を尊敬していた。

七月になった。第一四半期の決算資料を作成する時期である。決算課長の橋田が遠山に話しかけた。

「遠山さん、一四半期の資料を作りたい。ついては、二人で打ち合わせしませんか？　場所は第三会議室がいいと思う」

遠山は快諾した。

「もうそんな時期ですか。いいですよ。じっくりやりまし

よう」

そのとき、またしても林田が口を入れた。

「橋田、打ち合わせはここでやれ。俺がそばで聞いてやるよ。遠山のくだらない意見が決算分析に反映されるとかなわないからな」

この言葉はどんな形で遠山に響いたであろうか？

結局二人は打ち合わせを林田の机の前、遠山の机を挟んで行った。議論は通り一遍になり、陳腐な分析になった。

それでも遠山は努力を重ねた。

それは、九月も半ばのことであった。遠山が何ケ月もかけて練り上げた財務事務処理要領の改訂案、それを丁寧に清書して林田の席まで持参した。それは全社財務ラインにとっての重要案件であった。

そのころは、パソコンとかワープロといったＩＴ機器はまだ出回っておらず、いちいち手書きであった。文章についても十分に考え、一字一句推敲し、丁寧に清書した。字も上手である。

吉井が属した財務課は、林田の大きな机から最も近い島にあったため、吉井は末席とはいってもそのときの二人のやりとりがよく聞こえたし、よく見えた。いまでもその情景をはっきりと記憶している。

そのとき遠山は林田に近づき、こういったのだ。

「部長、懸案だった事務処理要領、その改訂案を自分なりにまとめましたので、目を通していただけますか？」

林田は、いつもどおりに遠山を一瞥した。しかし何もいわない。部下、とくに遠山に対しては、笑顔というものがまったくない。冷淡と思えるほどに無反応なのだ。

それでも珍しく、遠山の書いた案に目を通し始めた。Ａ四版の三十数ページにわたって書かれた、彼の労作である。ところが、最初の数ページを読むと、すぐに林田は机の中から赤鉛筆を取り出し、きれいに清書された改訂案の上に大きく×を書き入れた。そのうえ、それを無言で床の上に放り投げたのである。

財務部の人たちには、いつごろからか、遠山が林田に近づくとまた何かが起こるといった変な期待が生まれていた。静かに聞き耳を立てるのである。そしてその度に部全体が静寂に包まれた。

そのとき林田の態度を部の多くの人たちはどのように感じたであろうか？　遠山を同情の目で見た人もいたかもしれない。ふだんから遠山の自信に溢れた態度を快く思っていなかった人は、いい気味だと内心喜んだかもしれない。

どちらにせよ、遠山にとっては途方もない恥辱であった。

彼は沈黙した。その顔は紅潮し、やがて怒りのためか蒼ざめた。両のこぶしが震えている。しばらくして、やっと絞り出すように言葉にした。

「部長、どこが悪いのですか？　指摘して下さい。私、頭が悪いもので、わかりません」

その声は掠れ、怒りのためか震えていた。しかし林田は何もいわなかった。それどころか、右手で遠山を追っ払うしぐさをした。遠山は恥辱に打ち震えているようであり、立っているのがやっとの状態に見えた。席に戻った遠山は悄然と俯いた。

そのとき彼は一体何を感じたであろう？　サラリーマン生活の虚しさか、それとも林田に対する憤怒か。

いつから、遠山と林田の関係がこんなになったのだろう？　これでは関係修復は不可能な段階に来ている。どちらかが先に転勤し別々になること、それしか遠山を救う道はない。だが、ふつうならこの関係は短くともあと半年、長ければ一年半も続く。長引けば遠山が危ないのではないか、吉井にはそう思われた。

林田は頭が切れる。回転の速さは凄まじいほどだ。ふつうの人が考える一割の時間もかけずに結論に至る。ふつうの人が考え抜いて作る案の欠陥や問題点を、ものの数分で指摘した。吉井は世の中にこんなに頭のいい人がいるものなのか、と驚嘆したことも再々だ。

彼は確かに遠山以外の部員に対しても厳しい指導をした。だが、遠山に接するときの厳しさは尋常ではなかった。今の時代でいう、間違いなくいじめでありパワハラであった。

それは人格尊重のかけらもないし、それどころか人権の無視である。あるいは憎悪かもしれない。

その異常な態度はどこから来たのか。遠山は財務部に来て二年半であり、そもそも経歴は財務畑一筋だ。林田が着任して半年、はじめは業務内容の細かいところを教えたし意見も述べたに違いない。果たしてそのとき教えた態度はどうだったのか？　どこか林田を軽く見たところはなかったか？　しかし分別のある年齢の遠山が、そこまで失礼なことを林田にするだろうか？　当事者二人の心の中は、そばにいた吉井にもわからない。相性が悪かったのか？　しかし相性と一言ですますには、あまりにもひどかった。

☆

遠山は、事務処理要領改訂案をどのように処理したらよいか、まったくわからなくなっていた。第一どこが悪いのか、それがわからない。他の人には短いがきちんと言葉にして指摘する。ところが遠山に対してはいつも無言だった。

吉井は、改訂案など放棄すればいい、と無責任に思った。しかし遠山は違った。努力を続けたのである。何度も書き直し、具申を諦めなかった。書き直しを試みた原稿が、彼のくずかごに山になっていた。そこには林田に迎合するような案もあったに違いない。しかし自分自身納得できなかったのか、その後改訂案を林田に持参した形跡はない。

すでに自信を失っていたのか？　いやそれよりも練り上げた文書をまたしても放られるのではないか、この恐怖感の方が大きかったに違いない。

遠山は財務関係処理の熟練者であったから、自分の作った改訂案に強いプライドとこだわりを持っていた。だから誰かに改訂案の相談をしている様子はなかった。

表情に生気がなく俯いて仕事をすることが多くなり、声も出なくなっていた。そのためか、部下の指導も滞るようになった。

中井はいつも心配そうな顔をしていたが、林田の手前、遠山に声をかけることもなかった。恐くて声もかけられなかったのである。

林田が遠山の改訂案に×印をつけた事件から、一ヶ月くらい経った秋も深まるころであった。

それ以来、遠山は電話で話すことも少なくなった。支店を電話で指導する気力もなくなっていた。一緒にいる吉井にはそれがわかる。支店からの問い合わせにも自信をもって答えている様子がないのだ。

その日、朝十時ごろのことだ。外線の電話がかかってきた。遠山の話しぶりから社内の人間と推定できた。親しそうなのだ。相手の話す内容は、詳細にはわからないが、おおよその見当はついた。

遠山は、小声でこういったのだ。

「そうなんだよ。いま行き詰まっている。どうしたらいいかわからなくなった。君が近くの支店だったらなぁ。毎晩でも話を聞いてもらえるのだがなぁ」

そこで相手が何かを話した。遠山が応じる。

「うん、そうなんだ。サラリーマンなんて、こんなものかもしれないなぁ。どんなに頑張ったところで、所詮これが

サラリーマンだよ。そのときどんな上司にめぐり合うか、それで全部決まってしまうんだよなぁ。運なんだろうなぁ」

それは遠山の慨嘆だった。ため息を漏らし、やや涙声であり、感極まっているようにも見えた。

それは、すべて受話器を押さえながらの小声であった。

だが、ここでも林田は聞き耳を立てていた。そして彼は自分の席を立つと、つかつかと遠山の席に近づいた。何をするのだろう、と吉井は不思議な感覚を持った。

そのときだ。吉井は自分の目を疑った。林田が、遠山の受話器を突然取り上げたのである。遠山自身も驚き、不審な顔で林田を見上げている。次の瞬間、林田は何もいわずに、ガチャンと叩きつけるように電話を切った。

遠山は唖然とした。何が起きたのかわからない様子で、きょとんとしている。いくら部下といっても、人格というものがある。それをまったく無視した行為だった。

林田は黙ってそのまま自席に戻った。

吉井は憤慨した。林田の行為を許せない、と思った。

しかし声には出せなかった。

遠山は呆然と前方を見ている。その目はどこか焦点を失って虚ろであり、全身から生気がなくなっているようにも見えた。

吉井は、そのとき自分がまだ一般社員であるということと若すぎることを残念に思った。遠山にもう少し地位も年齢も近かったら、慰めの言葉もかけられたし、終業後、酒に誘ったに違いない。ただ黙って、遠山の話すことを聞いてやりたかった。

しかしそれはできなかった。僭越なのである。心中残念に思ったが、よく考えてみれば、たとえ声をかけても遠山の性格では誘いに応じなかったであろう。

そのときの彼の心境を慮るならば、静かなところに行き、ひとりになりたかった。ただそれだけであろう。

遠山は、終日まったく言葉が出なかったし、元気もなかった。これからどうなってしまうのか、吉井はますます心配になった。

☆

翌朝またいつも通りに仕事が始まった。

ところが、ひとつだけ違うことがあった。それは遠山が出勤して来なかったことである。

あれほど不愉快なことがあれば、誰だって出勤したくな

くなる。
『当然だよ、しばらく休暇をとってやればいいんだ』
吉井は内心毒づいた。憤慨は前日から続いており、まだ収まっていなかった。
始業時間は過ぎていたが、遠山から休暇の申し出はない。このままでは無断欠勤になってしまう。だがしばらく待てば、休みたい旨の電話があるに違いない。
しかしいくら待っても連絡はなかった。
庶務担当課長の中井が、秋元財務係長の席に来た。
「秋元君、君んとこの課長、どうしたのかな？　電話あったかい？　それとも君、何か事前に聞いていたかい？」
さすがに、中井も遠山の落ち込みようを見ていたから心配になっている。
「それが課長。何も聞いていないし、連絡もまだなんですよ。私から自宅に電話してみましょうか？」
秋元がそう答えると、中井はすぐに賛同した。自分が電話すると、やや構えたものになると判断したのだろう。
秋元は電話した。が、誰も出なかった。呼び出し音が響いているだけだ。
中井も本来なら立場上林田に報告するところだが、遠山のことは報告しづらかった。だから報告しなかった。林田も何も聞いてこない。変な組織になってしまったな、と吉井はあらためて思った。
始業から二時間近くが経ったとき、ようやくそこに電話が入った。吉井が取った。
しかしそれは遠山の家庭からではなく、警察であった。吉井の心が瞬間凍った。内容を聞きたかったが、さすがに警察と話す立場ではない。すぐ中井に代わった。
中井の様子は何やら深刻だった。顔色が蒼ざめている。俯きながら眉をひそめ、さかんに相槌をうっている。数分で電話は切れたが、そのまま動かなかった。
しかしそれは動かないのではなく、動けないのであった。
秋元が心配そうに駆け寄り、
「遠山課長に何かあったのですか？」と聞いた。その声ではっと我に返った中井は、秋元には答えずに林田の席に行き、振り絞るようにこういった。
「部長、遠山さんが亡くなりました」
シーンとして聞き耳を立てていた、財務部の全員にどよめきが起きた。しかしそれは小さなものだった。
いつもは、感情に乏しい林田の顔に、さすがにこのときばかりは動揺が走ったように見えた。ふだんはふんぞり返り、人を人と思わない態度であったが、このときばかりは

下を向き顔がこわばった。吉井はそれを見逃さなかった。
だがそれは一瞬であり、すぐ林田は冷静さを取り戻した。
「どういうことだ？」
「社宅の庭にある樹木にロープをかけ、首を吊ったそうです。周囲の状況から自殺という警察の検死結果が出ました」
「遺書はあったのか？」
「ありませんでした」
林田はそれだけ聞くと、すぐに常務室に向かった。財務担当役員にまず一報を入れ、まず自分の身の安全を図りにいったのだ、と吉井は思った。
常務室から帰ってくると、すぐさま遠山の社宅に向かうように中井に指示した。詳細を聞き出すためだ。林田が心配したのは、遠山の遺した言葉であろうし、自分に累が及ぶ物的証拠だろう。そこには遺族に対する配慮など一片もない、吉井にはそう思えた。

中井は夜遅くなってから会社に戻ってきた。林田の方はすでに定時に帰宅していた。
仕方なく、林田には翌朝、報告した。その報告は通り一遍にとどめ、遺書がなかったことだけを伝えた。
中井は帰社した直後、吉井たちには詳細に現場の状況を話した。それによると、妻にはひとことだけ悔しいと伝えていたらしい。ただ理由まではいっていなかった。
その死は目隠しをしたうえでの縊死であったから覚悟し従容として死に就く、そんな自殺だったのかもしれない。
それはまだ日の出前の真っ暗な午前五時ごろであった。朝食の用意のため起きた妻が、夫が寝床にいないことを不審に思った。いつもはまだベッドの中だ。トイレにもいない、食堂にもいない。妻は最近の夫の落ち込みようが気になっていたから、心配になって周囲を捜そうとした。
社宅一階の窓のカーテンを開け、そこで外を見た。
そこには信じられない光景が広がっていた。妻が絶叫した。その声に高校二年の長男と中学二年の長女がとび起きた。長女が母親にすがり付いてきた。
三人が見たものは、ぼんやりとした月明かりと外灯の光に浮かび上がった、遠山の無残な姿だった。首から太い幹にぶら下がり、ナイトガウンから出ている足が地面を離れていた。長女は泣き叫び、その場に力なくしゃがみこんだ。妻もしゃがみこみ、泣きふるえる長女の肩を抱いた。樹木は社宅敷地内にある大きな銀杏だった。足下には踏み台が転がっている。比較的丈のある風呂場の腰掛であった。

☆

中井から簡単な報告を受けた林田はすぐに動いた。遠山の自殺は仕事熱心なあまりにそれが行き詰った結果である、と社内に説明した。会社の役員クラスには、遠山の仕事ぶりを絶賛して回った。説明を求められる都度、遠山の優秀さを語り人材を失った無念さを顔ににじませた。

財務部の緊急集会が会議室で行なわれた。

担当役員の木村常務がこう挨拶した。

「この事件に、皆さん、さぞ驚き失望されたと思う。林田君の話では、遠山さんは非常に優秀な社員だったし、仕事に熱心に取り組まれていた。戦力を失い、私も非常に残念だ。何でこんなに行き詰ってしまったのか、林田君や私などに相談してほしかった。皆さんも決して仕事上の悩みを抱え込んではいけない。この林田君、あるいは私でもいいですよ、何でも相談してほしい。どうか皆さんは、この事件に力を落とすことなくこれからも会社の戦力になるよう頑張ってほしい」

他の部から聞こえてきた話も、遠山の優秀さばかりであり、林田と遠山のこじれた関係など一切噂にも出なかった。

林田はその一方で、会社から出る弔慰金を通常よりも大幅にアップするよう社内を説得したし退職金についても上乗せするよう運動した。噂によれば、社長室まで出向いたらしい。

葬儀についても、自らが葬儀委員長を買って出た。

吉井は、この男に良心はあるのかと疑問に思ったし、素直に見ることはできなかった。すべて自殺の原因が自分にはないことを証明しようとする策謀である。吉井はそう思った。しかし財務部にはそれを策謀として告発する勇気のある社員は、彼自身を含め誰一人としていなかった。

遠山の妻は、仕事のことはあまり夫から聞いてはいなかったようだ。男というものは仕事を家庭から完全に切り離し持ち込むべきではない、と遠山自身が考えていたからだ。

仕事は男の世界だというのである。かつて吉井はそんなことを遠山から聞いていた。当時はまだそんな考え方や風潮が世間にはあったのだ。

吉井には如何にもそれが残念であった。妻がもしも遠山から会社の様子を聞いていれば、林田に葬儀の場であれほど頭を下げ、丁重な挨拶はしなかったであろう。第一、林田の葬儀委員長などは拒否したはずだ。

葬儀に関してとった林田の一連の行動に、彼女は完全に欺かれていた。あれほど夫を苦しめ人間としての扱いをし

なかった男に、事情を知らないとはいえ、深々と頭を下げている。その姿は吉井の目には滑稽でもあり哀れでもあった。

会社からは多数の会葬者があった。彼らは一言も林田と遠山の日常について触れなかった。やはり、その場での会話に相応しくないこともあったが、最大の理由はそれがどこをどう回って林田の耳に入るかわからないこと、それが恐いのであった。

林田は葬儀委員長として弔辞を述べた。

「本日ここに遠山さんという優秀にして貴重な人材を失ったことは、私や財務部にとって痛恨の極みであり、会社にとっても大きな損失であります。氏は日々仕事に没頭邁進され、余人の鑑でありました。会社に貢献した業績も数限りなく、会社を代表して感謝申し上げるところであります。しかしことここに至っては、過去を振り返るだけではなく、ご遺族の皆様が先行き心配のないよう、私をはじめ会社といたしましても支援して参る所存であります」

遠山恵美子は、その後近くの寺で営まれた四十九日の法要に会社を代表して林田を招いた。林田は何事もなかったかのように出席した。そのころの林田の表情からは後悔とか反省とか、そうした様子はまったくなく傲然とした態度が戻っていた。元気がなかったのは、遠山が自殺した直後のせいぜい一週間にすぎない。

会社は遠山の自殺の原因を調べようともしなかった。いやしくも社員が自ら命を絶ったのだ。明らかに原因はパワハラである。だから原因を調査し林田を断罪すべきだった。

しかしそうはせずに不問にした。やはり会社というものはエリートに甘い。当然かもしれない。それが日本社会の伝統なのだ。もしもこれが逆だったら、つまりキャリアの方が自殺しパワハラ側がノンキャリアであったのなら、こういう動きにはならなかった。吉井はそう考えた。

そして今でも思う。遠山は自殺するくらいだったら、何故林田と闘わなかったのか。例え左遷されても、死ぬよりはましだ。出世しなくたって、乏しい給料だって家族四人で、十分幸せに暮らせたはずだ。

また自殺が、仮に避けられないものであったのなら、林田の理不尽な振る舞いを詳細に書き遺し、それをマスコミにどうして訴え出なかったのか？　これだけ世間に聞こえた大会社で、これだけの理不尽な行為に対してマスコミが取り上げないわけがない。それがマスコミの使命である。何故そうしなかったのか？　これでは全くの犬死、無駄死

にではないか。それとも会社の体面を考えたのか？　会社をそれほどまでに愛していたのか？　遠山課長はそれほどまでに律儀だったのか？

（二）

遠山が死んで一年が経過した。

林田は少しも変わっていなかった。財務部は相変わらず暗い雰囲気である。吉井は少なくともあと一年、こんな状態が続くものと諦めていた。林田がいるうちは、部員は自分の殻の中に閉じこもり、言われたことだけを実行するだけである。積極的に仕事を改善しようなどと少しも考えないし、勿論林田への意見具申もない。叱られないように縮こまっているだけなのだ。それは吉井も同様であり、彼の気持ちも暗く沈んだままであった。

そんなある日、一本の電話が吉井にかかってきた。たまたま吉井が受けた。その声はこういったのだ。

「吉井さんですか？　丁度よかった。突然の電話、申し訳ございません。ボク去年までそちらでお世話になっていた遠山の息子で、俊一と申します」

吉井は驚いた。突然どういうことだろう？　あるいは遠山の自殺の真相がついに家族に知れたのか？

林田が傍にいたから、吉井は声を低めた。

「驚きました。どうしたのですか？」

「すみません。電話では言えません。吉井さんに会っていただきたいんです」

「どうして私なんかに？」

「父の遺品を整理していましたら、社員名簿が出てきました。吉井さんのお名前は生前父から何度か聞いたことがあって、それで吉井さんに会って話をお聞きしたいと思ったんです」

吉井は得心した。息子とすれば、死の真相を確かめたくなるのが自然だ。しかし自分はどこまで話せばいいのだろう？　全容を知れば、俊一は失望する。

「いいですけど、私の知っている範囲内ですよ。満足のいく話ができるかどうか」

吉井が会うことを拒否したら、俊一はがっかりするだろう。お茶を濁す程度に話して終わらせようと思った。

林田の方を見ると、資料らしきものを真剣に読んでおり、吉井の方には注意がまわっていない。

俊一にその週の土曜日午後二時を指定し、池袋のある喫茶店で会うことにした。

指定した喫茶店に時間どおり、俊一は姿を現した。彼には吉井がすぐわかったようだ。吉井が人待ち顔で入り口に目を向けていたからだ。急ぎ足で吉井のところへ来た。長身で肩幅が広く、がっちりした体格だ。スポーツをやっているに違いない。

「吉井さんですね。お忙しいところをありがとうございます」

快活で利発な目と意志が強そうな引き締まった口元が印象的である。若さが溢れていた。

「遠山君、どこまで話せるかわからないよ。実際お父さんの心の中は他人には窺い知れないからね」

「いいんです。おわかりになる範囲で。何しろ父の死は、ボクにはあまりにも突然で、何もかもわからないことだらけでした。少しでもその真相がわかればありがたいと思っています。尊敬していた父があんな死に方をしたなんて、今でも信じられないんです」

吉井は俊一の思いが痛いほど理解できた。ある程度のところまでは話してやろう、と思った。

だがすぐ話には入らなかった。始める前に雑談でお互いの気持ちをほぐそうとしたのだ。

「ところで君は高校三年生だろ。来年受験だから、今は大変な時じゃないのかい？」

「いえ、実はボク高校を中退したんです」

吉井は驚いた。

「だって君、高校くらい卒業しないと…。お父さんから聞いていたけど、学校は都立H高だよね。名門じゃないか。それは勿体ないな」

「仕方なかったんです。母が父の死からずっと体調を崩してしまって、以来病気がちになってしまったんです。収入はないし、病気の母の面倒も看なければならないし、妹だって間もなく高校だし、いろいろ考えて自分が高校をやめたんです」

「そうか、それは大変だったね」

吉井にはそれしかいえなかった。

「それで君、今どうしているの？」

「高校の先生のお世話で、ある会社の使い走りをしています。結構お金にはなっています」

吉井は、俊一の立場に立って遠山の自殺を悔しく思い、今更ながら、林田の振る舞いに許せないものを感じた。

いっそのこと、自殺の全貌を知っている限りにおいて、俊一に話してしまおうと思った。瞬時に気が変わったのだ。この青年なら受け止めることができるだろう、そう思ったのである。しばらくの沈黙の後、こう切り出した。

「遠山君、いいかい、これから話すことに耐えなくてはいけないよ」

「ええ、是非お願いします」

急にあらたまった吉井の態度に俊一も緊張したようだ。真剣な目に変わっている。

「お父さんはね、実は大変な思いをされたんだ。いじめだよ。上司のいじめで追い詰められてしまったんだ。自殺はそれが原因と思う。林田という部長だ。その男が自殺に追い込んだんだ」

俊一の顔色が一瞬にして変わった。蒼ざめている。吉井はその様子を見て早まった、とすぐに後悔した。やや軽率に過ぎたか―。

「ちょっと厳しすぎたかな。ごめんよ。もう止めよう」

「止めないでください。ボクは大丈夫です。そんなことで負けやしません。本当のことを知りたいです。事実は事実として受け止めます。お願いです、教えてください。少しでも真相がわかれば本意です」

吉井は俊一の顔をじっと見た。俊一も吉井の顔を正面から凝視している。正視する真剣な目と真一文字に結んだ口は後には引かないものを感じさせた。意志も強そうに思える。

「わかった。それじゃ、わかる範囲で話すよ」

吉井は結局話した。なるべく感情を交えずに事実を平板に伝えた。

話し終わったとき、長い沈黙が二人の間に訪れた。俊一はテーブルの一点を見つめ、身じろぎひとつしなかった。注文したコーヒーはとっくに冷めていた。

どのくらい時間が経ったことだろう。やがて俊一は顔を上げ、眦を決したようにこういった。

「本日はお忙しいところをありがとうございました。お聞きした事実、ボクの中でどう消化するか、これからじっくり考えたいと思います。あるいは後でまた連絡させていただくかもしれません」

「待ってくれ。次の電話を誰がとるかわからない。だから君の名前は佐藤でも加藤でも何でもいい。違った名前を名乗ってくれないか」

「わかりました。佐藤ということにします」

俊一は深々と頭を下げ、踵を返して喫茶店を出て行った。

その姿を見送った後、真相を話したことが果たしてよかったのか、吉井に軽い後悔のようなものが残った。

☆

俊一と話をした翌日の日曜日、吉井は恋人の京子と新宿のイタリアンレストランにいた。彼女は吉井の何でも話せる心のオアシスといった存在である。

彼は心に引っかかっていることを話し始めた。

「実は昨日ね、亡くなった遠山さんの息子さんと会ったんだよ」

「あら、どうして？」京子は驚いたようだ。

「息子さん、俊一君というんだけど、電話がかかってきてね、お父さんの死が未だに信じられなくてその理由を知りたがっているんだ」

「それで、あなたどういったの？」

「それがね、つい本当のことをいってしまった。つまりいじめがあったことを…」

「そう、少し厳しすぎたかもしれないわね。俊一君きっとショックだったでしょう」

「やっぱり京子もそう思うかい？　いわなければよかったな」

「俊一君という人はどうなの？　気持ちの強そうな少年？」

「気持ちは強いね。受け止められると思うよ。自分の中でどう消化するか考えたいなんていっていたけど」

「いくら気持ちが強いといってもまだ少年よ。あなた、しばらく精神的なサポートしてやった方がいいと私思うわ」

「そうだね。まだ精神的には未成熟だしな。黙っておけばよかったよ」

「でも仕方ないわよ。あなた、あのころすごく憤慨していたもの」

半ば慰めてくれた京子に吉井は素直に感謝した。心の負担が少しとれたような気がした。

「話題を変えよう。ここのイタリアンとってもおいしいんだよ。何注文しようか？　それとこの前ちょっと話した件だけど、お互いの両親にいつ会う？」

話題は二人の問題に移っていた。

二人はすでに結婚する意思を固めており、これから結婚に向けて、具体的な話を始めようとする段階であった。

☆

池袋の喫茶店で吉井と俊一が話してから、約一ヶ月が経とうとしていた。ふと気がついたのだが、何やら林田の様子がおかしい。元気がないのだ。部下を叱り飛ばす、いつものあの横柄さがなくなっている。机に向かい背中を丸めて何か考え込んでいる。このことが、まさか俊一と関係があるとは思わなかった。しかし実はあったのだ。

俊一から吉井に電話がかかってきた。お互い時候の挨拶をしてから、俊一がこういった。

「ところで、吉井さん、林田の様子はどうですか？　変じゃありませんか？」

吉井はピンときた。やはり俊一が何らかの動きをとったのだ。林田の様子を窺いながら、声をずっと低くした。

「やっぱり君か。最近様子が変なんだよ。何をした？」

電話の向こうで笑い声がした。楽しんでいるように思える。

「そうでしょう。脅してやったんですよ。そのくらいしてやらなかったら、父も浮かばれません。実は、匿名の手紙を書いたのです」

恐くなった吉井は、こういった。

「わかった。電話はやめよう。この前の喫茶店で今度の土曜日同じ時間に会おう」

それにしても驚いた。十八歳の青年というか、まだ少年というか、その年齢の人間がやることではない。度胸がありすぎる。仕事が上の空になった。吉井は気持ちを落ち着かせようとしたが、空回りした。

詳しくは土曜日だ、土曜日に聞こう。

その日、会うとすぐに吉井は俊一に尋ねた。気持ちが急いた。

「電話では手紙、といっていたね。どういう内容の手紙？」

「一年前の遠山事件、全部ばれているぞ。詳細についてマスコミに投書するつもりだ、と書いてやったんですよ。もともとああいう連中は、小心者ですよ。自分の出世しか頭にない。全てが明るみに出たら、身の破滅ですよ。週刊誌の記者が取材で会社に来たらおもしろいですよ。いい気味だ」

「君、恐いことするね。恐喝行為だぞ」

「いえ、違います。何も金品を求めていませんから、それには該当しません。奴は警察にも誰にもいえませんよ。いったら全てが明るみに出る。それが恐いから自分からは何

もできないはずです。これからのボクの動きを待つしかない」
「それで君はどうするんだ？　何が目的だ？」
「そうですね。まずは父と同じように苦しんでもらいましょうか。手紙の正体がわからないうちはなお一層不安なはずです。しばらくは放置しますよ。それからじわりじわりと第二弾第三弾の手を打ちます」
「君、恐いね。君がそんな恐い人間とは思わなかった」
「いやですね、吉井さん。ボクは少しも恐い人間ではありませんよ。でもこういうことをやらせたのは、元はといえば林田の蒔いた種ですよ。きっちり刈り取ってもらわないと、父やボクの気が済みません」
　吉井は決定的に後悔した。やはり話すべきではなかった。俊一は想像以上に強い人間であった。誰に似たのか、遠山課長はここまで強くはない。真面目で一途ではあったが、他人を追い込むことまではしなかった。
「遠山君、何とか林田を追い込む行為は止めてもらえないか？」
「心配ですか？　でも決して吉井さんには迷惑をかけません。ボクは死んでも吉井さんの名前は口にしません」
　それを聞いたとき、吉井はやや恥じた。自分のことばかり考えていた。
「いや、よくわかった。ただし犯罪行為だけはやめてくれよな。そしてその後の動きも逐一自分に報告してほしいんだ」
「吉井さんがそうおっしゃるんでしたら、そのとおりにします。場合によってはアドバイスもいただけるとありがたいのですが」
「アドバイス？　君の味方ではあるが、それは難しいな。自分は悪知恵のようなものが働かないし」
「悪知恵ではありませんよ。正義の鉄槌ですよ」
「だけどね。林田は最後には開き直ると思うんだ。自分は何も悪いことはしていない。自分は正当な業務上の指導をしただけだ、と言うに違いない。なにせ遠山課長はその事実を裏付ける証拠のようなものを残していなかったからね」
　すると俊一は笑顔を見せた。自信がありそうなのだ。
「実はですね、吉井さんに林田と父の確執を聞いてから、なお一層徹底的に父の遺品を捜したんですよ。母はあんな状態でしょ、何も手をつけずにそのまま引っ越した。遺品はそのままになっていました。ボクは捜しましたよ。徹底的にね。そしたらありました。日記の一ページに記述があ

ったんですよ。こう書いてありました。
『林田という男は冷酷な鬼のような奴だ。奴は指導者の器ではない。このままでは私は殺される。少なくともこのままではノイローゼになってしまう。これから自分がどうなってしまうのか恐い』と、ね。
これって立派ないじめじゃないですか。人を精神的に追い込む虐待行為ですよ。この文章と吉井さんの話は符合するじゃないですか」
吉井はわからなくなった。きっと俊一は突き進むに違いない。そしてその結末はどういうことになるのか、吉井は恐くなった。

☆

「京子、また俊一君の話をして申し訳ないんだが…」
「いいわよ。私もその後どうなったか気になっているの」
吉井は京子とのデートに極力俊一の話を避けてきたのだが、どうにも黙っていられなくなった。
「亡くなった遠山さんが、林田を糾弾したという日記の記述ね、それをどうやら俊一君が見つけたらしいんだ。困ったよ。それをネタに林田に揺さぶりをかけようとしている。こんな強い人間とは思わなかったよ」
「揺さぶりって、何をしようとしているのかしら。犯罪行為は許されないわよ」
京子は眉根を寄せて深刻な表情になった。いつも明るく笑顔の絶えない彼女にすれば珍しい。
大変なことになりそうな予感が吉井に生じた。
「やっぱりいじめの件、教えなければよかったな」
後悔を口にした吉井に対し、京子ははっきりといった。
「今更それは口にしないこと、いい？　あなたは俊一君に会って体を張ってでも彼の考えそうな危険な行為を止めさせるのよ。そうでないと、彼のためにならないわ」
京子は今の吉井にとって頼りになる存在であった。

☆

それからの吉井は、林田のことが気になって仕方なかった。確かに以前より態度は柔らかい。横柄でなくなったような気もする。それに元気がない。林田のような男でもあの手紙はやはり心配なのだ。

一週間が経った。気にしていた俊一から電話がきた。
「吉井さん、どうです？　林田の様子は？　ボクまた手紙を送りました」
そのとき、吉井は気になって林田の方を見た。
ところが林田と目が合ってしまった。林田はじっと吉井見ていたのである。あわてて吉井は目を逸らした。嫌な感じがした。勘のいいあの林田が、自分たちのことに気付いたのならそれは大変なことだ。
「佐藤さん、例の旅行の件ね、その件は喫茶店で改めて話しませんか」
「わかりました。そうしましょう」
と、俊一はすぐ電話を切った。彼は頭の回転が速い。何か感じ取ったに違いない。
林田は尚も吉井から目を離そうとしない。じっと探るような目つきだ。吉井は恐くなった。この権力者に睨まれたら、自分などひとたまりもない。遠い地方へと飛ばされることは目に見えている。
「吉井君、ちょっと」
林田が吉井を呼んだ。
吉井はぞっとした。ばれたか。それでなくても林田の感覚は、他人の一瞬の心の動きさえ捉えかねないほどに、研ぎ澄まされている。
「君、今の電話はなんだ？　どうも君は、私の方をチラチラ見ていたが、今の電話と何か関係があるのか？」
林田の目は吉井の心を見抜いたようにも思えた。
「いえ、部長。関係ありません。たまたま部長を見ただけです。仕事以外の電話だったもので、部長に叱られるかと思って、それでつい…」
間一髪うまくいいぬけたが、生きた心地がしない。
「そうか、ならいいが。私を何か探っているような気がしたからな」
吉井は全身鳥肌がたった。もう見ないことにしよう、と思った。

土曜日に再び俊一に会ったとき、吉井は会社の電話は危ない旨を伝えた。
「そうですか。どうもそんな気がしました。以後連絡するときは、夜にでも吉井さんの自宅にかけますよ。それはそうと、また手紙を奴に書きました。今度は日記の記述をほのめかしました」
吉井は驚いた。そんなことをすれば、遺族の仕業とわかってしまう。

「だめだよ、そんなことしては。日記を読めるのは遺族だけじゃないか。正体をいってしまったのかい？」
「いえ、日記とは書きません。かつて父から手紙をもらった第三者という形にしました」
「なんだ。それじゃ、いまごろになって、その第三者が手紙の内容を林田に暴露した、ということか？」
「そうです。時間的なことは問題ではないと思います。奴、相当気になっているでしょうね」
　確かに林田は神経が相当まいっている。その証拠に何でもないことに対しても過敏になっていた。一方の俊一はゲーム感覚のように見える。
　吉井は危惧していることを俊一に伝えることにした。
「俊一君、もうこの件は止めにしてくれないかな。とても危険な感じがする。事件にでもなったら、君大変だよ。それにね、あの林田という男、ふつうの人間ではないぞ。常識の枠内に入る男ではない。だからもう止めてくれないか」
「どうしたんですか、吉井さん。ボクは止めませんよ。絶対に林田を許すことはできない。とにかくこのまま手紙だけでは奴を追い詰めたことにはなりません。奴のことだ、何もできない人間、とボクを見るでしょう」
「困ったな、ここまで君を追い込んだのはボクの責任だ。どうしたらいいか、悩んでしまうよ。でもとにかく犯罪に抵触するようなことだけはしないでくれ。とりあえず聞くけど、これからどうするつもり？」
「幸いボクの声は太いし低い。年齢のすすんだ第三者を装うことも可能です。電話を奴の家にかけるんですよ。奴の怯えた声が聞きたい。そのうえで、父の墓に土下座して謝ってもらう。それだけでボクの気持ちは収まります。承諾しなければ、会社の役員にも投書するし、マスコミにも当時の新聞記事とともに父の遺した証拠を送る、そう脅かすんです」
「ということは、君も墓地に行くんだね？　長男であることを申し出て、土下座を確認するんだね？」
「まあ、そういうことになります」
「君の行為は自己満足にすぎない。その自己満足のために何か、こう危険なものを感じるなぁ。嫌な予感がするんだよ。気を付けた方がいい。さっきも言ったけど、あの男は半端な人間じゃない」
　吉井はやめてほしかった。それは俊一のためだ。
　一方で、どうしていじめの事実を俊一が知っているのか、林田がこれを考えれば自分の介在に気づいてしまう。そうなると、自分は財務課にいられなくなる怖れがある。

だが意志の固い俊一を止めるのは無理に思えた。その話はそれ以上しなかった。結局、遠山家の近況を聞くなどして、喫茶店を出たのは一時間くらい経った後だった。

気になったのは、お母さんが体調を崩されていることだった。吉井の気持ちはさらに落ち込んだ。

☆

一ヶ月が経過した。しかし何ということだろう？　俊一からの連絡はそのとき以来途絶えてしまったのだ。

それまでは一週間もすれば連絡があったのに、まさか断念したわけではあるまい。あの決意の固かった彼が、途中で断念するはずがなかった。そうなると、かえって心配になる。

林田の様子をそれとなく注意してみているのだが、何も変わらない。それでも心なしか、元気を取り戻しつつあるように吉井には思えた。目立って何がどうだ、というのではない。ただ何かが違う。吉井には元の横柄さが戻ったような気もした。

気にしながらも、それからさらに一ヶ月が過ぎようとしたころだった。とうとう吉井は俊一から聞いていた住所をもとに遠山家を訪ねることにした。

その家は、杉並区の京王線K駅から徒歩十数分の場所にあった。大きな屋敷の離れとして建てられた、六畳と四畳半だけの小さな家である。勿論借家だった。

訪ねたとき、家にいたのは俊一の妹和歌子ひとりだった。彼女に聞くと、母親は病院に入ったままである。

そして兄の俊一はなんと行方不明だという。

またしても吉井は驚いた。この家は悪霊にでも取り憑かれてしまったのか、次々と不幸が襲っている。

和歌子によれば、俊一は二ヶ月ほど前、父親の墓参りに行くと家を出たきりそのまま戻っていないというのだ。

それを聞いた瞬間の吉井の驚きは言葉にならないほど大きなものだった。まず思いついたのは、ある恐ろしい行為についてである。

すると和歌子は俊一から何も知らされていなかったことになる。何ということだ。俊一は計画通りに林田を呼び出したまではよかったが、そのとき事件に巻き込まれたのではないか？　勿論その証拠はない。しかし十分に考えられることだ。

俊一が帰宅しなかったその二日後、和歌子は行方不明届

けを警察に出した。しかし警察は家出人扱いにした。事件にならないと本気で捜そうとしないのである。

その後ずっと俊一の行方は知れなかった。吉井に嫌な想像があったが、それは確たる証拠もなく推測にすぎなかったから、彼は何も行動を起こさなかった。考えるだけでも恐ろしいことだったが、警察に届けるほどの勇気もなかった。

☆

吉井の悩みは深くなった。それは次第に自分の胸の内に内攻した。そして収めておくには、耐えきれないほど重いものになっていた。この悩みを聞いてもらえる人は京子をおいて他にはいない。

ついに電話をかけ、二人のよく通う喫茶店で待ち合わせた。奥まった場所に席を確保し、自分たちの声が他に聞かれないよう注意した。

吉井は俊一が行方不明になっていること、それが林田を墓地に呼び出した日と一致していることを話した。

京子の驚きはふつうではなかった。起きてはならないことが起きてしまったという失望が表情に出ている。

彼女は強い調子で言った。

「何ということでしょう。きっと俊一君はあの林田に殺されたのよ。あなたに今まで聞いてきた林田ならやりかねないわ。それであなたは何故黙っているの？　どうして警察に出頭して全てを明らかにしないの？」

彼女の不満はその口調に露わになった。

「いや、もしも林田が関わっていなかったら、情報を提供したボクはどんな仕打ちを林田から受けるかわからないんだ。そうなるとボクの会社での将来が、先行き暗いものになってしまう」

「林田が関わっていなければ、それはそれでいいじゃないの。どんな情報だって警察はほしいはずよ。あなたの今すぐすべきことはその情報提供よ。それに何？　その先行きが暗くなるというのは？　出世のこと？　あなた、そんな小さなくだらない人間だったの？　私、そんなあなた嫌いよ。あなた遠山さんのお宅のことどこまで考えているの？　口では心配そうにいってるけど、実際考えていることは自分のことばかりじゃないの。私にはそうとしか思えないわ」

吉井は強い口調の京子に驚いてしまった。

「いや、ボクたちの将来のことを考えて躊躇しているんだよ。もしも左遷されたらどうするつもりだい？」

「あなたは間違っている。市民として当然の義務の前に自分たちの利益を優先させてはいけないわ。あなたが出世しなくたって、私は少しも構わない！」

彼女は決然といった。

☆

それからさらに一ヶ月が過ぎたある日のことだった。遠山が埋葬されている墓地を訪れた墓参のカップルがあった。二人は墓地の裏山で仲良く抱擁を交わしていた。

まだ初春だった。山間を切り開いて造成された墓地は寒々としている。前日の大雨でところどころ土が流されていた。女性の方がふと前方の斜面を見た。そこに何やら白いものがわずかに、土から露出している。

「ねぇ、何かしら？」

指差した。男性の方は言われて、目をこらすと確かに変なものが土中から出ている。

「あれっ、変だな。人間の手首のように見えるなぁ。でもまさかなぁ」

二人は近づいた。そこで目にしたものは硬直した人間の右手首だった。寒さのため、腐敗はそれほど進んでいない。

二人はあっと声を上げた。墓地を出て、最寄りの警察派出所にかけ込んだ。通報を受けた警察官が現場に急行し、その後すぐに鑑識班を含む何人かの刑事や警察官がやってきた。

後日、司法解剖の結果、遺体は死後三ヶ月近くを経過した若い男性のものと判明した。男性は全裸で埋められていた。胸や腹に刺し傷が複数あり、ひとつが心臓に達していた。これが致命傷と思われた。

すぐに身元調査が行なわれ、家出人届けの中からまず照合された。するとすぐ、それに合致する事例が出た。

遠山和歌子が呼ばれ、解剖の行なわれた病院の霊安室で遺体と対面した。和歌子は絶叫して泣き崩れた。

しばらくして和歌子から連絡を受けた吉井の衝撃は、はかり知れなかった。様々な思いが交錯した。最も大きかったのは遠山課長の自殺、その真相を俊一に教えてしまったという取り返しのつかない後悔であった。

そして次に浮かんだのは、やはり事件には林田が関与しているに違いないという恐ろしい想像である。だがそれでも、証拠がないことをいいことに、警察に行こうとはしな

かった。

吉井は俊一の葬儀に通夜だけ参加した。通夜だけならば、ダークスーツを着て、黒いネクタイだけをポケットに忍ばせれば出席可能だ。終業後、早めに帰宅すれば林田にわからないですむ。告別式の方は平日昼間だから、もし出席すれば林田の勘ぐりにあってしまう。だから告別式を欠席した。自分は卑怯な男だ、と吉井は何度も思った。

一方の林田は俊一の遺体が発見され、身元判明のマスコミ報道が出てから全く元気がなくなっていた。やはりそうだ。おそらく日々戦々恐々の思いではないのか。顔の色艶がなくなっていた。多分睡眠がとれていないのだろう。

司直の手がまわれば、すぐ出勤停止の自宅待機、逮捕でもされれば休職扱いになる。勿論有罪ともなれば、即刻懲戒解雇だ。

もしも殺人を犯していたのなら、なんと軽率なことをしたのだろう。冷静沈着にして状況分析に長けた、あの林田の行為ではない。

だが一方でこうも考えた。同期トップの位置にいる林田にすれば、たかがパワハラで失脚することは耐えがたいことなのだ。だからリスクを冒してまで犯行に及んだのだろう。

葬儀から半月が経過した。吉井は土曜日、和歌子の在宅を電話で確認してから、果物と供花を携えて遠山家を訪れた。和歌子はいくぶん落ち着きを取り戻してはいたが、やつれていた。母親は相変わらず入院中で不在。兄は殺された。一年前には父親が自殺した。何一ついいことがない。葬儀も叔父夫婦に頼るしかなかった。病院にいる母親は葬儀にも出られなかった。

母親はいよいよだめかもしれない。もとはといえば、夫の死が引き金となったノイローゼから体調を崩したのだ。そのうえ、頼りにしていた長男を失っては、生きる力もなくなるに違いない。

吉井は俊一の遺骨を前に正座し、深々と頭を下げた。そして心の中で謝罪した。

『君の人生を奪ったのは、ひょっとしたら自分かもしれない。もし自分が君に何もいわなかったら、若い命を散らすことはなかった。君は大切なお母さん、妹さんと仲良く三人で生きていけた。申し訳ない。自分は軽率だった。自分の考えが足りなかったばかりに…』

どれだけその姿勢でいただろうか。和歌子は涙を流して

吉井に感謝した。
「心のこもったご焼香、ありがとうございます。兄もうれしいと思います。兄の高校の先生やお友達に数多く来ていただきました。でも時間が経った今ではどなたも来ていただけません。兄と仲がよかったお友達も大学生活で忙しいのかもしれません。兄はもう過去の人になってしまったのでしょうか？　とても悲しいし寂しくて…。
　吉井様、本日はありがとうございました。心からお礼申し上げます」
「いえ、とんでもない。上司だったお父さんのことを聞きたいと、お兄さんが私のところに来られましてね。何度か話しました。明るくていいお兄さんでした。その後警察からは何もいってきませんか？」
　吉井は心が疼きながらもそう聞いた。良心が悲鳴を上げている。
「捜査の方は何も進展がないようです。兄は私に対して何もいわない人でしたから、私にはわからないし…。早く犯人が見つかればいいと思っているのですが…」
　憔悴しきった様子で、ポツリと語った。吉井は苦しくなった。自分はなんとずるい人間なんだ。良心が完全に麻痺していると思った。

　そう思っている一方で、林田がもし犯人でなかったら、自分は林田にどんなひどい目に合わされるか、わかったものではない。ことここに及んでも吉井の気持ちは揺れた。大きく揺れていた。
　だが、とうとう決心した。人間として為すべきことをしよう、そうしなければ人生に悔いを残す。京子の言葉が、ついに彼の背中を押した。

☆

　吉井は、遠山家からの帰り道、S警察署にそのまま出頭した。そして何もかも話した。一年前の遠山と林田の確執、遠山の自殺、息子俊一と自分との関わり、そして俊一の林田へ謝罪を求める気持ち、それらすべてを話した。数時間にわたって、担当刑事に微に入り細を穿った説明をした。
　刑事はじっくりと聞いていた。いやよくわかりましたよ、お疲れ様でした、といった。
　そして最後にひとこと、ひどい話だとつぶやいた。
　すぐに林田は任意同行を求められた。だが林田は頑強に犯行を否定した。

『情報の出所を教えろ』と叫んだ。
『そいつを問い詰める。そんなことはあり得ない。私は天下のＮ株式会社、本社財務部長だ。そんな馬鹿なことをするわけがない』
そう声高にいったのだ。しかし警察は情報の出所を一切漏らさなかった。吉井との約束を守ったのである。
林田は犯行を否認し続けた。時間だけが過ぎた。警察に身柄を拘束され、会社からは出勤停止扱いとなった。財務部長は一時空席となった。
和歌子の証言から、俊一が墓地に行った日は正確にわかる。それが犯行当日であろう。林田のその日のアリバイが調べられた。当日の午後、急ぎのため一緒に仕事をしていたという中井の口裏あわせがあり、当初はアリバイ成立と思われた。しかし中井は良心が咎めたのか、後になってついに否定した。状況は完全にクロになった。
警察は林田の逮捕状をとると同時に家宅捜索も実施した。果たして自宅床下から出てきたのは、俊一の血にまみれたコートなどの衣服、そして返り血を浴びた林田自身のコートであった。黒く染みになった血液は俊一のＤＮＡと一致した。凶器に使用したサバイバルナイフも見つかった。林田は決定的証拠を何ひとつ処分していなかったのである。
林田の家族が示した絶望は、まったく言葉にならないほど悲惨をきわめた。妻は半狂乱になったし、小学生の兄弟二人はショックのあまり口がきけなくなり、家に閉じこもるようになった。
検察が林田を起訴した。求刑は無期懲役であった。
吉井は決心した。ずっと裁判を傍聴し、検察側証人として積極的に証言台に立つのだ。その結果、会社が自分をどう処遇しようと、どうでもいいことだと思った。
そう考えると、林田も会社も何も恐いものはなくなった。どうしてあれほどまでに林田を怖れたのか。吉井には、今になって、そのときの自分の気持ちが理解できなかった。
その一方で、京子の言葉が、どれほど強い力になったことだろう。
彼女はこういった。
「会社がどんなにあなたをいじめても、私はあなたの味方よ。人間としてしなければならないことをあなたはするのよ。会社がクビになったら、それはそれで仕方がないわ。人間はどんな形でも生きられるのよ。だから頑張って」
以下は林田の供述である。裁判の傍聴の過程で吉井が知

った、林田と遠山の確執、さらには俊一殺害の全容である。『遠山課長の自殺は、彼が弱いからであって、私が原因ではない。私は正当な指導をしただけである。この程度のことで死を選んでいたら命がいくつあっても足らない。確かに他の部下より、多少は厳しかったかもしれない。しかしそれは私が財務部長として着任間もないころ、彼が私に対してとった『こんなことも分からないのか』といった態度が許せなかったからだ。彼は鼻で笑ったのだ。それは私という人間に対するあるまじき態度だった。かつてこの私に、この林田宏明に、そんな態度で接してきた部下はただのひとりもいない。あり得なかった。その裏返しである。今度は私がこんなこともわからないのか、自分で考えてみろ、という態度に出たのだ。当然のことではないか。死にたい人間は勝手に死ねばいい。

息子殺害については、遠山の自殺から一年も経ったころ、突然手紙が来た。お前のやったことはすべてわかっている、会社に知られたくないだろ、いじめの証拠もあるんだ、という内容だった。しばらくすると男の電話の声で、遠山課長の墓前に土下座しろ、なんていう馬鹿げた要求もあった。初めは相手にするのも馬鹿馬鹿しいと思ったが、会社やマスコミに証拠ともども送りつけるなどと脅迫めいたことも あったので、仕方なく会うことにした。こういうことは次第にエスカレートする。だから次は金の要求だろうと思った。いずれにしても放置すると厄介なことになるので、思い切って早めに始末しようと考えた。

犯罪が明るみに出ない絶対の自信があった。こんなつまらないことで私の将来が閉ざされるとしたら、これほど理不尽なことはない。それで約束の日、早めに墓地に行き、裏山で待機した。男の顔を初めて見たとき、少年だったので驚いた』

何回かの裁判の傍聴で、林田のすべての法廷証言を聞いた吉井は、墓地における林田と俊一が対決した場面を自分なりに想像した。林田の、自分に都合のいい証言を一部差し引き、彼ら二人の性格をふまえて状況を思い浮かべた。

彼の想像は以下の通りだが、これが真相と判断していいだろう。

林田は、呼び出された墓地に一時間前に着いた。墓地が山を切り開いて造成された関係で、裏手はうら寂しい感じの林になっている。そこへ持ってきた荷物を置いた。そして自分を呼び出した人物を見極めようとじっと待った。

やってきたのは、なんと少年であった。長身でがっちりとした体躯だが、まだ童顔を留めている。そしてその顔は死んだ遠山に似ていた。そこでやっとわかった。自分を脅迫してきたのはなんと遠山の息子だったのだ。

一方、俊一が墓地に到着したとき、意外にも林田はすでに自分を待っていた。

「あなたがあの林田さんですか？」

俊一から話しかけると、林田は黙って頷いた。二人は立ったまま、互いを凝視した。ほんの一分程度のものだったが、林田には随分長く感じられた。

俊一が先に口を開いた。

「もうお気づきと思うが、ボクは遠山俊一だ。あなたが自殺に追いやった財務課長、遠山の息子だ。父は無念にも死を選んだ。その原因はあなたのいじめだ。きょうはあなたに父の墓前に土下座してもらうために来てもらった」

俊一は若いのに堂々としていた。はっきりと物をいう。林田は心のうちで感心したが、勿論反論した。

「冗談じゃない。私は何も悪いことをしていない。君の父親は勝手に死んだのだ。死にたい人間は死んだらいい。弱い奴が先に死ぬのは世の道理だ。死ぬくらいだったら、どうして私に反論しなかったんだ」

それを聞いた俊一は瞬時に怒りがこみ上げた。急に感情が高ぶり、抑えてきた様々な思いが爆発した。

「何を言うか！　お前は父の提言もあるいは反論もすべて一方的に封じ込んだんだ。人間としての尊厳を踏みにじり、人権さえも認めようとしなかった。それはひどいものだった。お前の正体は人間の皮を被った獣だ。ただ頭がいいだけの人間の血が通っていない化け物だ。お前こそ死ぬべき人間なんだ。だがボクはお前のようなひどい人間ではない。ただ父の墓前に土下座して謝ってくれさえすれば許してやる。有難いと思え！　もしもそれを拒否するようなことがあれば、ボクはお前のやったことをマスコミに暴露する。N社の財務部長ともなれば恰好の話題になるさ。どうなんだ！　土下座するのか、しないのか！」

林田は瞬時に判断した。ここはおとなしく従う方がいい。

彼は俊一の指示通り、遠山課長の墓前に進み正座した。そしてついに手をつき、頭を深く垂れた。

その光景に俊一の目からは涙が溢れた。そして感極まり、こう叫んだのだ。

「お父さん！　喜んでください。ついにあなたの悔しい思いをここに晴らしましたよ！」

これを聞いた瞬間の林田の思いは、俊一とはまったく異

なるものだった。
（こんな小僧に舐められてたまるか）
林田は立ち上がると、急ににこやかな顔になった。口調までが穏やかになった。
「遠山君、ちょっと君に見せたいものがある。お父さんに関する、まあ遺品といっていいかもしれないな。向こうにおいたボストンバッグに入っている。それを君に手渡したい」
林田が裏山を指さした。父の遺品と聞いただけで、俊一に懐かしさがこみあげた。尊敬していた大好きな父親の顔が目に浮かんだ。涙がまた溢れた。
俊一は黙って林田の後をついて行った。彼は、林田という人間をまだよく理解していなかったのだ。
裏山にボストンバッグが置いてあった。林田はしゃがみ込み、そのバストンバッグの中を何やら探し始めた。俊一はその背中を見ている。父親のどんな遺品が目の前に現れるのだろう、期待から胸がときめいた。
そのときだった。突然、林田が振り向いた。そして光るものを俊一の方に突き出したのである。俊一はうっ、とうめき声を上げて蹲った。何が起きたのかすぐにはわからなかった。激痛が走った。やがて苦痛の中でその理由を理解した。鋭利な刃物で腹を刺されたのだ。
迂闊だったという思いが、絶望的後悔となって俊一を襲った。林田という人間の心の闇を疑わなかった純真さが決定的なミスにつながった。そしてはじめて林田という人間の本当の恐ろしさを知ったのである。
林田は俊一を仰向けに転がし、次には胸を刺した。俊一は意識を失い、それが致命傷になった。

林田の供述に戻る。
『俊一は間もなく動かなくなった。コートや衣服は剥ぎ取り、ボストンバッグに入れて持ち帰った。墓穴を掘るときは苦労した。なにしろボストンバッグには折りたたみ式のシャベルしか入らなかったからだ。だから、時間をかけてじっくり掘った。幸い裏山に人は来なかった。
私にとって幸運なことは、どう考えたところで、少年の死体と自分を結びつける接点が何もないということだった。だから安全と思った。
ところがふとある恐ろしい考えに行き着いた。吉井という社員、彼のところにかかってきた電話、あれは一体何だったのだろう？　まさか、吉井が全てを把握しているとは夢にも思っていなかった。そうだ、いつだったか私の方を

見て言い訳をしたことがあった。あのとき早めに手を打っておけばこんなことにはならなかった』

判決は求刑どおり、一審無期懲役となった。

林田は懲戒解雇処分になり、前途は永久に閉ざされた。

弁護側は量刑が重過ぎるとして控訴、さらに上告し最高裁まで争った。

林田は部下指導の正当性を主張し、俊一殺害については、その不当な要求から自分を守るためだった、と一貫して減刑を訴えた。しかし上告棄却となり無期懲役が確定した。

結局、吉井は会社から何の咎めも受けなかった。

林田の判決が確定するころ、吉井は北陸への地方勤務を希望し、京子を伴って東京を後にした。

そして東京には、生涯二度と勤務のために戻って来ることはなかった。

〈了〉

「印旛文学の会」について

・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に2回発行する等の活動を行う。

・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトに全文を発表する。

・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し、発表する人とする。

・会員は、年会費2千円を負担する。年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。

・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。

・その他、会の運営に関する重要事項の変更については、編集会議や合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。

青い実り（第二話・チューボーたち）

唐瀬　光

プロローグ

暗い森の中を懸命に走った。

大きな木の根元で、獰猛な巨漢が一人の女生徒に覆いかぶさっている。あわれ彼女はすでに丸裸同然にむかれ、のしかかる黒い獣はニタニタ笑いながら、白い太ももにかかっている最後の一枚をはがそうとしていた。

「ミヤ！」

ぼくは叫びながら駆けつけると、男の頭にスニーカーの一蹴りを入れた。「ぐがあ！」という耳ざわりな声を発して、大きな図体が転がる。すかさず襟をつかみ、絞め技をかける。その時ようやく男がぼくの顔を認識した。

「シン！」

そいつの驚愕した声が響く。

「シン、きさまあ！」

男の顔が赤黒く膨れた。死にものぐるいで押さえつけたが、所詮女の身ではかなわない。すぐに弾き飛ばされ、敵に反撃のチャンスを与えてしまった。

「見つけたぞ、このオトコ・オンナ」

そいつは顔面に喜色を浮かべながら迫って来た。たちまち組み敷かれ、汚い手で胸を鷲掴みにされる。
「ほおお！　大きくなったなあ」
やつの喜ぶ声がする。
「シン、小学の頃はよくやったじゃねえか。お医者さんゴッコをよ。今日こそ本番をやろう。なあに最初はちょいと痛いだけさ。そのうち『もっと、してぇ～』って泣いて頼みたくなるぜ」
この男、かつて小学校のクラスメイトだった川崎清は、好色な笑いを浮かべながら片手でぼくを押さえつけ、もう一方の手で身体をまさぐる。ムカデが這いまわっているようなおぞましい不快感を覚えた。身をよじって逃れようとするも、強い力で締め上げられ、振りほどくことができない。
助けを求めて眼球を回したが、辺りには清の仲間が数人いて、一緒に助けに入った空手部のカズは、その一人と蹴り合っている。助かったはずの宮も今は別の男と戦っている。二人ともこちらには、手が回らない様子。
その時、闇の中を白いブラウスに黄色いミニスカートの華奢な少女が駆けて来るのが見えた。手には愛用の木刀を提げている。
（蘭先輩！）
ぼくはホッと安堵の息を吐いた。あの人が来れば大丈夫。見かけはかわいい女の子だが、剣道部の副部長で二段。生物部副部長、副寮長と、暴れん坊で副ばかりつくから『鬼の副長』と呼ばれている。
「キャア、アアアー！」
彼女は木刀を八双に構え、闇夜に示現流の猿叫を響かせながら鋭く切り込んで来た。それは男の頭頂を割り、脳にくい込み、顔面を縦に切り裂いて止まった。目と目の間から、木刀の剣先が突き出ている。
「ぐがああ！」
清はまた不快な雑音を発して身体を仰け反らした。そのまま倒れるかと思いきや、のっそりと立ち直る。
「この、この、このおぉー」
蘭先輩のうろたえた声が聞こえる。
なにをしているのかと身を起して見れば、彼女は清の頭に食い込んだ木刀を引き抜こうとたたらを踏んでいる。でも、なかなかなか抜けない。最後にやつの堅い背中に片足をかけ、「うんしょ！」とやって、やっと抜いた。はずみで地面に尻もちをつく。
仁王立ちになった清は、先輩の方に向き直り、割れた頭蓋骨から灰色の脳漿を振り撒きながら、少女剣士の様子をじっと見下ろしている。その顔が怒りに醜く歪んだ。

「なんだあ、ワレ！」
清は先輩の首根っこをつかむと、思いっきり放り投げた。彼女の小柄な身体は木刀を持ったまま宙を飛び、木立を越えて空の彼方に消えて行った。
「邪魔者はいなくなった。さあ続きをやろうぜ」
清は頭頂をV字型に割られながらも、グロテスクな笑顔でこちらに近づいて来る。
「うわ、あああ！」
ぼくの口から絶叫がもれた。

「シン！　シン！」
闇夜に声がする。誰かが助けに来たらしい。
（そうか、葵（あおい）さんだ！）
最後は彼女に助けられたのだ。
葵さんは自分よりはるかに大きい清を、一本背負いで木の切り株に叩きつけた。
腰を砕かれて立ち上がれない男を、腕組みした葵さんが見下ろしている。
「葵さん！」
ぼくはぴょんと跳ね起きると彼女に抱きついた。
「シン、無事でよかったぁ」
葵さんもぼくを抱擁する。少し離れた所では、カズと宮が互いに抱き合って無事を喜んでいる。
ぼくと葵さんも、強く、強く、抱きしめ合った。

「起きなさい、シン！　デートに遅れるわよ」
いきなり毛布をひっぱがされた。
驚いて声のした方を見ると、そこにはそばかすを散りばめたルームメイトの丸い顔があった。
「あれっ、ここは……？」
なんと自分の部屋ではないか。
「んまあ、寝ぼけてる。もう、いつまで寝てるのよ。日曜でも朝は早く起きる。いつも言ってるのに、まだわからないの！」
お雪（ゆき）の言葉はいつも辛辣（しんらつ）で容赦がない。
「朝、だって？」
部屋には窓を通して明るい光が差し込んでいる。
（夜だったのに……）
首をひねっていると、「どうした」という声がして、半分開いたドア

から一人の少年が入って来た。小作りの顔に切れ長の目、髪は束ねて後ろに垂らし、白い胴衣に黒袴。手には黒光りのする木刀を下げている。歌に出て来るような少年剣士だ。背後に空手着の大きな男（？）とトレーナーを着た色黒の小僧（？）を従えている。

部屋に入るなり、後ろの小僧が「蘭副長の御用改めである。あやしい男はいないかぁー」と甲高い声を発した。先頭の少年は「うむ、うむ」とうなずきながら狭い部屋の中を見回している。

「蘭先輩！」

ぼくはベッドから滑り降りると、その小柄な身体を抱き締めた。

「ぶ、無事だったんですね！」

空の彼方まで飛ばされたので、てっきり死んだものと思っていたが。

「お、おい、シン、なにをする。『無事』って、なんのことだ」

少年（？）は驚いたように、ぼくの腕を振りほどこうとする。

「シンさん、シンさん、しっかりしてください！」

色黒の小僧に、いきなり平手打ちを食わされた。目から白い星が飛び散って、頭がシャキッとなる。

「いったいどうしたんですか。我々は寮に男が侵入していないか、見回っているところですよ」

小僧にしか見えない少女のさぎりが、言い聞かせるようにぼくの目を覗く。

「夢だったのか……」

森の激しい戦い。あれは実際起こった事件だ。清が頭を割られるところなど、今の夢と多少ストーリーが異なるところもあるが。

ぼく……おっと自己紹介がまだだった。本名は立花芯（たちばなしん）という。『芯』……男のような響きの名前で大層気に入っている。ぼくの身体は生物学上、女性に分類されるが、自分を『女』だと思ったことはない。つまり身体は女だが、脳の性認識が男なのだ。医学的にはトランスジェンダーとかトランスセクシュアルとかいうらしい。

この舞鶴（まいづる）女学園には理事長の小村正美（こむらまさみ）を始め、ぼくの友人である蘭先輩（七島蘭（ななしまらん））やカズ（黒木和子（くろきかずこ））、福地（ふくち）さぎりなど、身体は女性でありながら性認識は男という者がかなり在籍する。理事長はある目的のため、そういう生徒を優先して入学させているのだ。

五月の始め、ぼくと蘭先輩、それに大柄なカズ、小僧と見間違えるような坊主頭（スポーツ刈り）のさぎり、のオトコ（？）四人組で、『夜遊び』をしようと、キャンプファイヤーで賑わう森の広場に向かった。その途中、〈学内に不審者が侵入〉との校内放送が聞こえた。そこで用

心しいしい夜の小道を歩いていたところ、側溝にクラスメイトで学年一の美女、赤木宮子（あかぎみやこ）のバッグが捨ててあるのを見つけた。どうやら侵入者に連れ去られたらしい。直ちに彼女を助けるべく、さぎりを自警団の詰所に走らせ、残る三人で森の中を捜索していたところ、黒い大きな木の下で、男たちにまさに犯されようとしている宮を見つけた。

驚いたことに、やつらのボスは、小学校の時、ぼくをレイプまがいの暴行でさんざん苛めたクラスメイトだった。卒業後、中学が別になったにもかかわらず、ぼくは執拗につけ狙われた。一時は人気のない空き地に連れ込まれ、本当に犯されそうになった。その時は幸運にも級友の男子二人に助けられたが、その後も、隙あらば襲ってやろうという彼の邪悪な視線を至る所に感じた。

全寮制の舞鶴女子高（通称、鶴女（つるじょ））に入学してから、もうこれで一安心と思っていたところ、今度は学園を取り巻く高い塀（背丈の四、五倍。赤外線センサー付き）を、手下四人を従えて乗り越えて来た。彼らの目当てはぼくだったが、たまたま夜の小道を一人で歩いていた美少女の宮を、行きがけの駄賃とばかりに襲った。

蘭先輩がその内の一人を枯れ枝で作った棍棒で倒した。ところがその棒が折れてしまい、あとは逃げ回るだけ。得物を持たない七島蘭なんて、ただの女の子に過ぎない。たちまち形勢は逆転した。

そこに現れたのが、生徒会書記で柔道二段の伊東葵（いとうあおい）。彼女は清を得意の一本背負いで倒し、ぼくたちを救ってくれた。

葵さんは生徒会からの帰りにぼくら四人を見かけ、不審に思ってつけて来たのだそうだ。

「なにせ蘭が引き連れていたからね。なにか悪いことでも企んでいるんじゃないかと、心配になったの」

彼女は、折れた枯れ枝を握りしめているだけの蘭先輩を横目で見ながらそう言った。

葵さんと蘭先輩は敵同士。去年は恋人のように仲がよかったらしいが、今では水と油。会えばいつも喧嘩ばかりしている。

まあ、ともかく侵入者を退治したことで、ぼくらは小村理事長より『舞鶴英雄賞』なる賞状をもらい、たちまち学内ヒーローになった。

チューボーたち

1

その日の午後、ぼくは早めに昼食を済ますと（今度こそ葵さんにプ

ロポーズを）との一大決心をして寮の自室を出た。今日はいつものジャージではなく、紺の長袖シャツにGパンという姿だった。

誰もいない廊下をソソソッと忍び足で玄関に向かう。今は昼時でほとんどの生徒は部屋にいないのだから、足音を立ててもかまわないのだが、トラウマというのか、この場所に来るとどうしてもあのことを思い出す。

『あのこと』とはもちろん入寮早々、男と間違えられ、ここで女生徒たちに袋叩きにされた事件のことだ。入寮案内に書いてあるようにちゃんと制服を着て来ればよかったのだが、セーラー服なんてとても恥ずかしくて着れやしない。そこでいつもの服装、だぶだぶのGパンにこげ茶の皮ジャン、黒いキャップ帽に丸いサングラスと、いかにもガラの悪そうな男の格好で現れたものだから、女子寮に侵入したストーカーと間違えられ、激高した女生徒たちに殴る蹴るの暴行を受けた。

彼女たちは喧嘩慣れしていないのか、やめ時を知らず、集団心理も働いて、いつまでもリンチを続けるものだから、さすがのぼくもこの時ばかりは死を覚悟した。

その息も絶え絶えのところを助けてくれたのが二年生の葵さんで、それ以後ずうっと彼女を慕っているが、それがいつの間にか恋心に変わっていった。

ともあれその場所を通り過ぎて玄関を出ると、築山のある講堂裏に向かう。そこはぼくと葵さんが二人だけで最初に会った場所だ。小高い人工の山には数本の五葉松が枝を横に広げている。

その日、入学式が終わって一人この裏庭に来てみると、園芸部員でもある葵さんは、カーキ色の作業着に季節に合わない麦わら帽子という格好で、松の手入れをしていた。ぼくはその姿に年増の女性用務員と勘違いして「オバサン」と声をかけてしまった。ところが麦わら帽子を取って振り返ったその顔はとても若い。小麦色の肌に黒く大きな瞳。腰まで届く長い髪は二つに分けておさげにしている。すぐあの人だとわかって赤面した。

穴を掘って地にもぐりたい気持ちだったが、あこがれの人と初めて話ができたのはとても幸運。その時は、まさに天にも昇る思いがした。

それがきっかけで彼女とは『恋人に近い友人』になった。だが、ぼくはこの関係をなんとかして日見子（ひみこ）（女同士の学内夫婦）にまで高めたいと思っているのだ。

苔むした古い地蔵の立っている講堂の裏庭。そこを囲んでいる生垣の破れ目から付属中学の敷地に入った。

なぜわざわざそこを通るかというと、このGパン姿をほかの女子高

生に見られたくなかったからだ。なにかと話題の多いぼくのこと、ちょっと違った格好をするだけで、すぐうわさのタネになる。そこでこっそり別のルートにしたのだが、途中出くわす女子中学生たちは、ぼくの姿を見かけると、振り返ってなにかコソコソ話している。ふと校舎を見上げれば、二階の窓辺にいる数人の少女と目が合った。

「ねえ、来て、来て、見て。シンよ、シン。シンがいるよ」

そして「きゃーっ」と黄色い声を上げた。

なんと、ぼくはここでも有名人らしい。でも、あまり尊敬はされていないようだ。つうか、お笑いタレントかなんかを見る目つきだ。

そこで背中を丸めて隠れるように歩いていると、後からつけて来る一隊がいる。

「シン、シン、シ〜ン。タチバナ〜シ〜ン」

はやし歌まで聞こえる。

キッ！　と振り返ると、パッと止まる。しばらく歩いて振り向くと、ピタッと静止する。

（ガキ相手に『だるまさんが転んだ』をやっているのか……）

相手にするのがばからしくなって、足早に校庭を通り過ぎる。そして見覚えのある細い道に出たところで、ふと先月のことを思い出して足を止めた。

この先にある茶畑。そこの細い道で葵さんを怒らせ、襟首を締め上げられたのは先月の末。その場面を茶摘みのチューボーどもに嘲笑された。あのことをキャツらの若い脳が忘れるはずがない。その中を一人だけで通れば、なにを言われるかわかったものじゃない。

おそるおそる木の陰から畑を覗うと、今日は一人の姿も見えない。ホッと安堵の息を吐く。

校舎の方を振り返ると、屋上に何十人かの集団が見えた。中には双眼鏡のようなものでこちらを覗いているやつもいる。

（恐るべし、女子チューセイ）

無邪気なだけに、なお始末が悪い。

灌木の生い茂った土手を回り込んで彼女たちから見えない所に出ると、立ち止ってGパンについたほこりを払った。このジーンズとシャツは先週、寮の売店で買ったものだ。あの『夜遊び』に出かける時、いつものジャージを着ていたら、美少女戦士の蘭先輩に『ダサイ』と言われた。それがきっかけで、少しおしゃれをしてみようという気になったのだ。かといって、先輩みたいに太もも丸出しのミニスカを穿く気にはとてもなれない。そこで、Gパンと紺色シャツというわけだ。

でも、これは街の女たちが穿いているような、足腰にピッタリ貼り

つくものではない。また以前愛用していたダブダブのものとも違う。まあ脚の線が見えない程度のノーマルなサイズだ。それでもぼくは満足だった。

今日はバッチリ決めて、葵さんを驚かせてやろう。空を見上げりゃ、どこまでも青い。木立の間からは学園を囲む高い塀が見え隠れしている。まさに『蒼天壁上ニ在リ』だ。チューボーどもに出鼻をくじかれたが、気を取り直して待ち合わせ場所に向かった。

2

流れる風がとても気持ちいい。今日のキャンプ場は、生徒たちでさぞ賑わっているだろう。ぼくは途中から道をそれて、森の中に入った。待ち合わせの西洋庭園に行くには、この森を真っ直ぐ抜けるのが一番の近道なのだ。

（それに、このおしゃれな姿をみんなに見られるのも恥ずかしいし）

木の枝や切り株を避けながら歩いていると、近くでガサゴソと落ち葉を踏む音が聞こえた。

（誰かいるのか……）

音のする方に近づいてみると、一人の尼僧が竹箒で苔の生えた地面を掃いている。その傍には、胸に赤子を抱いた石の地蔵がちょこんと立っていた。風化具合いから、それほど昔のものではなさそうだ。

やがて彼女は箒を近くの木にそっと立てかける。それから柄杓を取り、傍らの水桶から水を汲むと、その地蔵親子を丁寧に洗い始めた。洗い終えると正面に回り、竹の花立てに白いスズランの一房を挿した。そして両膝をつき、静かに手を合わせる。お祈りが済むと、のろのろと立ち上がり、水桶を手に取ってこちらを向いた。

（菖蒲尼様！）

思わず息を飲んだ。

彼女は、この舞鶴女学園の母体となる仏教寺、翔鶴院の後取り娘で、認知症を患っている住職の代わりに、この尼寺の切り盛りをしている。ぼくの母親と同じくらいの年齢だが、端麗な容姿、優雅な立ち居振る舞いから、知らない者にはまだ三十代だと言っても通るだろう。そしてまた、年季の入った茶人でもある。

彼女も驚いたのか、手から水桶が滑り落ちた。

「あっ、あなたは！」

彼女は一瞬呆然とした顔を見せたが、すぐにっこりと微笑む。

「シンさんね。驚きましたわ。この前と様子が違っていますもの」

「えっ？　ああっ、これですか」

ぼくは自分の服装に目を移した。彼女の言った「この前」とは、ぼくが葵さんたちと参加した先週のお茶会のことだ。ぼくは茶会用の和服を持っていないので、学校のセーラー服を着て行った。
「あれは仮の姿で、こちらが本物です。なにせボク、オトコオンナですから」
二人だけで話すのは初めてなのに、なぜか自分の秘密をすらすら口にしていた。
「そう……オトコオンナね」
彼女は心なしか悲しそうに眉をくもらせた。
(しまった、口に出すんじゃなかった)
理事長のことを思い出した。今は性転換して男になっているが、彼(?)はこの方の妹なのだ。
「菖蒲尼様は、このお地蔵さんを拝みに来られたのですか」
急いで話題を変えた。
「この像は水子地蔵なのです。昔、ある人がここで流産しましたの。その子の霊が眠っているのですよ」
彼女は、そのお地蔵様にいとおしそうな目を注いだ。
ぼくは改めて地蔵に目を移した。そのふくよかな体つきは女神のような優しい雰囲気をかもし出している。胸に抱かれた小さな赤子。ふと、その子の目が動き、ぼくを見つめたような気がしたが、きっと錯覚に違いない……。
ぼんやりとその像を眺めていると、菖蒲尼様に尋ねられた。
「あなたは、どうしてここに来たの?」
「ああ、友達と待ち合わせているんです。あの西洋庭園で。道を行くより森を抜ける方が早いから」
「そう、お友達と……葵さん?」
彼女は「ふふふふっ」とおもしろそうに笑った。
見透かされて頬が熱くなるのを感じた。あわてて周囲に目を反らす。そして、ふと気がついた。
(この近くだ。清と死闘を演じたのは……)
あの事件を思い出す度に、背筋にゾッと震えが走る。
(もし自分たちがあの道を通りかからなかったら、宮は……)
「ここら辺ですね。犯人たちが潜んでいたのは」
「ほんとうに、よかったわ。赤木さんが助かって。きっと、この子が導いてくれたのですわ」
そう言って、またお地蔵様に手を合わせた。
(まるで、マリア様のようだ)
仏教徒には適切でないかも知れないが、彼女に聖母マリアの柔和な

姿を連想した。
お祈りが終わると、菖蒲尼様は正面からぼくを見つめた。この時、彼女の顔は誰かに似ていると思ったが、誰だったか思い出せなかった。
「お友達と待ち合わせしているのじゃなくて？」
ハッと時計を見ると、すでに約束の時間を過ぎていた。
（しまった！　遅刻だ）
ぼくは急いで菖蒲尼様にお辞儀をすると、森の中を走り出した。
「あわてると、転びますよ！」
彼女の声が背後に聞こえた。

3

待ち合わせの場所に着いた時には十五分が過ぎていた。キョロキョロと辺りを探したが、葵さんの姿はどこにも見えない。そこには、頭に蛇をくねらせたメドゥーサの石像が、そのむなしい目を見開いているだけだ。
（怒って帰ったのか、ちょっと遅れたぐらいで……約束を忘れたとか……まさか）
ぼくはうろたえた。相手がいなければ、プロポーズのしようがない。付近を見回しながら、神殿の方に歩いて行った。
崩れたレンガ塀の角を曲がろうとした時、突然横から伸びて来た手に腕を絡め取られた。（あっ！）と思った時には、もうぼくの身体は宙を飛んでいた。地面に激しく背中を打ちつけ、「ぎゃ！」と悲鳴をもらす。仰向きに転がりながら見上げると、葵さんの怒った顔があった。
「なにさ！　遅れたら罰ゲームとか言って。本人がこれじゃしょうがないね」
彼女の怒声に気が動転した。「あふ、あふ」あえぎながら立ち上がる。
「ま、待ってください。これには、ふかーいワケが……」
「問答無用、言い訳なし。さあ、もう一丁いくか！」
彼女はまたぼくの腕を取った。
「ちょ、ちょっと。話を聞いて。聞けばわかる！」
まさに背負い投げの体勢に入ろうとしている彼女に向かって、必死に懇願する。
「ふん！　深い訳ってなに？　聞けばわかるって？　じゃ話してみなさいよ。納得できなかったら、背負い百回だからね」
彼女は腕をつかんだまま放そうとしない。
（ほんとうにやる気だ。この人）
「実はぁ……これ、これ、しかじかで……」

ここに来る途中で菖蒲尼様に出会ったことを話した。
「ふう〜ん、あの方と……」
彼女は、そうつぶやいてようやく手を離した。どうやら納得してもらえたらしい。ぼくは「ふう〜っ」と安堵の息を吐いて、シャツやGパンについた埃を払う。
葵さんはアゴに手を当ててなにか考えている様子だったが、ふと我に帰ったように目をパチクリさせると「あなた、それ！」と、ぼくの穿いているジーンズを指差した。
やっと気づいてもらえたようだ。わざと彼女の目の前でパンパンとGパンを叩く。
「あはっ！　ははは っ」
口を開けて笑われた。
「な、なんで笑うんですか！」
ムッとして睨みつける。
「だって、おかしいんだもの。いつもダサイのに。あっ、気を悪くしないでね、普段と違うからそう思っただけ。こうして見ると、男の人みたい。カッコいいよ。マジ」
葵さんのほめ言葉に、たちまち機嫌が直った。さらに彼女の姿を見て、ますます気分がよくなった。いつも制服かジャージ、作業服のイメージしかなかった彼女が、白いブラウスに海のような青いスカートを身につけている。まだ十七なのに、二つ三つ年上に見える。
「葵さん、今日はとても美しい。若い女性の魅力ですね。きれいです、すてきです、さわやかです」
言葉を尽くしてほめまくった。
『今日は』ってところが気になるけど、ほめるの、お上手ねえ」
彼女はスカートの裾を摑かんで、「えっへへ」と照れ笑いした。そしてくるりと背を向けると「さあ、行きましょか」と歩き始めた。
「はあ、『行きましょか』って、どこへ？」
「キャンプ場に決まってるじゃない。今頃、調理部の屋台が出ているはず。おでんに、うどん、そば、いろいろやっているよ。わたし讃岐うどんが食べたいわぁ」
「はあ、讃岐うどんですか」
肩がガクッと落ちた。今日は葵さんを森に連れ込み（木漏れ日の下で熱いキスを）と意気込んで来たのに、なんだか気勢をそがれたようで……。
葵さんは青草の生い茂るこの廃園を抜けて、森の小道を足早にキャンプ場へ向かう。背中に垂れた長いおさげの髪が、腰のあたりでぶらぶら揺れている。

ぼくは急いで追いつくと彼女の腕を取った。
「ねえ、遠回りしませんか。森の中とか」
「遠回り……。なんで？」
彼女は怪訝な表情で見返す。
(「なんで？」って聞かれてもなあ……)
「空が青いからですよ。もちろん！」
ぼくは高く晴れ渡った蒼天の空をピシッと指差した。
「空が青いと、遠回りしなくちゃいけないの？」
「そりゃそうですよ。だって、昔の歌にあるでしょう『空がとおっても青いから～』って」
「それは空じゃなく、雲。いや、星だったかしら。よく覚えてないけど……」
彼女は幼い頃の記憶をたどるように「う～ん」と額に手を当てる。
「ま、まあ、いいじゃないですか。とにかく、空が晴れて気持ちのいい日には、遠回りしたほうが得なのですから」
「そう、そんなもんかしらねえ……」
「そう、そんなもんですよ。さあ、さあ」
ぼくは赤ずきんちゃんをだまそうとする狼のようなしつこさで誘う。
「じゃあ、ちょっと道草しようか」
葵さんは訝しそうな表情でぼくを見つめていたが、ついに承諾した。
「では、さっそく」
彼女の気が変わらないうちにと、急いで森の中に引っ張り込む。

明るい広葉樹の生い茂る初夏の森はとてもさわやかで、木立の中を吹く風がたまらなく涼しい。ぼくは木漏れ日の下を、彼女の手をしっかりつかんで、奥へ奥へと入って行った。
しばらく歩くと小さな円形の空き地があった。日の光がそこだけ円く射し込み、あたり一面、緑の芝草に輝いている。空き地の中央には大きな切り株があって、それはちょうど丸椅子の代わりになりそうだ。
周囲にはブナやケヤキが黄緑色の葉を茂らせている。まるで緑の光に包まれた異世界に入り込んだような気がする。
「どうです、ここ」
ぼくは満面に笑みを浮かべて、葵さんを振り返った。
「よく来るの？」
彼女は驚いたというより、意外だという表情でぼくを見つめた。
「ええ時々、一人でぶらりと。ここにいると、心が落ち着くんです」
「ふうん、あなたって、けっこう詩人なのね。ここは『緑の滝』というの。ほら、木の上から緑色の蔦がたくさん垂れているでしょう。あ

れが滝に見えるのよ。園芸部秘蔵の場所だけど、よく見つけたね」
そう言いながら片手で前髪を掻き上げ、ぼくを見直すような眼差しを送って来た。
それからぼくたちは、大きな切り株に並んで腰をかける。
心地よい風がさらさらと流れて来る。葵さんは両手を膝に置き、放心したように緑の流れを見つめている。その横顔がとても美しい。
ぼくはそうと手を伸ばし、葵さんの肩に触れる。彼女のビクッとする感触が伝わって来た。
(案外うぶなんだ)
うれしくなって、そのまま引き寄せようとした時、彼女は「きゃ!」と叫んで立ち上がった。
「ほら、そこ、そこ!」
彼女の指差す所に、長い耳をピンと立てた小動物がいる。それはキョトンとした丸い目をこちらに向けていた。
(う、うさぎだ!)
灰色のうさぎがピョコンピョコンと広場を横切る。さらにもう一匹、草の陰から走り出て来た。二匹のうさぎは木立の間を戯れるように跳ねて行く。
「きゃーっ、かわいい!」
葵さんは叫びながら追いかける。ぼくも仕方なくついて行った。
(ちぇっ、もう少しだったのに……)

4

うさぎを追いかけながらしばらく行くと、森が開けてキャンプ場に出た。ここは相変わらず賑わっているようだ。広場のそこここに、大小さまざまのテントが張ってある。今はもう太陽が中天を過ぎているので、テントを畳む作業があちこちに見られる。ぼくたちはその間を縫うようにして、屋台の出ている山小屋の方に向かった。
ぼくが葵さんの横にくっついて歩いていると、生徒たちが(おや?)という顔で振り向く。中にはカメラのシャッターを切るやつもいる。
(ああ、これでまた校内マスコミが喜ぶなあ……)
鶴女通信の次回紙面が目に浮かぶようだ。ぼやいていると、中一くらいの女の子が走って来て、ぼくらの陰に隠れた。なにをしているのかと見ていると、向こうから別の子が追いかけて来て「アッちゃん、みーつけ」と叫んだ。隠れていた子が悔しそうに出て行く。なんのことはない、かくれんぼ遊びをしているのだ。ぼくも小学二、三年の頃にやった覚えがある。

（中学生にもなって……）
あきれていると「小さい子はいいよね」と葵さんがつぶやいた。
「ちいっと、幼な過ぎやしませんか」
駆けて行く女の子たちを眺めながらそう批評する。
すると葵さんは（なにを言ってるの）という顔をした。
「世間の子が変なのよ。外にも出ず、毎日ゲームばかりしてる。アレ、麻薬中毒と同じね。脳が成長しないうちから、あんなことばかりしていると、まともな人間に育たないよ。仮想と現実の区別がつかなくなるの。わたしは中一の時、重い病気を患って、この学園から実家のある横浜の学校に移ったけど、そこじゃ、とても荒れてたよう。あなたのとこでもそうだったのじゃない？」
「中学はそうでもなかったですよ。でも小学校はひどかった。みんなゲームやってたけど、それが原因だったのかなぁ……」
「ま、ここは全寮制だから、やろうたってできないからね。付属の小学校では厳しく禁止しているし」
話しながら丘を下っていると、ひと組の男女に出会った。いや、二人とも女なのだが、一人は背が高く身体もごつい。ぼくと同じ男脳を持つ黒木カズだ。もう一人は赤木宮子（愛称『宮』）。二人が聖婚（せいこん）（女生徒同士の学内結婚）して日見子になったのは十日ほど前。仲睦まじく手を取り合ってこちらに歩いて来る。ぼくらを見ても気がつかない。どうやら二人だけの世界に浸っているようだ。
「よう！」
声をかけると、ハッとしたようにこちらを振り向いた。
「シン！」
「シンさん！」
同時に声を上げる。
「あっ、葵様も」
宮が恥ずかしそうに微笑む。
彼女は聖婚以来、数段美しさが増したようだ。頬に艶が出て、とても色っぽく見える。特に今日は白いブラウスに緑のスカート。まるで白い薔薇の大輪が咲いているようだ。
対するカズはグレーのスーツに黒い革靴。頭にはなんとダーク調の中折れ帽子。いずれも男物だ。驚くより先に（かっこいい！）と思ってしまった。
「これ演劇部の衣装よ。カレ、今度の劇、チェーホフの桜の園で、ロパーヒンの役をやるの。どお、似合うでしょう」
宮が片手で彼（？）の腕を取りながら説明する。
ぼくはロパーヒンがどんな登場人物かを知らなかったが、宮の誇ら

しげな様子から察するに、かなり重要な役なのであろうと推測した。
ここは女だけの世界。男の背格好をしているカズは演劇部にとって、貴重な存在だろう。空手部との掛け持ちではきついと思うが、彼（？）は女生徒たちに交じって楽しそうに発声練習などをしている。
「どうだい、新婚の気分は？」
ぼくは多少やっかみを含んだ調子で尋ねる。
彼女は隣のカズと目を合わせ「ふふふふっ」と笑った。
「シン、ありがとう。改めてお礼を言うわ。それから葵様にも。あたしたちがこうしていられるのも、あのケダモノの手から、お二人に助けてもらったおかげです。ほんとうにありがとうございました」
彼女は深々と頭を下げた。同時にカズもピョコンと照れくさそうにお辞儀をする。
（さすがクラス委員。りっぱな挨拶）
感心していると、葵さんがツツツツと前に出て二人の手を取った。
「黒木君、宮ちゃん、とってもお似合い。よかったね。これからも、ずうっと仲よくするのよ」
そう言って、にっこり微笑む。
二人は涙を流して感激していた。
彼女たちと別れて山小屋の近くまで来ると、屋台がいくつか軒を連ねていた。ここはかなり繁盛しているようだ。
葵さんと二人、讃岐うどんをトレーに載せて、さてどこに座ろうかと見回せば、「葵、こっち！」とテーブルの一つから手が挙がった。
「美里！」
葵さんも手を振って答える。
見ると、ちょっと離れたテーブルに生徒会の副会長をしている一ツ葉美里（ばみさと）がいた。同じ席に会長の高城智世（たかじょうともよ）。美里様は白いブラウスに藤色のスカート、智世様は空色のワンピース。二人仲よくサンドイッチを摘んでいる。
「あそこへ行こう」
葵さんはぼくをうながすと、トレーを持ってさっさと歩いて行く。
ぼくは、ちょっと、いや、かなり戸惑いを覚えた。なぜって、タヌキ顔の庶民的な美里様はともかく、智世様は全学生の代表。理事長を議長とする高校運営委員会（七人会）のメンバーであられる。さらに生徒たちからは『アウグスタ』とか『女帝』とか呼ばれて敬われ、また恐れられてもいる。そのような偉い方と同じ食卓を共にしてよいものだろうか。学年初めに催されたクラス委員の懇談会では、気さくな方のようにお見受けしたが……。

ためらっていると、葵さんが（早く来なさい）と手招きする。しかたなく彼女に続いて同じテーブルに着いた。荒削りの板を張っただけのテーブルに、木の椅子が四脚。葵さんが先に座ったので、残る一つに掛ける。なんと真向かいが智世様だ。

葵さんと美里様は気が合うのか、さかんにおしゃべりを始めた。智世様は時々「ふん、ふん」と相づちを打つだけだ。

ぼくは女同士の会話にはとてもついて行けないので、下を向いたまま、ひたすら讃岐うどんを口に運んだ。おかげで、一人だけあっという間に食べ終わった。ハンカチで口元をぬぐって顔を上げると、智世様とバッチリ目が合った。面長の顔。透き通るような白い肌。切れ長の目に黒い瞳。

（美しい！）

思わず感嘆の声が漏れそうで、あわてて口元を押さえる。

こっそり隣を見ると、葵さんは相変わらず美里様とお話に夢中の様子。目を正面に向けると、智世様が真っ直ぐぼくを見つめている。なんだか女王様に心を覗かれているようで、はなはだ居心地が悪かった。

（なにくそ！）

ぼくも負けじと睨み返す。相手が女帝だろうがなんだろうが、同じ鶴女の生徒なのは変りないのだ。

しばらくそうしていると、彼女は「ぐぶっ！」と奇妙な声を吹き出した。ここで、ぼくには理解できない暗号のような言葉でお話中の美里様と葵さんも、何事かと振り向く。

「ぐぶっ、ぐぶっ、ぐぶっ！」

立て続けに奇妙な声をもらした智世様は、ぼくを見つめながら「君って、おもしろいね」と、男のような口調で言った。

「お、おもいしろいですか」

オウム返しに聞く。ほかの二人は会話の筋が見えないようで、けげんな顔をしている。

「そう、とてもおもしろい。葵の友達だってね。よかったら生徒会に来て手伝ってくれないか。いろいろと」

「はあ、お手伝いですか？」

「生徒会は僕たち三人と、各委員会の長で構成されているのだが、なにせ人手不足でね。今日もこうして、休日返上で出張っているわけさ。今、見回り中だよ。この麗しき乙女の園は、編執狂の男たちに狙われているようだからさ」

話しながら、彼女は胸にかかる漆黒の髪を片手で掻き上げた。

ぼくは返答に窮した。「生徒会を手伝ってくれ」と言われたのもそうだが、このビーナスより美しい人が「君」とか「僕」とか、男言葉を

使うのには、かなりの戸惑いを覚えた。
「なあに、手伝いといっても、君の暇な時でいいよ。葵も喜ぶだろう。いつも一緒にいられるからさ」
彼女は「ははははっ」と白い歯を見せて豪快に笑った。
「智世、それは！」
葵さんが気色ばんで睨みつける。
「いいじゃないか。ここの生徒会は教職員並みの権限を持っているのだ。個人情報も数多く握っている。めったな者には任せられない。その点、この子なら大丈夫。それは君たちにもわかっているだろう」
彼女は相変わらず優雅な姿勢を保ちながら、葵さんと美里様の顔を交互に見つめる。
ぼくには智世様がなにを言っているのか、まるで理解できなかった。自分は一介の新入生に過ぎない。そんな者に『めったな者に任せられない』仕事をさせてよいのだろうか。そのことを、なぜ葵さんも美里様もわかっているのか？
「美里、これは、あなたも承知なの？」
葵さんは智世様のペア、美里様に矛先を向けた。
だが、彼女は難しい顔をしているだけで、答えようとしない。
「美里、なぜ黙っているの？　あなたと智世は日見子の間柄じゃない。お互い、なんでも分かち合っているはず。智世は、いったいなにを考えているの？」
「智世は……舞鶴グループの全体を考えているの。学園だけじゃなく、関連の企業も含めて……」
彼女はようやく重い口を開いた。
「それは、理事長もご存知なのね」
葵さんが確かめるように身を乗り出す。
ぼくは話がぶっ飛び過ぎて、ついて行けなかった。
（自分が生徒会を手伝うのに、なんで舞鶴グループの将来が出て来るんだ？）
美里様はなにか言いかけたが、智世様が手で止めた。彼女の視線を追うと、中学生と思われる幼い顔の一団がこちらへ近づいて来る。
彼女たちはテーブルの近くまでやって来ると、恥ずかしそうに立ち止る。するとその群れの中から、背の高い子が押し出されるようにおずおずと前に出て来た。
「あのう……高生会（こうせいかい）の方ですよね」
その子がためらいがちに話しかけて来る。ちなみにこの高生会とは高校生徒会の略で、なにかの高齢者団体ではない。
「そうよ、どうしたの？」

美里様が微笑みながらたずねる。
「サ、サインをお願いしたいのですが……」
彼女は手に生徒手帳とボールペンを握りしめている。
「いいわよ。誰のサインが欲しいのかなぁ？」
美里様だけでなく智世様も葵さんも、今までの深刻な顔が一変して、満面に笑みをたたえている。
（スターなんだ。この人たち）
同じ生徒でありながら、はなはだしい身分の違いを感じた。
「み、みんなのサインです」
少女の顔は赤く染まっていた。
「みんなって、この人のも？」
美里様がぼくを指差す。
「は、はい。シン……いや、シン様も、けっこう有名ですから」
少女は、ぼくに向かって薄く微笑んだ。
「ほぉーっ！」
このやり取りを見ていた智世様が、腕を広げて大げさに驚いて見せた。
「シン様だって。有名だって。君もいよいよ僕らのお仲間だねえ。こりゃあ」
「智世！」
葵さんがたしなめようとするが、この王子様（いや、女だから王女様か）は一向に態度を改める様子はない。
「いいよ、お嬢ちゃんたち。みんな寄ってらっしゃい、見てらっしゃい。なんでも書いたげるよ」
智世様はその子の後ろで固まっている少女の一団に向かっておいでおいでをする。
たちまちサイン会が始まった。ぼくは生まれて初めてサインなるものを書いた。それも十数枚。サインをねだった少女たちは各々名乗っていたが、とてもみんなの名前を覚え切れるものではない。全員が中学三年だとはわかったが。
サイン会が終わると、智世様と美里様は「これから神殿の方を見に行く」と言って立ち上がった。
「ぜひ来てくれ。待ってるよ」
別れ際、智世様はぼくの肩に手を置いてそう言ったが、葵さんと目が合うとニヤリと笑った。
「いや、この話は葵に頼んだ方がいいのかな」
それから二人並んでスカートの裾を風に翻しながらキャンプ場を出て行った。

「二人だけで大丈夫かなぁ……」
ぼくは彼女たちの姿を目で追いながらそうつぶやいた。
「あたり前よ。智世は空手三段。美里は合気道二段。誰があの二人にかなうものですか」
葵さんは不機嫌そうに額に筋を立てていた。
「でも、あれですね。智世様が、あんな言葉を使うなんて」
ぼくは、彼女の麗しい容姿と、さばけた男言葉との隔たりに、かなりの違和感を覚えていた。
「どう、幻滅した？　でも中学の頃はね、ああ、わたしは病気で転校したから、一年だけしか知らないのだけど、あんなじゃなかった。頭がよくて美人なのは同じだけど、普通のお嬢様だったの。去年この学園に戻ってみると、とても変わっていた。ほんと驚いたよ」
「ぼくや蘭先輩と同じじゃあ……」
「それはないと思う。ああ見えても、遊ぶ時には女に変身するの。『あたし〜い』とか『そうですわぁ』とか言って」
「嘘ぉ、信じらんな〜い」
思わず女のような声を上げた。
「美里に聞いたのだけど、なんでも脳を使いわける訓練をしているらしいよ」
「えっ、脳を？」
「ほら、男性は右脳と左脳の連絡が悪いでしょう。ところがそれが幸いして、議論なんかする時に感情抜きで冷静な判断ができる。智世もそれを目指しているらしいよ。考える時には右脳を切り離す。楽しむ時はそこを繋ぐというふうに」
「ま、まさか！　意識して脳を使いわけるなんて……そんな器用なことが人間にできるんですか？」
驚いて葵さんの横顔を見つめた。それが可能なら『女は感情の動物』などと、男たちに揶揄されることもなくなるだろうに。
「まあ、普通は無理だよね。でも脳って、まだほんの少ししかわかってないのでしょう。訓練次第で、できるようになるかも知れないよ」
「で、どうやって訓練しているのです？　やっぱり専門医にかかるとか」
「校医で、生物の教諭で、大学の準教授もしている松原先生よ。あの方は脳神経外科のエキスパートなの。世田谷の舞鶴女子大で、そういう実験をしているらしいよ」
「ふうん、あの先生、そんな研究をしてるんだ」
（道理であの先生、医務室と教室では性格がガラリと変わるのか）
校内の医務室で、生徒たちを診る松原女医は態度も言葉つきも男そ

のもの。ジーンズに白衣姿は女生徒たちのあこがれの的になっている。ところが教室で生物学を教える時には、一転してブラウスにミニスカート。声はやさしく、なよ〜っとして成熟した女の雰囲気をかもし出している。それはそれで魅力があるのだが、そのあまりのギャップに同一人物とはどうしても思えない。

「ほんとうに脳内で変化が起こっているのか、意識的にそう見せかけているだけなのかはわからないけど、別人みたいになるのは間違いないわね」

「ふうん、そんな研究をしてるんだ……」

ぼくはちょっと興味を引かれた。

「どお、あなたもやってみる？　脳がうまくあやつれて、女になるかもよ」

その言葉に胸をグサッと刺された。

「葵さん！」

思わず大きな声が出た。

「な、なんですか、その言い方は。侮辱です、セクハラです。抗議します！」

「あ、悪かった。ゴメン。気にさわった？」

彼女がめずらしくうろたえる。

「オレ、これでずうっと悩んでいるんです。『ゴメン』なんかじゃ納得できません！」

ガタン！　と椅子を蹴って立ち上がった。荒々しくトレーを手に取る。

「どこ行くの？」

「帰るんです。もちろん！」

手にしたトレーを乱暴に店に返して、一人でさっさと歩いて行く。

「ねえ、待って！」

葵さんがスカートをバタつかせながら追いかけて来る。

5

ぼくは顔面に怒りをたたえて、森の小道を早足に歩く。ここは中学校の茶畑に通じる細い道だ。人はめったに通らない。ぼくは葵さんが追いつけば足を速め、離れればゆるめた。

「待ってって、言ってるでしょう！」

彼女が走って来て、後ろからぼくの腕を取った。

（今だ！）

急に足を止めて振り返る。勢い、彼女がぼくの胸に飛び込んで来る。

その柔らかい身体を両手で抱き止めた。
「なっ、なにを！」
驚く葵さん。
「謀った？」
事情を察した彼女は、あわててぼくの腕を取ろうとする。背負い投げをするつもりなのだろう。また投げられてはかなわないので、彼女の背中に回した両手に思いっきり力を込めた。もがいて逃れようとするのを強引に引き寄せる。力比べになったが、脇を取っている分こちらが有利だ。彼女はしばらく抵抗していたが、やがてあきらめたように力を抜いた。
だが安心してはいけない。罠かも知れないのだ。この人が一筋縄でいかないことぐらい、とっくに経験済みだ。腕の筋肉を総動員してなおも締めつける。彼女の柔らかいおっぱいが、ぼくのそれと触れ合ってなんともくすぐったい。
「きゃーっ、やめて。投げたりしないから、やめてぇー」
彼女は突然ケラケラ笑い始めた。ぼくが手を離してからも、なおも笑い続けている。
だが、ぼくが渋い顔で腕組みしているのを見ると、笑うのをやめて真顔になった。
「悪かった。ほんの冗談のつもりだったの」
「冗談でも、言っていいことと悪いことがあります」
ぼくはあくまで気難しい顔を通す。
「だから、悪かったと言ってるじゃない！」
ぼくのかたくなさに次第にイラついて来た様子。
「わかりました。きれいさっぱり忘れます。はら、もう全然怒ってませんよ」
ぼくは両手を広げて、にっこり笑った。
「ありがとう」
彼女もホッとしたように笑顔になった。
「葵さん」
そこでぼくは予定通り彼女の両手を取った。
「ん、なに？」
彼女も大きな目で見つめる。ぼくはそのまま抱き寄せようとした。
と、まさにその時、道の向こうからワーワー騒ぐ声、バタバタ走る音が聞こえた。幾人かがこちらに駆けて来る。ぼくたちはお互いパッと離れた。
（チュ、チューボーだ！）
反射的に葵さんの陰に隠れる。

キャンプ場の方から五人の少女が駆けて来た。先ほどサインをねだった子たちよりかなり幼く見える。きっと一年生だろう。
彼女たちは葵さんの姿を認めると、「葵様だぁ！」と叫びながら近づいて来る。
（いかん、見つかる！）
チューボーはぼくの天敵。最近ぼくを揶揄する歌など作っておもしろがっているという。
葵さんのそばにやって来た少女たちは、たちまちぼくを見つけた。
「ねえ、誰かいるよ。葵様の後ろに隠れてるぅ」
一人が回り込んで来る。その子と目が合った。
「あっ、シンだ！　ねえ、来て、来て。シンだよ。シンがいるよ」
たちまち取り囲まれた。
「シンだぁ。シン、シン、シン、タチバナシ～ン」
節をつけて歌い始める。まるで小学生みたいなはしゃぎようだ。
「ねえ、あなたたち、今そんな歌が流行っているの？」
葵さんが興味津々といった表情で聞く。
「ええ、葵様。とおっても、おもしろいですよぉ～」
「どんな歌？」
「お手合わせ歌です。二人で、こうやって手を繋いだり、手の平を合わせたりして歌います」
彼女たちは二人で向き合うと手を繋ぎいで「せっせっせっ」とやって見せた。
「ああ、それ、『せっせっせっ、ぱらりこせー』と歌うのでしょう」
「そうです。葵様、よくご存知ですねぇ」
「小さい頃遊んだけど、よく覚えてないの。よかったら、ここでやって見せて」
ぼくはあわてた。（やめろ、やめろ！）と念派を送ってみたが、もとより念力など通じる相手ではない。
「じゃあ、やりますね」
彼女たちは、ぼくの気持などお構いなしに始めた。二人で向き合い、お互いに手を打ち合わせながら歌う。

シンシンシン　　タチバナシ～ン
南の門から　　校庭抜けてナ
歩いて来るのは　　オトコ？　オンナ？
まぁるいメガネに　　ジーンズはいて
寮にはいれば　　ふ～くろダタキ
泣きたいな～ぁ　　泣きたいな～ぁ

どうやら初めて寮に入った時、男と間違えられて女生徒たちに殴る蹴るの暴行を受けた時のことを歌っているらしい。

シンシンシン　タチバナシ～ン
さくら満開　地蔵の前でナ
待っているのは　どんな人？
おばさん麦わら　取ってみれば
現れたのは　葵さま～ぁ
奇麗だな～ぁ　奇麗だな～ぁ

これは講堂裏の築山で、葵さんと初めて二人だけで会った場面だ。誰かにしっかり見られていたらしい。

シンシンシン　タチバナシ～ン
夏も近づく　茶摘みの庭でナ
喧嘩の相手は　葵さま～ぁ
柄に似合わぬ　激論吐いて
首を絞められ　青息吐息
苦しいな～ぁ　苦しいな～ぁ

これは茶畑のあぜ道で、葵さんを怒らせ首を絞められた時の情景。

歌い終わると、彼女たちは「わあーっ！」と歓声を上げて手を打ち鳴らした。

「コラーッ！　このクソガキがぁー！」

怒り心頭に発したぼくが、怒髪天をつく勢いでげんこつを振り上げると、少女たちは「きゃあ！」と叫んで一斉に逃げ出した。たちまち木立の向こうに姿を消す。後には道路の土ぼこりが薄く舞い上がっているだけだ。

（逃げ足の速いやつらめ！）

憤まんやり方なく地団太を踏む。

（葵さんは？）

振り返ると、彼女は雑草の生えた細い砂利道に『く』の字になって笑い転げている。ああ、その青いスカートがほこりまみれだ。

（第二話了・続きは第三話で）

初初（ういうい）しい季節

―夏の抄―

中川　とら

出かけるのは、いつも夏休みの夜だった。

母は昼間働いて、帰って来ると洗濯をするのが日課だったから、それから食事の支度をし、仕事から帰って来た父と中学生の兄、家族四人で少し遅い晩ご飯を食べ、後かたづけを済ますと、大抵その頃になってしまうのだ。

久びさに乗った電車の中は、やけに明るい。母と二人、高砂から京成電車で日暮里まで行き、そこから京浜東北線に乗り替えて多摩川方面へ向かっていく。そこには母の妹家族が住んでいて、一年に一回会いに行く約束があった。同い年の女の子がいて、毎年、楽しみにしていた。

昭和三十年代の電車は今と違い、さして混んでなく、ほとんど座れた。新聞を広げる人、足を開いて眠り込む人、腕組みして上を向きぼんやりしている人、大方が仕事帰りの壮年だ。扇風機が回り、人息とポマード、タバコの煙、さらに床板の油くささがかき回されて、都会で働く疲れた大人の臭いがした。鼻から胸、やがて胃にそれが届くと無性に気持ちが悪くなってくる。

東京駅を過ぎた頃、母は後ろの窓を少し開けてくれ、外を見るよう私をうながした。そして、小さくやさしい声で「次は有楽町、その次は新橋、ほら見なさい、ネオンのきれいなこと」と言った。

キラキラ色とりどりの光が踊っている夜の街から、湿って涼しい風がいっきに入ってきて、母と私は思わず目を細めた。ガタン、ガタン、ガタン、どこまでも一本調子で走っていく電車の音しか聞こえない。

今思い出しても、この時の母はやさしかった。日頃「ああしてはいけない」「こうしてはいけない」「なぜ　そういうことになるの」とヒステリックに家族を叱りとばす姿に、父も兄もそして私自身が一番閉口してたから。

母がやさしくしてくれる理由、それは私にあった。

六年生になったばかりの四月頃のことだったと思う。教室は午前中の中休み、トイレに行ったり、みんな賑やかに席を離れておしゃべりを始めた。

休み時間、窓を開け空気を取り替えるのは日直当番の仕事だ。教室は畑に面していて、少し離れたところに民家が散在していた。この季節になると、春の暖かく眩しい日差しが教室いっぱいに注ぐ。

私は好んで窓ぎわに座りたがった。それもできれば後ろの席に。そこで友達とおしゃべりしたり、本を読んだり、ぼんやり外を眺めるのが好きだった。思うということは、叶うということだろうか、一学期、大好きな席を獲得できた。

その日は、良子さんとノートの端にマンガの主人公を書いたりしていた。突然、窓の外に向かって誰かが叫んだ。

「くせー！　くせー！」

すると、ぞろぞろと何人かの男子達がやって来て「あー！　くせー！」と鼻をつまんで笑いながらはやし立て、更に大きな声で「くせー！　窓閉めろよ！」と怒鳴り始めた。女子達も、部屋の中に入ってきたその臭いに「閉めて！」と黄色い声を上げ始めた。私は外を見、その瞬間ある人を見た。

「高山さんのおじさん！」

男子の騒ぐ声が、おじさんに聞こえてないはずはない。その位、畑は細い道を挟んで校舎に接近している。だのにおじさんはもくもくと肥桶の中から柄杓で肥やしをすくい一心にまいている。

肥やしをまくのはこの畑に限ったことではなかったが、ここの畑がおじさんの畑だとは知らなかった。

高山のおじさんは、我が家の近くに住んでいる農家の人だ。広い畑地を持ち、それは少し離れたところにも点在していた。昔は、お米も作っていたらしいが、手間がかかるのか、今ではもっぱら野菜作りに専念していた。家は勿論立派なもので、この辺りでは知らない人はいない。二人お子さんがいて私より小さい。おじさんは又、温厚で愛想

がよく、いつもニコニコして腰の低い人だった。
　我が家にもそう、月に一回忘れかけた頃、汲み取りにきてくれ、それを肥料として使っていたのを私は当然知っていた。いつも玄関に植えてある八つ手の葉とおとなりの枇肥の木の間の細い道を、肥桶竿を担ぎ上手に通って裏に回る。用を足そうと思って御不浄の戸を開けた瞬間、急に内が明るくなって慌てて引きかえすこともよくあった。
「どうしたの？」
「汲み取り！」
「我慢しなさいよ」
「はい」
　汲み取りが終わって二、三日すると、決まって収穫の贈り物が縁側に置かれてあった。白菜、ねぎ、きゃべつ、どれも新鮮なとれたてだ。
「立派な白菜！　漬物にしましょう。助かるわ！」
　母は感謝していた。

　教室の窓はたちまち乱暴に閉められ、私の隣の窓が残った。
「閉めろ！」
　男子が挑戦するように言った。私は無言で拒否した。不意を打たれた彼は、「何だ こいつ！」と言って、自分の席へもどり、側にいた男子達に「吉野のやつ、変なやつ！」と言っていた。
　先生が戻ってきた。すぐに眉をしかめ、外の方をみるなり「そこの窓閉めなさい」とまだ開いているそれを指さした。や、いなや「先生！吉野は、閉めないって言うんだよ！」
　さっきの男子が声を上げ、「なぁー」と回りの子達に同調を求めた。教室は何とも言えない空気が流れる。眼鏡の奥の先生の細い目が私に向けられ、心は決まった。
「絶対にしめるものか」
　私はなぜか冷静だった。先生を真直ぐに見かえし、無言で立ち上がり、まだ少し残っていた窓の端をしっかり開け、だらりと下がっている生成り色の薄汚れたカーテンを固結びした。外は、肥やしをまくおじさんの頭だけが見え、のどかな春の日差しがいっぱいだ。
　教室はしんとなり、誰も何も言わない。先生は更に眉をしかめ、つかつかとやって来て、窓を閉めた。そして少し力を入れて、カーテンの結びを解き、教壇に戻ってから教科書を開くように言った。
　みんな見て見ぬふりをしながら私を見ていた。が、先生はそれから何日も私を見ることはなかった。
　その日以来、何人かの男子達は私と会う度、「くせー　くせー奴！」と言うようになった。私は、それこそ「へ」でもない。

むしろ清々しい気持ちだ。ただ先生が私と目を合わせないということは、心の中に少々、重りを持ったような気分だった。

二週間ほどたったある日の朝、転校生が来るらしいというニュースが入った。その通り、一人の見かけぬ男子を連れて先生が入って来た。

「転校生です。名前は……」と後ろを振り返り、黒板にきれいな楷書で「金子和夫君」と書いた。

みんなの心の期待が失望に音をたてて変わっていくのを感じた。先生は無表情で話を続けた。

「金子君は九州から来ました。お家の方の都合で引っ越してきました。いろいろ分からない事ばかりだと思うので、みんなで教えてあげて仲よくしてください。じゃ、金子君からも一言」

そう言われた転校生は、もじもじと両手をズボンの脇にくっつけて言葉を捜している。というより戸惑ってしまった感じだ。

「何でもいいのよ。よろしくお願いします、でも」

促されて彼は小さな声で「よろしくお願いします」と言ったと思うが、私には「よろしくお願いちます」と聞こえた。

かなり伸び切った虎刈りの坊主頭、腕もお腹もひどく寸足らずの縮んだセーターを着て、くるぶしのずっと上で終わっている古いズボンの下からは、垢で汚れた細い足がのぞいて裸足だった。濃い眉の下の目はトロンとして、青っぱなが出たり引っこんだりしている。ランドセルではなく、古い布のようなうすっぺらな鞄を持っていた。

明らかに自分達とは違う少年に、失望が好奇の目に変わっていくのに時間はかからなかった。

「席はそこね。はい」

先生は金子君の背中に手をやり廊下側の一番前の一人席に連れて行った。うす笑いをしている者がいた。

私はすぐにいたたまれない気持ちでいっぱいになった。何かきっと深い事情があって引っ越してきたに違いない。それにしてもどうして上履きをはかないんだろう。お金が無くてお風呂にも入れないんだろうか。想像すればするほど、金子君の境遇が大そう不幸そうで、悲しい思いが膨らんでくる。

授業が始まっても金子君は借りてきた猫のようにじっと座っているだけで、先生から手渡された教科書を見るでもなければさわるでもない。まるで仏像のようだ。

しかし何日かして私達は、金子君が実は字が読めないらしいことが分かったのだ。小学校六年生にもなって何故？

驚きは、何人かの女子の同情を引き出し、字を読めるようにしてあげたいというグループができた。勿論私もその中に入っていた。

休み時間と放課後を使って、ひらがなとカタカナの五十音表を作ることにした。字のきれいな恵子さんが、先生からもらった四つ切りの画用紙に方眼をつくり、マジックで黒々と書き始めると、女子達は声をそろえそれを読んだ。

「カードも作ったらどう?」

私が提案すると、「そうね!」と賛同し、作業はあっという間に終わり、翌日、金子君の机の回りには女子の人垣ができた。さっそく表を広げ、「金子君、字を覚えよう。毎日少しずつでいいから、むずかしくないわよ」

私が言うと、彼は恥かしそうにただニヤニヤするばかりで、何も言わない。

「大丈夫　簡単だからね!」

恵子さんが言った。

「いくわよ、あ・い・う・え・お ネ!　か・き・く・け・こ さ・し・す・せ・そ た……」

「ちょっと待って!　いっぺんにはむりでしょう。今日はア行とカ行、明日はサ行とタ行がよくない?」

心優しい良子さんが言った。

「そうね　そうしましょう」

恵子さんは鉛筆で文字を指し、「金子君、後からついてきてね。あ、い、う、え、お はい」

金子君は言われた様に、でも蚊の鳴くような声で、「あ・い・う・え・お」と後を追った。

「そう そう!」

みんなは嬉しそうに調子づいて続ける。

「もう一回 あ・い・う・え・お はい」

「あ・い・う・え・お」

遠くで「何だあいつら、バカか」という声がしていた。

休み時間が終わり、教室に入って来た先生が席へ戻るように注意した。手には新しくない上履を持っていた。

勉強は順調に進んだ。字が読めるようになると今度は書き取りの練習に入った。段々金子君も真剣になり、自分の意志で書いているのがはっきりと分かる。ノートはあっという間にうまってきた。なかなか力強く勢いのある字だ。

「すごいじゃん!」

良子さんが誉めると、照れ臭そうにニヤリとした。しかし、日にちがたつにつれ、人垣は少しずつ減って、やがて私だけが残った。そん

なある日、金子君が学校を休んだ。次の日も次の日も。
心配になり私は良子さんを誘い、中休み、学校から近いと言っていた金子君の家に行くことにした。二十分の間に行って帰ってこなければならない。時間がない。私達は走った。
しかし辿り着いたそこは、にわか造りの工場のようで、覗くとおばさん達がダンボール箱のような物に囲まれて忙しそうに働いていた。
天井が吹き抜けのように高くプロペラだけの扇風機がゆっくりと回り、責任者の人だろうか、おじさんが一人仕事用語で指示していた。
「あの、金子さんの家は……」
私は入口近くにいたおばさんに声をかけけた。
「金子さん？　あー、和夫君の友達かい？」
「はい」
「金子さーん！　何だかお客さんよー！」
おばさんは上の方に向かって大声で叫んだ。つられて私達もおばさんが声をかけている方に目をやった。
工場の奥の方に中二階らしきスペースがあって小さな部屋もどきの場所ができている。不思議な空間だ。そこから黒い髪を後ろで束ね、色黒であまり表情のはっきりしない女の人がぬーと顔をだした。金子君とそっくりだ。
「和夫君の友達だってさ！」
おばさんが言う。私は早口でその人に話しかけた。
「和夫君は病気ですか？　学校を休んでいるので、心配してきました！」
するとその人は面倒くさそうに、「あー」と言ってから少し間をおいて、「和夫、和夫！　ほら　友達がきているよ」と部屋の中に向かって大声を上げた。
すぐに金子君が顔を出した。病気ではなさそうだった。けれど私達を見て迷惑そうに「行かねー」と答えた。
「行ってこい」
お母さんはぶっきらぼうに息子に言った。が、もう金子君は顔をださない。あきらめて私達は走って学校に戻った。
道々私と良子さんは、「あんな所に住んでいるのねー」、「おどろいた……」と言うのが精いっぱいで、金子君の生活を目の前に見て複雑な思いだった。
帰ると、誰かが先生に報告したのだろう。私達は職員室に呼ばれ、叱られた。
「休み時間に学校の外に出てはいけないこと、知らなかったの？　そ

んなことする人は、今まで誰もいませんでしたよ。あなた達が初めてです」

先生は机の上を整理しながら、いかにも不愉快そうにつづけた。

「二度と休み時間に学校の外へ出てはいけません」

「はい」

時々、良子さんの方を見ながら彼女をさとすようではあったけれど、決して私を見ることはなかった。私は誘った責任を感じながら、先生の態度に、言うに言われぬ重い感情を味わっていた。

次の日、金子君は出て来た。

きゃべつ畑の上を、紋白蝶がひしめいて飛び回る時季が過ぎると、若葉の頃はあっという間に青葉に向かう。植え込みのつつじやさつきが深紅に色付き始め、春は長雨の梅雨前にまるで燃え尽きんばかりに染まる。

私はその頃、自分が無口になってきているのを感じていた。人とあまり話したくない。一人で本ばかり読んでいた。

金子君の隣には、先生のはからいで森君が座るようになった。森君は、口数が少なく運動がよくできた。いつも人より遅れて笑うので「蛍光燈」と呼ばれ、小学生なのに物事にあまりこだわらない『とっちゃんぼうや』みたいなところもあって、勉強は今一つだが男子達から一目おかれていた。

金子君の勉強は大方終わり、今は時々森君がカードで簡単なことばを作ったりして遊んでいた。

私達が注意を受けた後、恵子さんから「もう金子君に教えるのは、止めた方がいいわよ」と言われて、私は少しずつそれをしなくなった。それでも時々彼等の机の前を通りかかる時、無言でちょっとだけカード並べに加わり、「ともだち」「とびばこ」「おはよう」「おかあさん」などつい並べてしまったりした。すると森君はきまって「はなくそ」「おなら」「けつ」などカードを並べかえ、金子君を笑わせ、私をおこらせた。

一学期の終わり頃、母が学校に呼ばれた。どんな連絡方法で、いつ行ったのか、何が話されたのか、私は一切知らなかった。

事の詳細を知ったのは中学生になってからのことだ。授業参観にも来たことがない母が、仕事をお昼で早退して夕刻学校に出向く。母の心境はどんなだったろう。そこでは、金子君のこととそれに関わる私の行動、先生の感想があったようだ。母は先生から話を一方的に聞かされ、家での私の様子を質問されたらしい。

後に中学生になってから、聞かせてもいいものだけ選んで話してくれた。当然、父にも報告されたが、父は衝動的な人ではなかったから、親の心にしまって見守ろうということにしたようだ。なので、私は両親から詰問されることも急に態度をかえられるということもなかった。むしろいつもより穏やかで優しくなった感さえあったように思う。

金子君一家は、九州筑豊から来た人達だ。彼は炭鉱の町で生まれ育った。何年か前、鉱山が閉山すると、お父さんは職を捜して大変苦労された。生活がままならなくなった頃、出稼ぎが始まりいつしか連絡は絶えてしまったようだ。残された家族は遠縁の知り合いを頼って、東京へやって来た。長男の金子君がお母さんを支え、その日暮らしの生活をしてきた。住まいが変わる度、転校を繰り返すので、落ち着いて勉強どころではなかったのだろう。その上、お母さんは少し体が弱いということだった。

私については、一学期の通信簿の所感という欄にこう記述されていた。

『感受性が強く、大人びた行動が目立ち、子供らしさに欠ける』

成績も下がった。

いとこの家で過ごす日をいつもの夏休みより少し長くすることは、母の親心だったのだ。母手作りの雑のうには、宿題のテキストと着替え、そしてわずかな小遣いがはいっていた。電車を降り、そこからはバスがもう終わっているのでタクシーに乗った。いとこの家についたのはすでに十一時を回っていた。辺りは街灯が少なく静まりかえって、風が止まり蒸し暑い。

台所のたたきがそのまま玄関の代わりをしている入口だけが煌々と電気がついていて、やけに明るい。

「今晩わ」

母が声を落として遠慮がちに勝手口の戸をそっと引く。

「朝子ちゃん？　ワーいらしゃい！　お母さん、おばさん達よー！」

寝ずに待っていてくれたらしい従姉妹が、今にも飛び付かんばかりに迎えてくれた。

すぐに、化粧を落とした叔母がニコニコしながら出て来て、「いらしゃい！　今か今かと待っていたのよ、朝子ちゃんも久しぶりね！」と入口いっぱいに戸を開けた。

「すっかり遅くなっちゃって。おじゃまします」

母が奥にいる妹の夫に心もち声を大きくし、恐縮して挨拶をすると、

「いやー、お待ちしてましたよ」と、大部お酒が入ったらしい血色のいい顔の叔父が笑顔であらわれた。私達は、履物を入口の隅に行儀よ

く揃えて、部屋の内に入った。
　二軒長屋の叔母の家は、バス停から路地を幾つか曲がり、突き当たったところにあるおおきな鉄工場の裏手にあった。台所と六畳、四畳半の和室が二つ、外に気持ちばかりの短い縁側がついている。天井が妙に低いので、それぞれの部屋に電気をつけると本当に明るい。壁際に何段も棚をつくり、沢山の本が、びっしりと並んでいる。その下に、手造りらしい荒い木肌の座机が据付けられ、一目で留里ちゃんと弟の政君の勉強机と分かった。
　奥の部屋に蒲団が二組敷かれて、政君が寝ていた。
「もう遅いから、二人共寝なさい。留里ちゃん、朝子ちゃんにパジャマを貸してあげて。そうだ、喉が渇いているわね　麦茶、麦茶」
　叔母は台所に立って、コップに麦茶を入れてきてくれた。
「疲れたでしょう ―人共、流しで顔を洗うといいわ。ね、姉さん」
　今度は母と私に向かって言った。何かと心配りのある人だ。
　留里ちゃんが出してくれた水色とピンクのギンガクチェックのパジャマに着がえ、顔を洗ってから蒲団に横になった。解放された安らぎが体いっぱいに広がっていく。
　一年ぶりに互に成長した顔を見詰め合い寄せ合って、キャーキャーはしゃぎながら、私達はしばらく興奮して、とりとめのないおしゃべりをした。網戸からたまに風が入ってくると、トイレの消臭剤と蚊取り線香の強い臭いが交互にし、やがて知らないうちに、疲れて寝てしまった。
　叔母と母とは三人姉妹で、四つ離れたすぐ下の妹だ。母は次女で、長女は二〇代の時、結核でなくなっている。三人共東京の下町で生を受けた。所帯を持つ前に、父親を事故で母親を病で相次ぎ失い、二人はことの外寄りそって仲がいい。あけっぴろげで人情家の叔母は、女学校を出て働いた職場で、労働運動に熱心だった一つ年下の叔父に恋をして結婚した。叔父は、山手の苦労知らずのお坊ちゃんで、革命家を夢みる色白き青年だった。
「虐げられた労働者のために、権利の獲得を！」
「一致団結しよう！」
「これ以上、搾取されてたまるか！　立ち上がろう！」
　端整な顔から血潮たぎる言葉が出てくる度に叔母の心臓は高なったに違いない。歌声喫茶やメーデーも、きっと二人の愛を育んだ場所であっただろう。
　結婚し子供ができてからも、叔父の志は変わらなかった。しかし、叔母は子を抱え日々生きていく中で、現実という生活の重み、人生の真実を実感していった。同時に、親として子どもを育てる責任とよろ

こびは、叔母自身を人間として、ひと回りもふた回りも大きくし、やがて二人の物事への考え方は微妙に変わっていった。

次の日、母は「一週間のお泊りですよ、迷惑をかけないようにね」と私に念を押し、午後から仕事に出かける叔母といっしょに、「留里ちゃん、お父さんによろしく。いろいろとありがとう」と言って、先に帰って行った。

夏休みだから、日中は子供だけで過ごした。留里ちゃんは、小学六年生にしてはしっかりしていた。私が居ても、狭い部屋の中で甲斐甲斐しく家事をこなし、弟にも「宿題をしなさい、洗濯物を出しなさい」と声をかけ、私に学校の様子を聞いたりしながらも、台所のたたきに降りて洗い物をする手を休ませない。

私は学校の事については生返事に済ませ、「手伝うよ」と言うと、「いいの いいの、すぐに終わってしまうから」と手際がいい。

朝日が入りにくい部屋なので、午前中はひんやりと涼しく、掃除を済ませると御膳の上で各々の宿題をし、一休みしてから、たたみ上げた蒲団に寄りかかって本を読んだ。彼女はだらだらとしたところがなく、勉強も読書も集中すると一切おしゃべりをしない。

来た時にはよく分からなかった本棚は、よく見ると百科辞典、家庭画報、分厚い月刊誌、画集、子供世界文学全集、文庫本、参考書ありとあらゆる本が、一年間でこんなにも増えるものかと思うほどぎっしりと詰まっている。

しげしげとそれ等を見ている私に留里ちゃんが話しかける。

「朝子ちゃん、これ読んだ？」

彼女は『アンの青春』を取り出して私にすすめた。

「まだ『赤毛のアン』しか読んでない」

「私は『アンの娘リラ』まで読んだわ」

「本当？」

「ここにいる間に読めるわよ、どうぞ」

「ありがとう」

「私、大きくなったら、プリンス・エドワード島に行ってみたいの」

「えー！ 本当に？」

「カナダの島よ、作者のモンゴメリーはその島で生まれたの。若い頃、学校の先生をしながら詩や物語を書いていたんですって」

「本当に、本に出てくる通りのきれいなところなのかしら」

「きっと……」

こんな話をする時の彼女の目は、いっそう聡明にキラキラ輝く。留里ちゃんは、色白で鼻筋が通って整ったきれいな顔をしている。その

上、まつげも長く黒目がちで、いかにも利発そうな顔立ちといたら、それはそれは右に出る子はいないと言っていいほどの美形だ。いとこだから、どことなく似たところが無いでもないだろうが、やはり私とはお世辞にも似ていない。

母はよく「お父さんが違うでしょう」と言い、私は「ふーん」と答えながら、美しい彼女が自慢でもあり好きだった。

いつも正午を過ぎた頃になると、金網の囲いの向こうから工場で働く青年達が、昼休みのキャッチボールをする音が聞こえてくる。

キャッチボールの音は、聞き慣れた音だ。兄が、近所の子とよく家の前でやっていた。空地でも最近できた赤土グランドでも、男子達は日がな夕暮れまで、向かい合って真直ぐ互いの手元を見、ボールを追い、時を忘れて興じ合う。キャッチボールのやり取りは、いつも清々しく不思議な響きがある。

けれど、ここで聞いたボールの音は少年達の出す音とは少し違っていた。ボールが、グローブに叩きつけられるようにキャッチされた瞬間、鈍く深い音が反響し、辺りに広がっていく。間隔は遅い。恐らく距離が離れているのだろう。しかし、しっかり一定のリズムで繰り返されるその音は、球が思い切り革に叩きつけられると同時に包み込まれる確実で力強い深みのある妙音だ。投げる者と受ける者の、「阿吽」の呼吸といっていい。

私は時々、小さな縁側に近づいて、まっ白な入道雲を見上げながら、その音に聞き入った。

始業のサイレンが鳴り始めた時、「あー悪い！」という声がしたかと思うと、はずれたボールが金網の下をくぐり、日陰で蟻の行列を見ていた政君の足元に、コロコロところがって来た。

すぐにランニングシャツ姿の年若い青年が、汗だくで「ハーハー」息をはずませながら駆けてきて、「政君！　取ってくれる？」と少年の足元を指した。

「いいよ！」

政君は、あわててボールを拾うと青年の広げたグローブめがけて投げた。

「サンキュー！　お姉ちゃんは？」

「家、いとこが来てるから」

青年は部屋の方を眩しそうに見ながら、「宿題やってるか？」と政君にほほ笑んで、走っていった。

政君は四年生。どちらかと言うと、隙のない姉さんに比べゆったり

とおおらかな子だ。何よりも私が可愛らしいと思ったのは、彼と顔を合わせた瞬間だ。「政君」と言って話しかけた時は勿論、何気なく振り向いた時でも、彼はその穏やかな目でしっかりと私の目を見、瞬間に眉を上げ、「にこっ」と笑う。というよりは笑いかけてくるという感じだ。どんな時もそれは同じで、ある日、留里ちゃんが昼食に何と手作りの『ミート・ソース』を作ったことがあった。マッチの軸をくわえながら、玉葱を念入りにみじん切りにし、フライパンを熱し始めた。

「政！　油」

「はい」

「玉葱入れるから、離れて！」

「はい」

「そこの挽肉、取って！」

「はい」

「お砂糖の入れ物！」

「はい」

「とまとの缶詰！　そこそこ」

「はい」

丁寧にかき回されながら、具材は次第に色とつやを増し、フライパンの中でグツグツと沸騰し始め、いかにも美味そうな『ミート・ソース』が出来上がっていく。留里ちゃんの額から幾筋もの汗がながれていた。

かおり立つ湯気の中で、ただただ感心して見ていた私はふと横で手伝っていた政君を見ると、何事もなかったように例の眉を上げ、私の目を見て笑い返してきた。

思い返すと、叔母の家に居た一週間、私は勉強と読書以外は、たまに留里ちゃんと話すだけで、政君とよく遊んでいた。トランプ、ゲーム、くじ、お昼が過ぎて日が陰ってくると公園に行き、蝉取りもした。降るような蝉しぐれの中、目敏くそれを見つけ網を掛けるのは実にうまく、ほとんど失敗しない。

木陰で、蟻の餌運びも飽きもせず観察した。時々私は、真赤な彼の顔に自分の帽子で笑いながら涼しい風を送ってあげた。

夕方になると、三人でお風呂屋さんに行った。道々、近所の人に出会うと、「いとこさん？」と、声をかけられ、政君はうれしそうに、

「そう　遊びにきてるの」と答えた。

その帰りに、アーケードの賑やかな商店街で買物をした。留里ちゃんはメモ通り品定めも手際よく、私はそんな彼女にくっついて、買物籠を持ってあげた。目的のものが見つからないと、店の人にあれこれ説明して捜してもらったり、「もう少し大きいもの、もう少し小さめの

を」と簡単に妥協しない。主婦並だ。
時々、先輩らしき中学生と会ったりもした。
「あら、留里ちゃん　久しぶりね」
「あっ、杉野先輩　こんにちわ」
「あれ　続ける？」
「はい　大分進みました。でも分からないところが少しあるので、又教えて下さい」
「ええ、いいわよ。学校が始まったらね」
「ありがとうございます」
「じゃ、また」
「さようなら」
彼女達は互いに少し行ってから振り返り、やさしく耳のそばで手を振っていた。
「先輩？」と、聞くと、「そう、合唱クラブのね。中学生なんだけど、時々学校に来て教えてくれるのよ」と微笑んだ。
勉強がよくでき、きれいな留里ちゃんは間違いなく彼女達の大切でかわいい後輩のようだった。
夜の食事は、叔父と叔母が仕事から帰って来てから揃ってした。お酒をたしなむ叔父は美食家でもあった。貧しき人々のために闘う闘士も、身に付いたものは捨てられないのだろう。お惣菜の他にコンビーフやチーズ、雲丹の練り物などが並んでビールを飲んだ。
「朝子ちゃん、叔父さんはこれを開けるのが上手なんだよ。いいか、見てて」
小さなコンビーフの缶のへりを、それ用の栓で引っかけクルクルといとも器用に回し蓋を開け、満足そうに私の前に置いた。まるで子供のようにニコニコしている。私は返事に困った。
「やーね、ばかばかしい」
叔母は、こちらをチラッと見ながら言った。お酒がすすむとおしゃべりになって、お決まりの持論らしきものがくどくどと始まる。
「そういうものではない……いや、あの時はあすることが正解だったんです。ぼくはね、こう言いました。ナンセンス……彼もなかなかでね……腹に据えかねて言いました……」
叔母がたまに、「そうかしら」「ふーん」と、相づちを入れるぐらいで、一人問答はいつまでもつづく。私の父はお酒を飲まない人なので、こういう雰囲気はどう対応していいか分からず、居住まいが悪かった。留里ちゃんはというと、嫌な顔ひとつせず、お父さんに催促されれば、手慣れた手付きで、コップにビールを注いであげている。

「ありがとうね、留里ちゃん」
「あの……あの……」
だんだん口が回りにくくなってきている。
「君は……君は……そんなに勉強して……どこへ行くの？」
留里ちゃんは、ちょっと戸惑って母親の方をふり返った。
「どういうこと？」
「そんなに、勉強してさ……どこへ行くのかな」
「大学よ、ねえ」
おばは、留里ちゃんを見て答えた。すると叔父は、「いゃっ、違う！」と、手を上げて叔母をさえぎった。
「ぼくが言っているのはね……」
両手を、あぐらをかいた膝に置き、下を向いて酔っ払った頭で言葉を捜しているようだ。
「そういうことじゃなくって、さ……」
しばらく考えて顔を上げた時、私は驚いた。叔父の目には涙がいっぱい今にもこぼれ落ちそうにたまっている。
「やーね、俊彦さん。何、心配してるの」
叔母が優しくなだめるように返した時、留里ちゃんはお茶碗を持って立ち上がり、だまってお勝手に立って行ってしまった。

「お父さん、もう寝よう、もう寝よう」
政君が叔父さんの側に行って、腕をひっぱっている。
「政彦、政、君はいいやつだな。うん、本当にいいやつだ」
そう言って涙を拭いながら、隣の部屋へ行った。

最後の日、夏休みの「思い出」にと、留里ちゃんは家庭科の作品をいっしょに作ろうと提案してくれた。前の晩、叔母と家庭画報を開いて何やら相談をしていたものらしい。
バスに乗り、駅ビルのデパートに手芸用のフェルトを買いに行くことになった。一週間近く居て、留里ちゃんの家の生活には慣れてきたけれど、宿題の教材をデパートに買いに行くのには驚いてしまった。それ以上に、そこまでしてくれる彼女に子供ながら申し訳ない気持ちになったが、その心配はすぐに晴れた。
デパートに着くと館内は広く涼しくて、人が多いのに清潔でいい臭いがした。けれど私には興味がわかない。こんなところまで、どうして来るのか分からない。疲れてだんだん口が重くなってくる。
彼女はメモを取り出し、来なれた足どりでエレベーターを乗り降りする。母親に頼まれた食材や化粧品を、それぞれの売場へ行って、確認しながら買った。来るべき買物は、他にもあったのだ。最後に手芸

品を扱う店で、青と白のフェルト生地を店員さんに出してもらい、必要なだけ切ってもらった。

家に帰ると、留里ちゃんは「疲れたでしょう、少し休むといいわ」と言いながら、オレンジジュースをごちそうしてくれ、「ああいう所、すきじゃないのね」と言った。それから、お膳の上に材料を並べ終えると、押入れからプレーヤーを出してきて、一枚のレコードを置き静かに針を落とした。

「聴きながらやろう」

「うわー　嬉しい！」

聴いたことのあるピアノ曲が流れた。

「エリーゼのために？」

「そう　次は白鳥の湖、その次はトロイメライ、月の光かな……」

「トロイメライは下校の時流れる曲よ！」

「そうなの」

製作は全て手縫いで、私はほとんど彼女の見よう見まねだ。けれど、夕方、お豆腐屋さんのラッパが聞こえてくる頃、私達は真青な海の上を真白なカモメが飛んでいるアップリケをつけた見事な小物入れを完成させた。

夜、叔父はいつもより早く帰って来て、晩御飯に生きのよい鮪のお刺身をご馳走してくれた。途中思い出したように、「酔っ払いになる前にネ」と言って、帰りのバスと電車の乗り継ぎを書いた紙を広げ、指で押えながら説明してくれた。それから叔母さんと留里ちゃんのお酌で何杯もビールを飲み、歌を歌ったが、何故かそのほとんどが、小学唱歌だった。その日はおとなしくて、早々と寝てしまった。

「朝子ちゃん、線香花火しょう」

留里ちゃんが、台所からマッチと花火を持ってきて、政君に聞かれないようそっと私の耳元で言った。暗い外に出て、小さな縁側のそばにしゃがんで私達は火を付ける。パチパチと儚げな音をたて、闇の中で小花のような光がゆっくり点いたり消えたりしながら、やがて、いっせいにはじけ始めた。それをじっと見ながら私は、何げに「留里ちゃんは、幸せね」と言った。

「なぜ？」

「恵まれているもの」

私が言ったその時、最後のまるい小さな火が、震えながらポトリと落ちた。

「朝子ちゃんこそ幸せよ。自分の家があるでしょう」

闇の中で、留里ちゃんの大人びた声がした。私は何も答えなかった。

翌朝、国道沿いのバス停に私達は立っていた。ほどなくバスが来た。

「じゃ さようなら。又来年ね！」

「きっとよ！」

言いながら私は乗車し、一番うしろの席に座った。同時にバスはガスを吐き出し、ゆっくり走り出した。振り返ると、留里ちゃんと政君が大きく手を振っている。

「さよなら 留里ちゃん、政君」

バス停のベンチの側に、大きな『けいとうの花』が切ないほど真っ直ぐに、赤く天を指して咲いていた。私達は、互いが見えなくなるまで手を振りつづけた。

夏休み最後の週は、町内会の恒例で野外子ども読書会が行われた。日がまだ盛んでない涼しい午前中、土手の木陰にゴザを敷き、本を読む。本はそれまでに各家庭から集められ、段ボール箱五、六箱にきれいに収納されていて、私達はそこから自分の気に入ったものを選んで読んだ。八割方がマンガ本だったけれど、たまに立派な装丁の子供向け単行本が何冊か入っていた。いつもすすんで役員をする近所のおばさん達の中に、どういう訳か私の本好きを知っている人がいて、「朝子ちゃん、いいのがあったよ、ほら」と取り分けておいてくれた本を手渡してくれたりもした。

読み切れないものは貸出しノートに記入し借りて帰ることもできたし、小さなキャラメル一箱とおばさん達手作りの冷たいシロップジュースも配られるから、たいがいの子ども達はにぎやかに土手に上がって来る。

時々、川風が涼しく吹いて、頭の上では蟬が夏の終わりをおしみ鳴く。草むらの蚊に食われることを除けば、こんなステキな時間はない。

ページをめくりながら、このまま学校が始まらなければ、どんなにいいだろうとつくづく思った。

（つづく）

理由

土方　杏

西まつ子が殺されて三日目、外は久しぶりに雨が降っていた。警察は、夫の西清隆の事情聴取を終えていた。

留置場の高い位置にある窓には、雨が打ち付けているのだろう。音は聞こえないが、部屋は前日より暗くなっていたので、かなり降っていることは想像できた。

最近建て替えられた警察署なのだろう。裕美子のいる留置場もすっきりと清潔感があり、匂いなどもしなかった。

いよいよ警察の聴取を受けることに、上原裕美子は、自分の気持ちや状況をうまく説明できる自信がなかった。清隆のことを思うと、裕美子は本当のことを一つでも口にすれば清隆の罪が重くなるような気がしてただひたすらに黙っていた。

朝、警察署内で事情聴取を受けるために留置場を出されても心は清隆のことを思っていた。

刑事に連れて行かれ、取調べ室の椅子に腰掛けると、裕美子は下を向いたまま黙っていた。最も、裕美子は警察に対して反抗的なわけではなく、気持ちが塞いで刑事たちの質問が耳に残らなかった。取調べを受けるという特殊な立場には、誰でも同情してくれるらしく、女性警察官もマメにお茶を出

してくれたりした。
夜、留置場に戻される時、扉に鉄格子が嵌められていることを除けば、トイレつきの部屋は空調も効いていた。コンクリートの壁にもしみもついていない。自由に外に連絡を出来ないことを考えると窮屈ではあった。
但し、夫や娘とは容易には会えないことは、裕美子にとってかえってありがたかった。時が止まったようなこの空間で裕美子は、自分たちの何がいけなかったのだろうかと考えていた。
事件の起こる三年前に、二人は偶然福岡で再会した。中学校を卒業後逢うこと避けていたのだが、二十年以上の月日がたち、お互いのパートナーと上手くいっていると信じていたので、裕美子も清隆も今まで避けていた二人の思い出の場所をつい訪れてしまったのだ。
裕美子の通っていた中学校の近くのマックで、裕美子は、真由美と待ち合わせをした。真由美は、高校時代の同級生で卒業後もかなり頻繁に連絡を取り合う友達の一人だ。
高校の同窓会に出席するために福岡に帰省していた金曜日の午後のことだった。彼女は、肩まである髪をシュシュで手早くまとめて店内に入った。店員が三人程店頭に立っていたが、いずれも客と応対中だったので、背広姿の中年男性の後ろに立った。
年齢は裕美子と同じくらいなのかどうか分からないが、背中がすっとしていて中々姿勢もよく、夫の透より十歳位は若そうだった。その男の人は、注文を終えて会計をしていた。高校生くらいの男子の店員は、慣れてないせいか、注文の品を何度か間違えて、
「……、三五〇円でございます。」
と、無理に作った笑顔で言った。男は千円札を出したようだった。
「千円をお預かりします。……六百五十円のお返しでございます。申し訳ございませんが、お飲物をお待ちの間、左手の…方へ避けて…いただけますか？」
彼女の前の客を促した。男は、軽く頷くと左手に避けた。男の横顔を見て、彼女は声を上げそうになり、自分の口をそっと押えた。
―清隆さんだ。
昔と少しも変わらず、優しげな目をしている。スーツは、

離れたところから見ると、無地のライトグレーのように見えたが、近くで見るとかなり細かい千鳥格子の柄が入っていた。同様に、薄い水色のシャツは、白いピンストライプの入った流行のものだった。

彼女は、紺色の無地のスーツばかり着る夫の透と比べてしまった。

―パパは、趣味が悪すぎるわ。

裕美子は心の内で呟いてしまった。

その後、清隆は、コーヒー二杯とアップルパイを受け取り裕美子には気づかずに、二階のイートインコーナーに行ってしまった。

「次の方どうぞ。」と店員に声を掛けられた裕美子は、前に一歩出た。「ご注文をお伺い・・します。」

「コーヒーとアップルパイをお願いします。」

裕美子は清隆の真似をしてみた。

「コーヒーとアップルパイでございますね。…二五〇円でございます。」

店員も馴れたのだろうレジを入力しながら、笑顔で裕美子の方を見た。彼女は財布から、三〇〇円を店員に渡した。名札には、森と書かれていた。森青年は、今時なヘアースタイルを窮屈な帽子に収めていた。

「お釣りは五十円でございます。お飲み物が出来上がるまで、左手でお待ち下さい。」

裕美子は、森青年に頭を下げると、左手に動いた。裕美子の後ろの客が今度は、一歩前に出て注文を聞かれていた。ほどなくすると、裕美子の注文の品が揃い左手から森青年とは別の店員が出してきた。

裕美子が注文の品を受け取り、イートインの席に行こうと、振り返ると、「裕美子遅れてごめん。」と真由美の声がした。

―いつものことじゃないの。

という裕美子の思いとは別に、「いいわよ、席を取っておくから、早く飲み物買ってきてね。」と言った。真由美は、いつも以上に派手な花柄のワンピースを着て芸能人のように立っていた。裕美子は自分のシンプルな小花柄のブラウスとジーンズが眞由美の格好とは、バランスの悪さを感じた。

「びっくりした。いつもよりさらにハデね。どこで見つけてくるの？　マックにその格好で来るなんてびっくりしたわ。」

「あら、そう久しぶりに千葉から友達が来るんだもん。少しおしゃれしただけよ。」
裕美子は、真由美に意見をした自分が馬鹿馬鹿しくなった。彼女は、コーヒーとアップルパイを持ち、「席を見つけるから。」と真由美に声を掛けて、二階に上がった。マックの二階のテーブルは、既に一杯だった。仕方なく三階に上がると、ところどころ席が空いていたが、道路側の明るい席に空きはなかった。見回したところ清隆の姿はどこにもないので、裕美子はほっとしていた。
奥のトイレからやや離れた席に場所を取った。その席は両隣がタマタマ空いていた。裕美子は、コーヒーとアップルパイをテーブルに置くと、真由美に席の位置をメールした。真由美が来る前に、トイレを済ますことにした。
トイレのドアを開けようとして、裕美子がドアノブに手をかけた時に中から人が出てきた。進路を譲るために裕美子が半歩下がると出てきたのは清隆だった。咄嗟に裕美子は、
「こんにちは。」
とあいさつをした。何と間の抜けたあいさつだろう。裕美子は恥ずかしくなって、あいさつを返そうとした清隆を無視した。
そして、逃げ込むようにトイレに入った。
―恥ずかしい。私は何であんな間抜けなことを言ったのだろう。
トイレを済ませて席に戻ると、清隆が裕美子の取った席の後ろの席から立ち上がるところだった。裕美子は何か言いたげな清隆をまたも無視して席に着いた。しかし、清隆は目を逸らした裕美子の席に近づくと、小声で裕美子に、
「今の携帯番号とメールアドレスだから」
と小さなメモを置いて、階段を下りて行った。その清隆とすれ違いに真由美が上がってきた。彼女は、ニコニコしながら裕美子の目の前に立つと、
「さっきすれ違った男いい男だったね。独身かな？」と言いながら未練がましく階段のほうを見ている。席に着く時も階段から目を離さずにいた。
真由美は、今は独身の為かいい男にはとても敏感だ。
これまでも、眞由美の武勇伝は、本人以外からも伝わっているが、これだという男には、必ず粉を掛けるらしい。

何故だか、裕美子は少し焦って、
「えー、そんないい男いたっけ？」
「見てなかったの？　裕美子っていい男のハードルが高いね。それとも私のハードル低すぎる？」
「低い低い。」
と言って誤魔化した。二人は思わず声を出して笑った。彼女たちの笑い声が響いたせいか、マックの三階フロアが少し静かになった。
今度は、二人は手で口を押さえてシーっと小声で言うと、声を立てずに笑った。真由美も素性のわからない男に対してあまり興味が湧かなかったらしく、席に着くと別の話をし始めた。
「お久しぶりだよね、福岡に来るの裕美子は何年ぶりくらい？」
「三年か四年かぶりよ、下の弥生が中学校の時位までは、良く帰って来ていたけれど、今は大学生だから滅多に家にも帰ってこないくらいだから一緒に帰る相手がいなくなって……。」
「三年にしても随分ご無沙汰だね。何か帰りたくない事情でもあったの？」真由美は、目を大きく広げ下から裕美子を覗き込むと口を横に伸ばすようなしぐさをした。
「何かあったってわけじゃないよ。何も福岡でなかったから帰らなかっただけ？」
裕美子は、真由美に全てをみすかされそうで口ごもった。真由美も裕美子をいじめる気はないので素直に、「あれ、あんた旦那も同じ高校じゃなかったっけ？福岡に帰ろうとか旦那も思わないんだ。」
真由美は、わざとらしく訊いた。真由美は、透と彼女の元旦那が仲良いことを承知で、透の性格もわかっているだろうに、意地悪なことを言うと思った。だから、透の会社人間ぶりを匂わせて、
「ああ、パパも同じ高校だけど、仕事が忙しいし疲れてるし、会いたい同級生も来ないのがわかっているから行く気なんか全然ないわ。今年も誘ったけどね。…ママが誘ってもね。真由美が誘えば、行くかもね」裕美子がこの話題には触れたくない気配を感じて真由美は、
「ふーん、旦那のことパパって言うんだ。男じゃないんだねぇ、あんたにとって。裕美子も変わったね。昔、高校時代

に結婚してもずーっと、名前を呼び合う夫婦になりたいって言っていたよね」

―真由美は、良くそんなことを覚えているわ。透さんもこれくらい私の言ったことを覚えていてくれればいいのに……。

裕美子は、顔を上げ、少し天井の方を向きながら、「結婚して二十年以上経てば、男女の仲じゃないわよ。私のことももママって呼ぶしね。パパの携帯の電話帳にも名前じゃなくてママって書いていたのには驚いたけどね。」

そこまで言うと裕美子は我知らずに溜息を吐いていた。

彼女のため息を聞き流して真由美はさらりと、「わかんないわ、私は前の旦那とは三年で別れたから、男と女のことで揉めていたし、それが原因でね……。離婚までしたから」思い出すだけでも腹が立つのか、真由美は紙ナプキンを絞るように握り締めた。裕美子も真由美の地雷を踏んでしまったのかもしれない。

「真由美の旦那さんって、優しそうないい人だったのにね。」

真由美はコーヒーを一口飲むと、押さえ切れない気持ちを吐き出すように、いつもより低い声で、眉間にしわを寄せて「あいつは、どんな女にも優しいの、私以外の女には、例え八十歳の女にも優しいの。」彼女の瞳は、最早燃え上がりそうだった。

―真由美は、元の旦那さんが今でも好きなのかしら？

裕美子は、その質問を真由美にはぶつけなかった。裕美子は、いつも冷静で大人な真由美を見てきたせいか、少し気後れがした。

「真由美がそんなにやきもち焼きだなんて知らなかった。」

裕美子は、コーヒーをゆっくり一口飲むと微笑んだ。裕美子は、真由美に気持ちの切り替えを促した。そういえば、由美子自身は不思議なことに、透がどんなによその女に優しくしようとも焼いたことはなかった。自分以外の女のことに透が関心を持つはずがないという自信の表れだと思っていたが、透のことに自分が関心がないということではなかろうかと気付いた。思い出すと清隆のことはどんなに関係のなさそうな相手でも女であれば清隆が優しくするとやきもちを焼いていた。その気持ちは今でも変わらないことに裕美子は驚いていた。

―まだ、清隆さんが好きなんて、私は馬鹿ね。

自分の感情なのに、わけがわからないという経験を裕美子は初めて知った。
一方、自然に笑っている裕美子を見て真由美は、「裕美子って、いつもどんなこと考えているかわからないけど余裕あるのよね。」
真由美も昔の男のことで熱くなる自分を反省した。彼女は、ポテトのLサイズをおいしそうに食べながら首を傾げた。
「で、今日はどこへ行くの？　早くしないと明日の同窓会に着ていく服がないわよ。」
今回の帰省で真由美は、裕美子のために天神のいろいろな店に付き合ってくれていた。昔から面倒見のいいタイプだったが、最近は益々良くなった気がする。離婚した当初は子供が小さかったせいか、互いに年賀状のやり取りをするだけで精一杯だった真由美も、娘が高校生になって、少しは余裕も出来たのだろう。去年、家業の会社を継いでから、時々東京でも会うようになっていた。
東京では、裕美子がいろいろな所に案内する代わりに今回は初めて裕美子が、真由美に福岡空港に着いた日から、ほぼ毎日時間を作ってくれて買い物に付き合ってくれた。
同じ年とはいえ、裕美子と真由美は体型も好みも違うので一緒に買い物に行くといつもとは違う体験が出来て楽しかった。けれど、いい加減同窓会の服は決めなくてはならない。明日の夜は、同窓会だし、昼間は真由美は会社の用で外出できない。そう今回同窓会に出られない真由美は、裕美子のためにいろいろ骨を折ってくれたのだ。
二人で、学生時代のようにマックで食べながらおしゃべりする時間が気になりつつも楽しかった。
天神のビブレに二人バスで移動する間も「そういえば、高校時代は、今の旦那と付き合っていたの？」と真由美は、裕美子の顔を覗き込むように声を掛けた。裕美子は、正直に答えるべきかどうか少しだけ悩んだ。
結局、裕美子は事実を隠すことにした。
「高校時代はただの友達よ。大学進学が決まってから、お互いに意識するようになって付き合い始めたの。」
本当は、何度も高校時代に透から付き合って欲しいと言われたのだが、裕美子は清隆のことが忘れられずに断り続けていた。
もし清隆の母に、高三の冬、清隆とまつ子が付き合ってい

ることを聞いていなかったら、透とは友達で終わっていたかもしれない。その話を聞いて清隆のことを区切りつけようと思ったのだ。清隆の母からその時に訊いて来た一言が、裕美子には今も忘れられない言葉になった。

「私は、裕美ちゃんが清隆と結婚すると思っていたから、まつ子ちゃんと付き合っているのは、今でも信じられないのよね。だって裕美ちゃん中学生の時清隆とお付き合いしていたわよね。毎日、一緒に登校してたわよね。裕美ちゃんが高校別のところに行くって清隆がっかりしてたわ。あの子裕美ちゃんに嫌われるようなことしたの？」

裕美子は、答えられずにただもじもじしていた。

ふと気付くと、真由美が心配そうに、裕美子のことを覗きこんでいた。

昔のことを思い出して、裕美子は、ただ黙っていたので、真由美は心配したのだろう。

「どうかした？」

「裕美子ったら、どうかしたじゃないわよ。急に黙り込んで。心配したじゃない。」

「ああ、そうだっけ？恥ずかしかっただけよ。」

真由美に、今の気持ちを悟られたくなくて、裕美子は出来るだけ普通な振りをした。バックの中に入っている清隆からもらったメモも気になっている。

とにかく、早く買い物を済ませるつもりで、時計を見て「早くしないと遅くなっちゃう、ビブレにゴウゴウ。」とはしゃいで見せた。裕美子は、子供が母親にこどもがするように、真由美の背中を押した。振り返った真由美は、裕美子の顔を少し見たが、何も言わずに、「もっとどんどん押して」と言った。

福岡一のショッピング街の天神の中でも、特に洋服屋が集中するビブレの中で、いつも行く五階の店に急ぐ中、エスカレーターから見えた三階で見たクリーム色のワンピースに、裕美子は清隆と初めてデートに着た服に似ていると思った。裕美子は、エスカレーターを走って降りて、ショップに入り間近に見ると、マネキンの着た服は、ますます似ていた。

白いハマカラーの襟に小花柄のクリーム色のワンピースは、少し袖が膨らんでいるところも、裾が広がっている感じも似ていた。裕美子の中で、昔持っていたワンピースを着た

自分が鮮明に思い出された。そして、その思い出の中に、裕美子は清隆と幸せそうに立っていた。

―これしかないわ。

裕美子の心には、どんどん清隆の思い出が蘇ってくる。まるで、結婚した相手も透ではなく、清隆だったように思えてきた。

マネキンも細身で、裕美子に似ていてイメージがよりふくらんだ。裕美子は店員にマネキンを指し、「これを下さい。」と言うと、店員も真由美も驚いていた。裕美子の心の変化に気付かない真由美は、「裕美子、今日は決断するの早いね。いつもぐずぐず決められないのに、本当に今日は変だわ、裕美子」と言った。

「そうかな？　いつもは気に入った物がみつからないだけよ。」

包装してもらい、清算をして店を出ると、街は夕暮れ時になっていた。

ビブレを天神コアの方に出て、天神のメインストリート渡辺通りが見えた。通りの歩道のあちこちに屋台が出始めていた。

「今夜の夕食は、どこに行く？」

真由美が屋台を見ながら浮き浮きした口調で裕美子に尋ねた。裕美子は、「今日は屋台がいいってこと？」と真由美に聞き返した。そこに真由美の携帯が鳴った。真由美が、あわてて電話に出ると

「はい、もしもしありす、……え、そうなの……わかった。ちょっと待って掛け直すわ。」

と言って電話を切った。

「ごめん、裕美子　今日夕食付き合えなくなった。娘のありすが学校に迎えに来てほしいって、明日の部活の荷物急に預かることになったのよ。」

「いいのよ、気にしないで。」

「ありがとう。本当にごめん。」

真由美は急いでいたらしく、すぐにありすの携帯に掛け直して、待ち合わせ場所を確認した。

「ごめん、タクシーで自宅に車取りに行くわ。」

というと裕美子の返事も聞かずに走ってタクシー乗り場に行ってしまった。真由美は心が急いていたので、裕美子が余り自分と食事が出来ずに残念がっていないことに気付か

なかった。多分、真由美の頭の中には、家に帰って自分のすべきことを順序良くする段取りばかり考えていたからしょうがないことだった。真由美は、客待ちのタクシーに乗りこんだ。

裕美子は真由美の後姿を見送って、真由美が一度も由美この方を振り返らなかったことにびっくりした。真由美は、いつもなら見送られるときに必ず二、三度振り向くから……。気持ちを切り替えて裕美子は、清隆にもらったメールアドレスを取り出した。メモは少しくしゃくしゃになっていた。何かの手帳を破ったのか、端がギザギザしていた。メモも昔よく読んだ清隆の字とは少し違っていた。余り上手とは言えないけれど読みやすいように大きく書かれていた。携帯のメールアドレスはD社のものだった。

二十年以上も会うことがなかった二人だった。それは、互いに会いたくない気持ちというわけではなく、会うことで、今の家庭が壊れることを恐れていただけのような気持ちだと知ってしまった。

裕美子は、何か気持ちを吹っ切るように頭を振った。裕美子は、自分の状況を思いなおした。男女の関係が終わり、子供が巣立って行こうとする自分のうちに何か自分を縛り付けるものはあるか考えてみた。

そんなものは、裕美子にはなかった。アドレスのメモを握り締めると、裕美子は、地下街を通りバスセンターまで歩き、喫茶店を見つけて入った。喫茶店には、大好きなクリームソーダがあった。裕美子はウェイトレスにクリームソーダを頼んだ。

クリームソーダが来るまでに裕美子はアドレスを入力した。

メールには、「お元気そうですね。今日は、びっくりしました。あなたに会えるとは思いませんでした。　裕美子」と書いて送信した。

何十年か振りに出したメールにしては、ひどく事務的な気がしたが、裕美子は清隆との間を始める気にはなれなかった。

送信ボタンを押し、メールが送られると五分もしないうちにメールの返信が返って来た。

「僕のことを覚えてくれていてうれしい。ずっと君に会いたかった。裕美ちゃんと福岡で会えるとは思わなかった。もうすぐ仕事も終わるからまた、メールします。　清隆」

裕美子は、自分の頬が赤くなるのを意識した。クリームソーダを置いてウェイトレスが下がると、裕美子は、急いで返信した。

「福岡で同窓会が明日の夜あるの。だから、月曜日まで福岡にいます。あんな別れ方をしたのに、本当に私に会いたいの？」

実は、裕美子と清隆は中学校の時にお付き合いをしていた。けれど、中二の時の大森瞬太郎が起こした殺人事件をきっかけに、裕美子は一方的に清隆と別れ、別の高校に行ってしまった。その後裕美子は、高校の同級生の上原透と、清隆は、大蔵まつ子と結婚した。その後、二人は互いの結婚式には出なかった。理由はいくつもあったが、冷静に相手のことを見ることが出来なかった。一方的に別れを告げたのだから、清隆に申し訳ない気持ちが裕美子にはあった。

そんな裕美子を清隆が許してくれるとは、思えず清隆のメールが半信半疑だった。

ところが、清隆にも後ろめたさが在って、それは裕美子に振られてすぐに、まつ子に押し切られて付き合い始めてしまった。押し切られたとはいえ、裕美子がまつ子とは付き合って欲しくないと思っていることがわかっていても、どうしてもまつ子を振り切れなくて、結婚までしてしまった。

清隆は、裕美子とマックで別れたあと、会社に戻っていた。清隆の会社は、マックから見えるところにあるから、機械設計の仕事に煮詰まると、マックでしょっちゅう息抜きをしていた。マックで時間を潰した後はいつも効率が上がるはずなのに、清隆はぼんやりスマホを見つめていた。

目の前のパソコンを立ち上げることも忘れて、清隆は裕美子の変わらぬ美しさに酔っていた。

それに比べると妻のまつ子は、別人のようになっていた。背が低いのに丸々太ってグーたらしてかなり悪趣味な服ばかり着て清隆の気持ちを暗くしていた。

どうしようもなくなって裕美子に救いを求めたのかもしれない。

しかしそれが、二人の不幸の始まりだった。

裕美子は、夫の透に男としての魅力を失い。結婚生活に閉塞感を感じていた。

清隆の場合は、もっと深刻な事情があった。まつ子は、ま

るで清隆の障害物のように。彼の人生を邪魔していた。
彼が、もっと自分の技術を磨きたいと東京への転勤を望んでいても頑として受け入れなかった。結果彼は会社での技術者としては時代遅れになりかけていた。
清隆も裕美子を今の自分の環境に息苦しさを感じていた。

裕美子は、清隆のメールに心が動かされていた。
「会いたい、君を裏切って僕はまつ子と結婚した。だけど、人を裏切って結婚しても幸福には成れなかった。君と人生をやり直したい。」
二人の心は大きく近づいてしまった。
「私も、清隆さんのことがずっと忘れられなかった。だから、今日会えた時にメールアドレスをもらってうれしかった。
あなたが私を許せないとしても私には言い訳できないと思った。」
メールを返してしまった。
清隆は、天神にある喫茶店の場所を指定して、一時間後に会う約束を裕美子とした。
それからまつ子に電話した。

「今日は、仕事が立て込んでいて夕食も取れなかったから、新天町で夕食を摂ってから家に帰る。打ち合わせが伸びたら午前様になるかも。」とメールをまつ子に送ったら、「わかった。先に寝ます。」と短い文面が帰ってきた。
―俺に対する愛情ないよな、仕事は大変なのとか、聞く気がないよな。

一時間後裕美子と清隆は喫茶店でぎこちなく向かい合わせに座っていた。

ふと我に返った裕美子は、留置場の壁を見つめて清隆のことを思い泣いていた。
翌日、事情聴取を終わった裕美子は、また清隆と再会してからのことを思い出していた。
裕美子と清隆の二人は喫茶店で再会を喜び合ってから、何故二人が別れることになったかを話していた。
二人が別れた原因は、中学二年生の時のあの事件が大きく影響していたが、裕美子には他にも複雑な思いがあった。
裕美子は、中学生の時の気持ちを淡々と清隆に語った。

中学生の時、裕美子は清隆と中学生らしい交際をしていた。当時の裕美子は、朝、通学路を、いつも同じにように歩いていた。家から、小さな路地を抜け、大きな道路に出ると、隣の中学の制服を着た小柄な西清隆が見えた。

いつもと同じように、裕美子を見つけると、大きく手を振って走ってきた。裕美子は、清隆のその姿を見ると、嬉しいような恥ずかしいような気持ちになっていた。

当時まつ子は、清隆と同じ学校だった。いつでも、まつ子は清隆と学校で会うことが出来る。

三人は幼馴染だったが、小学校も中学校も裕美子だけが隣の学校だった。

しかも、まつ子たちの中学校の場所は、裕美子の通学路を越えて行くので、裕美子は、毎日のように、清隆と中学に通学できた。

小学生の裕美子と清隆は、逆方向の学校に通っていたので、休みの日以外に逢うこともままならなかった。だから、小学校の頃は裕美子は忍耐の日々を送っていた。

今は、裕美子の学校の側まで、清隆と一緒に通える。

裕美子の学校の側のバス停から清隆は、バスに乗る。まるで夫婦のように裕美子は清隆を見送る。

まつ子は、清隆より学校が遠いので、家の近くからバスで通学していた。

裕美子と清隆は、いつも進路のことやアイドルの話しなどを、語り合っていた。丸い顔の清隆が、お笑い芸人のような大きな身振り手振りをして説明してくれるのがおかしくって、裕美子は笑ってばかりいたような気がした。

ただ、学校帰りに、まつ子と裕美子は一緒になることが多くて清隆とは、会えないことが多かった。すると決まって、まつ子は、清隆が隣の中学校で、もてている話を裕美子に何度となくするのだった。ライバルはまつ子だけではないのだ。

まつ子は、裕美子に、幾度か、二人が付き合っているのか探ってきた。

裕美子は、いつも少しさびしそうに笑うだけで答えたことはない。

何せ、裕美子は、中学生にしては、かなり大柄で、百七十センチ近くある身長が仇になり、自分の学校では、デカ女と呼ばれていた、だから、清隆とのことは、まつ子にはっきりとは応えられずにいた。

それに、清隆は、百六十をわずかに超えた身長の上に童顔なので、裕美子といると恋人のようには、見えない。
もしかしたら、清隆も自分のことをデカ女だと思っているかもしれないとも疑っていた。
裕美子は、自分のことを美人だとは思わないけれど、身長以外は、人並みな容姿だと思っていた。もう少し鼻が高くて、色白ならモデルのようではないかと、言ってみたかった。でも、中学生の裕美子は、少しでも、小柄に映るように、猫背で、清隆に寄り添うのが精一杯だった。
そして、道の反対側に、もう一人の幼馴染の大森君を見かけると、裕美子は、そっと、清隆と距離を置くのだった。
そんな、ある日のことだった。
六月の最後の日曜日、裕美子は、まつ子と、久しぶりに遊園地に行って、ソフトクリームをゆっくり楽しんだ。
「裕美子、大森君を覚えてる。」
まつ子が、裕美子の表情を、じっと伺ってきた。
まつ子の小柄な身体に合ったリスのような瞳が、裕美子の心の内側まで覗こうといているようで、裕美子は、こんな時のまつ子が苦手だった。
裕美子は、ゆっくりと視線を目の前のビックリハウスに向けて、
「覚えているわ、瞬ちゃんでしょう？瞬ちゃんがどうかしたの？」
裕美子は、じっと、ビックリハウスの順番待ちの人数を数える振りをして、まつ子の返事を待った。
大森瞬太郎のことを質問しながら、まつ子は裕美子の関心を、清隆から移そうとしていると感じていた。
「そうよ、幼馴染の大森瞬太郎……彼中学校で、いじめられているんだ。」
「ふーん、そうなの。幼稚園の頃は、私やまつ子や清隆君をいじめたのにね。」
まつ子は、大きくうなずくと、
「そうなのよ。私、小学校でも、瞬にいじめられたから、いい気味だと思ってしまうのよね。裕美子も、そう感じるでしょ。」
「私は、別に今は何とも思っていないわ。」
小学校も中学校も別の学校だった裕美子は、瞬に無関心だった。

まつ子や清隆とは、裕美子は、よく買い物に出かけたり、映画を見に行ったりしていた。
何となく、瞬のことは、幼稚園以来遠くで見かけることはあっても、しゃべったこともない。まつ子のように瞬がいじめられていることに興味がわかなかった。
第一、遊園地は、そんなことより次に何に乗るか、ジェットコースターに乗るか、観覧車に乗るかを考えればよいのではないだろうか。と裕美子は、まつ子に言いたくなっていた。
もっと言えば、瞬の話よりも、清隆と自分の関係を聞きたいくせに、わざと話をそらしているようで、裕美子は、まつ子の心が読み取れない。
そのことが裕美子をいつもより不安にした。
裕美子は自分に、清隆のことを好きなのかどうか、問いかけるのが怖かった。
清隆は、無邪気に、同じ高校を、受験しようと盛んに誘ってくるけれど、裕美子の心は、迷いで一杯だった。
まつ子が、清隆のことを話題にしなかったのは、本当に最近の瞬の様子は、とても恐ろしく、不気味に思えて、心配していたことが後になって裕美子にもわかったからだ。
まつ子は、裕美子に、相談にのって欲しかったが、清隆のことで、二人の間には大きな溝が出来ていて、まつ子はうまく瞬のことを相談できずにいた。
遊園地は、楽しいはずなのに、まつ子の心は沈んでいた。
いつもは、遊園地の帰りにお互いの家に寄ることが多いのだけれど、二人は遊園地の出口で、何となく、分かれ、バスも別の席に座った。
そのバスの中で、裕美子では、いろんな事象が浮かんでは消えた。
そういえば、裕美子の中学校では、色白のまつ子は、注目の的だった。まつ子が、裕美子の中学の校門で、裕美子を待っている様子が、男子の間では、頻繁に話題になっていた。まつ子が、頬を紅潮させ、裕美子に話す姿は、遠目にも、かわいらしく見えるようだ。
裕美子のクラスの子に、何度か、まつ子のことを尋ねられたことがある。
「裕美子の友達で、小さくて色の白い子の名前教えてくんないかな。」
にきび面の、男たち皆が、まつ子のことに関心を示すのは、

裕美子には、何か釈然としない。
それでもなお、まつ子の心は、清隆にあった。
まつ子に、手紙を渡そうとした男の子たちをゴミをみるように、冷たい視線を投げかけている。そして、まつ子は、わざとらしく裕美子に清隆のことは聞くけれど、裕美子が清隆をどう思っているか、聞くことはなくなった。
裕美子は思った。まつ子の方が自分よりも清隆にふさわしいのではないかと。
バスが自宅に近づくと、お囃子などの練習が始まっている。七月一日からの山笠に備え、博多の街は、浮き足立っていた。遊園地からのバスも、いつもより混み合っていた。
裕美子とまつ子は、幼い頃から、バスに乗る時はずっと隣同士で座っていた。二人は生まれて初めて、別の席に座った。その上二人は、まつ子がバスを降りる時も、挨拶すら交わさなかった。
バスを降り、黙ったまま裕美子は、家に向かって歩いていた。
裕美子は、清隆のことを強く強く想った。—私が、まつ子のようだったら、もっと素直に、私のことを彼女でしょっていえるのにな—。
いつの間にか、裕美子は涙を流していた。
大人になれば、モデルのような裕美子の体型も、控えめな態度も、少し気の強そうな顔も男たちにモテル要素だけれど、中学生の裕美子にとって自分を嫌いになる要素でしかなかった。
同時に、自分を嫌いなことと同じくらいまつ子がうらやましくてしょうがなかった。
段々家に近づくと裕美子の家の前にいる母の姿が見えた。
母は、裕美子の姿を見ると走り寄ってきた。
その顔は、ひどく青ざめていて、裕美子は大きな不安を感じた。
「おかあさん、どうしたの、顔色悪いよ。」
裕美子の母伸子は、大きく一呼吸すると、
「あのね……。あのー。」
裕美子の顔を見て安心したのか。少し伸子も泣いている。伸子も大柄な体をしているが、いつもより小さく見えた。
「どうしたの、おかあさん。」
伸子は深呼吸をすると、一気にしゃべった。

「大森君が、人を殺したってニュースでやってた。」
「大森君って瞬ちゃんのこと、幼稚園で一緒だった。」
裕美子は、
「そんな馬鹿な、瞬が人殺し何て。」
通学途中に見かける瞬は、いつもまっすぐ前を見て余所見をせずに、ひたすら進んでいくように歩いていた。
母の言葉が続く
「テレビドラマ観ていたらね。突然、福岡で、中学生が中学生を刺したって、テロップが流れたの。慌てて番組に切り替えたら、うちの近くの原北外科の前で、警察が一杯映っていてね。その後犯人の少年の似顔絵が出たのよ。瞬ちゃんそっくりだった。」
「似顔絵？」
「そう、似顔絵。瞬ちゃんそっくりだったわよ。西さんの奥さんに、聞いたら、本当だった。」
「西さんって、清隆君のおかあさん？」
「そうよ、よく買い物で会うから、知ってるの。さっき電話したら、瞬ちゃんとクラスが違うけど、瞬ちゃん幼稚園からずっと一緒だから清隆君もショックみたいよ。」
「ふーん。」
裕美子は、出来るだけ関心のない振りをして、自分の部屋に戻った。
「裕美子―。瞬君いじめられてたらしいよ。虐めていた少年が、盲腸で入院した病院から退院するところを狙って、玄関で刺したって。」
階下から、大声で母が、叫んでいた。
時が止まったようだった。
その事件がきっかけに、裕美子は清隆を避けるようになった。朝も、一緒に登校しなくなった。
まつ子の心配をまじめに受け取らず、清隆と自分とまつ子の関係だけを気にしていたことを悔やんだ。
清隆に愛されているという自信もなかった。
裕美子にとって清隆は優しすぎて、裕美子は、少し物足りなさを感じた。
だから、清隆とは別の高校に進んだ。そのことを後悔してはいなかった。ただ、まつ子が清隆と同じ高校にいったと

知った時に、裕美子は清隆との恋の終わりを知ってしまった。
裕美子の予想通り、まつ子は清隆と同じ高校に行き、結婚した。
裕美子は、高校で、バスケ部に入った。前々から、背の高い裕美子を誘っていた真由美に、根負けしてしまったのだ。
真由美は、小柄だけど、ドリブルが上手く、ディフェンスも上手だったそうだが、中学時代にセンターの背の高い子達に嫌われて、余り出番がなかったらしい。
その点、裕美子は素直だし、人を貶めるようなことはしない。
真由美から見れば、運動のセンスもかなりいいし、センターの子よりも背が高い。小学校の時には、バレエをやっていて柔軟性もある。
だけど、裕美子は背が高いだけで、運動に自信がなかった。
真由美は、バスケットを丁寧に教えてくれた。
裕美子も清隆を忘れるために、何か打ち込む物が欲しかった。
高校の部活にも体験というのが四月から、一ヶ月ある。
体験だと部活の時間が短いので、空き時間を二人で、公園に行きバスケの基本をみっちり教えてもらった。
十日程過ぎた頃、真由美が透を連れてきた。
透は、バスケ部の補欠で、真由美の彼氏の友人だった。透は、見た目は、イケメン風なのに、口が悪く、バスケも上手とは言えなかったが、ディフェンスする相手としては、ちょうど良かった。裕美子よりも少しだけ背が高かった。
段々、裕美子はバスケが楽しくなった。
そして、入部する頃には、センターとして形がついてきた。
真由美も透にはすごく感謝していて、正式に入部する前に、真由美と真由美の彼の雄治と裕美子と透で遊園地に行った。子供のように裕美子は楽しかった。
遊園地の帰りに、透から「付き合って欲しい。」と言われ、裕美子は、少しうつむきつつも「はい。」と答えていた。
そのことを裕美子は正直に清隆に話した。清隆は自分の思いと裕美子の思いの差に驚いた。
中学生時代の自分は、裕美子より小柄だったけれどそんなことは全然気にしていなかった。
裕美子が思うほど、まつ子は同じ中学の中では好かれていなかった。

大森瞬太郎が起こした殺人事件についてまつ子は気にしていなかった。

と言う事を清隆も正直に裕美子に語った。

裕美子は長年の心のつかえが取れたようだった。裕美子の安心した様子に、清隆は裕美子の手をぎゅっと握った。裕美子は清隆の手を握り返した。

テーブル越しに二人はキスをしていた。

裕美子は、この帰省の間に、清隆と逢瀬を何度かしてしまった。

そして帰りの飛行機も清隆に空港まで送ってもらった。

まつ子にも疑われないように、裕美子は透と幸せな結婚生活を送っているようにアピールすることにした。

まつ子も清隆の結婚生活が上手くいっているような話をしていた。

中学の同窓会で帰ったときも、まつ子と待ち合わせをして、清隆との関係がばれないように努力をした。

けれど、事件の当日まつ子は裕美子と清隆が会っているところを目撃して裕美子を刺そうとして止めに入った清隆に刺されて亡くなっていた。

裕美子は知らなかったが、裕美子が帰省した時に、まつ子は何度か天神で裕美子を見かけていた。

まつ子から観た裕美子は昔と変わらずに美しく、醜い自分から清隆の心が離れるのは時間の問題だと感じていた。

裕美子も清隆も初恋が実ったことに、心が動かされて、周囲の状況には心を掛けることができなかった。

裕美子は、ひたすらに祈った。清隆の罪が出来るだけ軽くなるようにと、悪いのはまつ子の押しに負けてしまった裕美子自身だと思っている。

清隆がまつ子を刺したのは、裕美子を助けるためだけだった。

と裕美子は思っていた。

〈了〉

アクアリウムのゆりかご

いんば華子

まどろんだ夕方の電車の中、高校の制服に身を包んだ清水ハルカは、スクールバッグを握り直した。五月の夕方の日差しは四月より少しばかり痛く感じる。なんとなく、日常を逸した行動に唆されているような感覚になるのだ。それが毬栗のような形をしたハルカの心を刺激する。

決めた。蓉子さんの家に行く。今日は、ママと顔を合わせたくない。

母のことを考えると、昨夜のドロドロとした思いが湧きあがり、胸やけしたような気分に陥る。大したことはなかった。友達と遊んでいて門限の十時を過ぎてしまったことと、駅まで父に迎えに来てもらうように連絡しなかっただけのこと。自宅まで二十五分を歩くのには辟易したが、いつまでも親に甘えるような自分の行動が気にくわない。自分にできることはできるだけやってやろうとしただけだ。

十七歳にもなれば、見た目には立派な大人だ。街を歩いていれば、男性からナンパされることだってある。けれども、安易な誘いには乗らないし、そのくらいの判断力はある。男性と付き合う時だって真面目に向き合おうと思っている。自分の行動に責任を持てる大人なのだから、いちいち母との約束を守る必要もないと思いながら歩

いた。
アパートのドアを開けると、寝巻を着た母が、鬼の形相で立っていた。ヤバい、とたじろいだが、自分の判断でこの時間に帰って来たのだ。誰にも迷惑はかけていない。ハルカは、堂々と前に進んだ。
「ハルカ、今何時だと思っているの？」
「十時半」
不貞腐れたまま、そっけなく答えた。
母親は、鋭い金切り声の持ち主だ。声を聞くだけで、片頭痛のような痛みを感じる。ハルカは、相手がこれから説教をする準備をはじめているのをわかりつつも、知らないふりをして、自分の部屋に向かい着替え始めた。
「こんな時間まで遊んできて。遅くなる時の約束は？　パパ、疲れてもう寝ちゃっているわよ」
ハルカは体中に力が入るのを感じた。まるで、帰りが遅いのは悪いことをしているからと決めつけられているような気がする。健全な高校生は夕方に帰宅して勉強するか、部活に勤しむか、どちらかしかないようだ。大きく息を吐いたが、イライラは大きくなるばかりで全身が熱を帯びてくる。
「私を見張っているの？　息が詰まるんだけど」
脱いだ制服を床に叩きつけ力いっぱい言い放っても、母の表情はほんの少しも動かなかった。
「あんた親のことバカにしているの？　その制服も誰のお金で買ったと思っているの？　誰のおかげで学校行っているのよ」
「私の帰宅時間なんか関係ないでしょ。ちゃんと学校行っているんだから」
「同じ家に住んでいるのに文句言うな。夜になると南口は人通りが減るんだから、危ないでしょ。それにママはご飯作ったり、パパとあんたの弁当作ったり、朝からパートの仕事があるんだから。連絡ぐらいしなさいよ。こんな時間までほっつき歩くなんて非常識よ」
「うるさいな、ばばあ」
ハルカは思い切りドアを閉めた。ドアの向こうでわざとらしく聞こえるため息をした後、母が離れてゆく足音が聞こえた。空腹のためお腹が鳴ったが、再びドアを開けてキッチンに向かうのは決まりが悪かった。
その夜は何とか眠りにつき、翌朝はシャワーを浴びるために早く起きた。リビングにはハルカの弁当があった。父はもう仕事に行ったあとで、母は寝室でパートの時間までの二度寝をしている。
ハルカは母と顔を合わせる可能性を少しでも減らすため、いつも

より早めに家を飛び出した。

「蓉子さんの料理、すごい美味しい」

ハルカは半熟玉子のオムライスを口いっぱいに詰め込んだ。

「ありがとう。彩香とハルちゃんの好物が一緒で助かっちゃうわ」

蓉子は彩香が皿の外に零したご飯粒をティッシュで拾い上げた。五歳になる蓉子の娘、彩香は食欲旺盛で、ハルカとほぼ同じ量のオムライスが皿の上に乗っている。口の周りがケチャップまみれになることも構わず、目の前の好物に夢中だった。ハルカも蓉子の作った程良い塩加減のケチャップライスに、ふわふわの半熟玉子を絡めて脇目もふらずに食べていた。母の料理も食べられなくはないが、腕前は蓉子の方がはるかに上だった。センスの問題なのだろう。

蓉子は結婚する前、旅行雑誌の記者をしていた。仕事を辞めてからの専業主婦歴が五年になり、料理の技術もそれなりにあがってきた。取材先の名店や名産品を扱うことも多かったこと、もともとグルメなところも手伝って、家庭でも美味しいと思えるものを作った。何より自分のためだ。

蓉子は、ケチャップに触れそうになったハルカの髪束に気づき、持ちあげて耳にかけた。

「ごめんね、ケチャップが付きそうだったから」

ハルカは断りなく触れられてどきりとしたが、笑顔を返した。

「ありがとう」

「ハルちゃん、ママと喧嘩しちゃった？」

蓉子は幼少のころから大事にしている人形に語りかけるような声で訊いた。ハルカは、前に座っている彩香に聞かれるのではないかと恥ずかしく感じたが、幼い子どもは、すぐ隣の会話よりも食欲が優先だった。

「うん。ママとの間に、壁があるって言うか。分からなくて、辛くなっちゃった」

ハルカは少し気分を悪くした。忘れようと思ってやって来た蓉子の家で、また母親の話なのだ。

蓉子とハルカの母は、幼馴染であった。家は同じ市内でも少し離れていたので小学校の学区は違ったが、幼稚園と中学校時代を一緒に過ごした。蓉子とハルカが出会ったのもこの縁により、ハルカが小さい頃から気心の知れた仲だ。

五年ほど前に蓉子の母がなくなり、蓉子の実家は蓉子と夫の研一、

彩香の三人住まいである。
「ママには言わないで。ここにいること」
「どうして？　ママ、心配するじゃない」
「なんか、見張られているみたいで嫌なの」
どうせ母親には察しがついているのだろうと思っても、ハルカは頑なだった。
「そうかぁ。たしかに、ハルちゃんと同じころは、私もそう思っていたかも。もうおばちゃんだなあ」
ハルカは首を大きく振った。
「蓉子さんはちがうよ。うちのママはもうおばちゃんだけど」
ハルカは『ばばあ』と言いそうになったが、蓉子の前で汚い言葉は使えなかった。
「ハルカちゃんのママと私は同級生よ」
蓉子のほほ笑む姿は、ハルカを和ませた。母親の友達というだけで、なんでこんなに違うのだろう。蓉子さんが自分の母親ならば、どんなに満たされた気持ちになるだろうか。きっと、ばばあなんてがさつな言葉も使わないのだろう。蓉子のために早く帰ってきて、家事を手伝うようになるかもしれない。
「でも迷惑かけられないから、私から家にいること連絡しておくわね」
母親と蓉子の繋がりが癪だったが、蓉子を困らせたくはなかった。蓉子はハルカの頭を撫でた。ハルカは、飼い主に愛情をかけられて喜ぶ愛猫のように目を細めた。
母親は、こうやって触れてくれたことがあっただろうか。過去の記憶を探ってみたが、思い当たることはなかった。十分に成長した自分にそうして欲しいわけではないが、欠片の思い出すらないのは、もの寂しく感じた。
蓉子に優しく触れられたことを、ずっと忘れたくない。ハルカは、この瞬間を自分の心に刻み込んだ。
三人で食事の片づけをした後、蓉子は彩香と風呂に向かった。ハルカは勧められた一番風呂を二人に譲って、蓉子の書斎を見せてもらっていた。
書斎の壁一面には、蓉子が雑誌記者時代に使っていた観光地の資料や小難しい文豪の小説などが置いてあり、部屋の片隅には、化学繊維の研究員をしている研一の難解な専門書が山になっていた。研一の書斎は他にあったが、いつも研究関連の資料で溢れているので一時的に間借りしていた。
ハルカは蓉子の家に来る度に、蓉子の書いた記事を探して読んで

いた。旅行情報誌なので、五年前の情報は古すぎる。しかし、日本国内を縦横無尽に渡り歩いた蓉子の軌跡が手に取るようにわかった。

ハルカは、訪れたことのないたくさんの土地の空気を、蓉子の文章を通じて感じた。

蓉子はライター志望だったので、一冊だけ紀行文を書いていた。周囲には、一冊世に出ただけで十分と満足げに語っていた。しかし本心では、もう少し書いてみたかったと学生時代の友人やハルカ相手に冗談っぽく語ることもあった。

ハルカは、蓉子のような大人になりたいと思っていた。母のように、スーパーのレジ打ちパートではなく、彼女のように仕事を持って、日本中、世界中を渡り歩きたいと思っていた。ハルカの希望は強かったが、母に打ち明けたことはなかった。あなたなんかに出来るわけがないと否定され、嘲笑われることが怖かった。

ハルカの母は、二十歳でハルカを生み、育ててきた。ギリギリで高校を卒業し、家出同然で流れた先、バーを経営していた中年の父と一緒になった。そんな両親の子どもが、大卒の蓉子のような、物書きのような頭脳労働ができるわけがない、とハルカ自身も感じていたのだ。しかし、夢見がちな年齢の思いは、蓉子に近づきたいという行動で現れた。

ハルカの家出先は、中学時代仲のよかった友達三人か、蓉子の家だった。気持ちが落ち着くとその日の内に家へ戻った。どうしても帰りたくない日は大体蓉子の家で、夫の研一は時々あることだと認識していた。彩香のほうは、家の中にも遊び相手ができるので大好きなイベントの一つだっただろう。

ハルカは過去に蓉子が訪れた東北や北海道の記事を雑誌の山から取り出してパラパラとめくった。蓉子の書く文は、現地の情報のみでなく、訪れた記者自身の情感も手に取るように伝わる美しい記事だった。

雑誌の山から山へ移り飛ぶように探索していると、厚い封筒が滑り落ちてきた。宛名も差出人の名前もなく、封もされていない。真っ白なＡ４定形封筒で、カラープリントや花模様のデザインもされていないシンプルなものだ。中を開けると、三十枚ほどの便箋が細紐でまとめられていた。あまりに厚くて、紐の結びも弱かったので、折り畳んである内側のものから、バサバサと床に舞落ちた。

ハルカがまずいと思った時には、ガラス細工を割ってしまったかのように、便箋の一枚一枚が破片のように足元に広がっていた。

人の物を勝手に見ては後ろめたい。蓉子に知られなくとも、ハルカは彼女を裏切るような気持ちを覚えた。出来るだけ内容を見ずに

元の通り戻しておこうと思ったが、拾った便箋の一枚は手紙の途中になっていて、もちろんどれもページ番号などは振られていなかった。

ハルカは気が進まなかったが、最低限、内容を合わせられる程度に繋がりの部分に視線を走らせた。

落ちた手紙を見た時、透けた文字には見覚えがあった。蓉子の字だろうと見当がついた。

差出人は蓉子だとして、宛名は誰だったのだろう。

ハルカは、床や本の山に広がった便箋の中から、宛名が書いてある一枚目を探した。

ママへ

ママ、私があなたに初めて秘密にすることが、自分の恋についてだったらどんなに幸せだったでしょうか。

ママは今日火葬場で焼かれて、天に昇りました。私がママにしてあげられなかったこと、たくさんと一緒に。

その中の一つは、私はいつか、『ママ』ではなくお母さんと呼びたかったのです。もう一つ、今付き合っている人と結婚を考えはじめ、紹介したいと思っていたのです。

そう言えば、壊れた自宅の駐車場の屋根も直さなければなりませんでした。この前の大雨では、落ち葉がトヨに詰まっていました。どこの業者に連絡しようか、相談する予定でしたね。大人の親子がするように、いつか二人で温泉旅行もしてみたかったですね。こうやって挙げ連ねてゆくと、きりがなさそうです。

ところが、ママは庭で足を滑らせて倒れたと思ったら、打ち所が悪くてあっけなく逝ってしまいました。

私たちの別離には、少しの準備期間もなかったのです。

私は、いつもこれから先の方がたくさんあるように思っていました。ママも予想外でしょう。こんなに早く人生の幕を下ろすなんて。きっと一番驚いているのはあなた自身なのでしょう。

私は、平平凡凡にも、平和な日々が多い、どちらかと言えば多すぎる人生だったと思います。人並みの苦労はしたと思いますが、大抵どんな時も人に恵まれ、ママやおばあちゃんは私の支援をしてくれました。大きな怪我や病気の記憶も、小五の時に山で遊んでいて、転げ落ちて足を挫いたことぐらいです。受験の時も他の子と同じように塾通いして、意志の弱い私でも、せっつくのが得意なママがい

たから、何とか頑張れたのだと思います。

異性との出会いにも恵まれて今まで何人か恋人はいました。気がつけばもう三十二歳です。ちょうどよいタイミングで出会えた研一さんで落ち着きそうです。

ママ、私はこんなにいい思いばかりして過ごしてきたようだけど、本当は違ったの。なんて言い出したら、反抗期の少女の戯言だと思いますか？

私は、ママにほとんどのことを包み隠さず話してきました。相談すれば、厳しくとも正論が返ってきたからです。ママは、私の何倍も、世の中の常識を知っていました。少し躊躇することでも、思い切って話せば随分と楽になれて、どんなことも乗り越えられたのです。

それでも私は、ママにどうしても言いたいことがあります。

子どもたちがはじめて秘密を作る時のことです。

お皿を割ったのに知らないと見え透いた嘘をついたり、つまみ食いしたことを隠したりすることではなくて、本当の、秘密です。ママ達大人には知られたくない、私達だけの秘密になるものです。友達になら話せるかもしれない、多くの人が思春期に出会って自分の内に閉じ込めるものです。

それは淡い初恋であることがほとんどでしょう。男の子とはじめて手を繋いだりキスしたりしたこと、友達と出かけると言って男の子とデートすること、付き合っている人が同級生と説明しながらまったく別の所に年上の恋人がいること、指輪をもらって鍵のかかる引き出しに大事にしまっていること。こういう秘密のことです。もちろんほかの秘密であることもあるでしょう。深刻な家庭の事情や病気を抱えている子どもたちもいます。私は幸せなことに、これといって暗い生い立ちのない、どこにでもいる普通の女の子だったのです。

中学生だった頃の私は、今まで読んだ本や漫画から、少なくとも思春期の女の子達は恋愛に強い幻想を抱いていたと思うのです。当時の私はまだまだ子どもで、憧れはあっても、自分の身に起ることだとは思っていませんでした。

私のはじめての交際は、一般的には遅い部類に入るでしょうが、大学生になってからでした。落ち着き払った私を、周りは恋愛経験豊富な女だと評しましたが、謙虚に否定しました。若い女の子は恋愛に浮足立つ人がほとんどですが、また人生で何が重要で大きな事件になりうるかも、人によってそれぞれ違うのだと思いました。

しかし、私の内に閉じ込めた本当の秘密は、中学生にはもうあっ

たのです。これもママに言えなかったことの一つと言えるでしょう。

この秘密は、時間が経つごとに、私を後悔させました。何度も私を、無知で愚かな世間知らずの、とりわけ自分の身の振り方しか考える余裕のなかった恥ずべき時代に回帰させました。

人はいつまでたっても未熟です。特にあの子どもと大人の間の時は、未熟でありつつも一人前に扱ってほしいと自我の強まる時期です。そして世界は我がものだと誰もが勘違いする厄介な時です。私は当時の自分を捕まえることができるなら、見てくれから一挙一動まですべてにアドバイスをして、記録を塗り替えてしまいたいと思います。

中学二年の時、ある友人が、ぼそりと言葉を発したのを聞いた時のことです。私と彼女は面と向かっていたわけではなく、私たちの間には人二人分ほどの距離があったので、聞きとるにもやっとだったのです。この友人を奈央子（なおこ）としましょう。ママは私の友人を何人か知っていますが、彼女のことは名前すら話したことはないのですから、これで十分だと思います。

奈央子がこの時口にした言葉、これこそ最も、私があの三年間で聞き逃してはならない言葉だったのです。私はその呟きを、いいえ、それはもう、叫びだったのではないかと今は思うのです。

今まで誰かと二人きり、膝を突き合わせて長く話したことがなくとも、思い出の中には暗いものもあることを知らずとも、私たちはこの言葉を受け止めなければならなかったのです。この時確実に、二人で深く沈んでゆくべきひやりとした空気を含んだ地下階段が、静かに延びていたはずなのです。先の見えない行為のはじまりを、本来はここで感じ取り、ここで経験しなければならなかったのです。

けれども私は、浅慮（せんりょ）で、恥ずかしさを受け流すのに精いっぱいだったのです。事態が悪化した時に気づいても、それでは遅すぎたのです。

当時学校であったこと、塾の勉強、楽しく遊んだこと、部活で辛かったことは、すべてママに話しました。私が話せなかったのは、奈央子についてのすべてです。もし話していたら、行動的なママは、私たちだけに暗い階段を下らせることもなく、この問題に対処したかもしれません。

私は何度も話してしまおうかと思いましたが、その度に躊躇しました。彼女の叫びを聞いた時も私を半分からかうように言われたので、その後暫らくは気に留めないことにしました。バカにされるなんて、気持ちのいいことではありません。中学生でプライドの高い

私は、すぐに不愉快になって会話にはしませんでした。
経緯は詳しく覚えていませんが、奈央子と私はクラスの中にいて、会話は私たちの間だけで行われている時でした。奈央子声はキーが高く、よく切れるナイフのように鋭く人を傷つけるのです。ですから、余計に近づこうとする人はいませんでした。
その時彼女はこう言いました。
「あんたも、アレやってよがっているんでしょ」
アンタモアレヤッテヨガッテイルンデショ。
言葉は冷たく刺さりました。
彼女には、お天気屋なところがありました。意地悪をしたい気分だったのでしょう。こういう話を私相手にすることはありましたが、中学生らしく勉強やお互いの趣味について話すことの方が多かったように感じます。
ここで言うアレとは、当時社会問題にもなっていた、薬物のことです。ママは、裏の意味のある言葉や流行語にはまったく無頓着だったので付け足しましょう。
使用者がどんどん若年化している頃で、こんな北総の田舎の方でも、中学生にまで魔の手は及んでいたのです。しかし、私のように地味で目立たない中学生ならば、まったく縁のない世界です。
奈央子は、人目を引きました。お天気屋に加えて気性も激しい方でした。化粧もよくしていたので、中学生なのに高校生かそれ以上に見えることもありました。ですから、学校や地域の枠を超えて、年上の人達とも交流があったのだと思います。もちろんその様なことを私に打ち明けることはありませんでした。しかし、そこはかとなく、雰囲気からわかるのです。彼女にとって私は友人であったと思いますが、常識に縛られ融通の効かない堅物だと思われていたと思います。だから、奈央子は巧妙に、私が知り得てはいけない情報を隠しました。クスリについて持ち出したりするのは、本当に私に意地悪をしたくなったときなのです。
私はもちろん言い返しました。おそらく、
「それは奈央子でしょ！」
と言ったはずです。もちろん私はクスリなど一度も使ったことはありませんし、それをセックスの快楽の代償にしたこともありません。けれども、男女の仲というものに疎く、セックスの類について話題にするのは下品で恥ずかしいものと毛嫌いしていた私は、大人の世界に足を踏み入れていた彼女に対して、嫉妬に駆られていたのです。嫉妬は、クスリやセックスが大人のものだからではありません。クスリは明らかに社会悪ですし、中学生はセックスの知識もま

だ十分ではありません。
私は、人間本来の欲求に対して正直でいられなかったのです。化粧や恋愛などまったく興味がなかったわけではありません。けれども、感情表現が極端に苦手だったので、それならば少しも表に出さないよう装ってきたのです。これらの欲求を、目に余っていても、率直に表現できる奈央子を羨ましく思っていたということです。
私は、極力私が関わる交友関係の範囲を制限していました。友達は特定の人だけです。好きな人もいましたが、その類の話には、無関心を装いました。
性格も暗く地味で、長い髪は天然パーマになっていて、当時の一般的な可愛らしい中学生像からは程遠かったのです。私なんかに好意を抱かれているなんて知ってしまったら、男の子たちは早速バカにするでしょう。私が異性への興味を隠したのは、思春期の衝動か、身の丈に合わず青春を楽しもうとして転落した女子生徒がいたからです。彼女の二の舞には、決してなりたくはなかったのです。
話を戻しましょう。奈央子がこの時言った言葉は、残りの中学校生活の間、じわじわと私に忍び寄ってきました。なぜかこの時の言葉が、私の中に棘のように引っ掛かって、たくさんある彼女の言葉の一つとして、泡のように消えてはくれませんでした。

ママ、私は今なら、この時のことを告白できるような気がするので、これから暫らく書いてみようかと思います。
書いている途中で何度も放棄したくなるでしょう。あの時のことは、まるで昨日のことのように感じられる時もあるのです。故に、私の心にひどく訴えかけてくるのです。このことは私だけの秘密にしておきなさいと。その一方で、真っ先に肩から降ろしたい物を選べと言われたら、奈央子との思い出を選ぶでしょう。誰かに話してしまえば、もうそれは私だけが背負う荷ではありません。
私が奈央子との事を重苦しく感じたのは、彼女の叫びを蔑にしたこと、そしてママに秘密にしたからです。私には抱えきれない大きな問題だと本能的ににわかっていたのかもしれません。これは中学生だった奈央子の人生に深く関わることだったのです。
これから告白することは、すべて本当にあったことかは分かりません。当時の記憶は、だいぶ薄らいできています。大人になった私にとって当時を語ることは、記憶を補完して筋道の通った事実にすることが必要なのです。その中に嘘が含まれていてもママに教えたいのです。私は、どこにでもいる女の子で、何の問題もなく育ってきたと思っているだろうママに。
人生の様々な問題は、今は私自身になくとも、誰かは必ず持って

いて、それらはどうしても鏡のように滑らかな水面にぽっかりと浮かび出て、不穏な風に逆立てられた波となって私をすっかり飲み込もうとやってくるのです。何の心配事もないように見えた私のような人間でも、秘密という形で何か持っていたかもなんて誰が想像できたでしょう。

立派な大人になってしまった今では、このくらいのことは誰の心の内にもあるのかもしれない、大人になってから乗り越えた修羅場の方が過酷だったと言えるかもしれません。けれども私は、これを誰かに告白することは、人で溢れた街中で、鍵のかかった檻から未知の禽獣（きんじゅう）を解き放つような悪しき行為のように思われるのです。

私はこれから、ママ、あなたに告白します。

はじめに、私と奈央子の学校生活の粗方の様子を説明しましょう。

私たちのクラスは、一年の時は別でしたが、二年生からの二年間は一緒でした。クラス替えは毎年ありました。二年目からは、詳しい経緯を生徒は知る由もありませんが、交友関係の配慮もありました。見た目には、私たち二人は仲のよい方だと思われていたようです。その間、クラス内の席替えももちろんありました。しかし、ここではクラス特有の処置がなされたのです。この二年間の担任が同じだったことも原因でしょう。

当時の担任は、国語教師の飯島大樹（いいじまだいき）先生でした。確かあの頃は三十八くらいだったと思います。鈴原景子先生という家庭科の先生と婚約していました。このことは、学校中が知っていました。全校生徒三百人あまりの田舎の小さな中学校ですから、仕方のないことかもしれません。

飯島先生は、正直でとても優しい人でした。今思えば、少し臆病になっていたのかもしれません。なんせ、奈央子をはじめ、学年のつわものが何名もクラスにいるのですから。

はっきり言ってしまうと、奈央子は学校の先生からも、また学年の生徒からも、疎まれる存在でしたが、少し不良の気がある、派手な集団からは一目置かれていました。クラスでは男女からなるグループに（誰がいたのか、もう今では個人名がでてきません。とにかく、彼女を含めて七人はいたと思います。）所属していましたが彼女は一匹狼な特性が強く、そのためグループから外れて、いつの間にか学校から姿を消したり、休み時間を私と過ごしたりもしました。

とにかく飯島先生は、奈央子の周りの微妙な均衡に対して、あまり手を出したくはなかったのです。他の二クラスは、目の悪い人を黒板前にするなどの配慮以外は、すべて男女混合のくじ引きでした。しかしうちのクラスだけは、一班六人で構成されている班の班長が、代表者として集められ、その中で班員を交換するようにして席替えを行っていたのです。

これは、決して奈央子のためだけではありませんでした。中学生は、男女間の関係にも過敏になる時期です。そして、教師の知り得ない交友関係も生まれる状況にあります。飯島先生はそこまで読んでいたのでしょうが、その方法は、クラスに余計な問題を持ちあがらせないためだったようにも思われます。

先生がほとんど参加しない班長会議では、巧妙な交渉が行われたのだと思います。私は一度も参加したことがないので、様子はわかりませんが。この前付き合って別れた男女を一緒にすることはありません。当人同士の問題もありますが、その裏には、様々な感情が錯綜してしまうのです。例えば、女子の所属していたグループからは、男子は振っても振られていても恨まれます。反対にその男子は、女子グループのメンバー全員から離れたいと思うのです。ある所では、敵対する女子グループの二人が、班は違っても席順が前後してしまうこともあります。もちろん、このような事項は序の口で、他の所ではもっとドロドロとした感情が渦巻いているのです。

大体の事情を承知した班長たちは、決まってクラスの中の権力者です。できれば、仲のよい友人と同じ班になって、修学旅行やらの行事に参加し、教科書を忘れたときに、気軽に声をかけられる状態でいたいものです。

そうなると、大体の席替えは、班ごとに場所を移動するような、奇妙な形になります。所々、班替えという形で顔ぶれは変わりますが、あれは野球選手をトレードするのに近かったと思います。

クラスの中で権力のあった奈央子は、もちろん班長の一人でした。私たちのクラスは少し不良の気がある人が多く、彼女は疎まれていると言っても、誰も表面に出そうとする人はいませんでした。力のある一人でしたから、班長会議で煩わしい人物を寄せ付けませんでした。特別支援学級に行くことのある人、透明人間扱いの人、学年中に広まる噂を持つ人、最大の女子グループからいよいよ外されそうな人。

ただでさえ、問題のない人が少ないと言うのに、クラス内での奈央子の権力と交渉力は目を瞠るものだったのです。

私は、彼女の荷物になっていなかっただろうかと、時々考えます。

私は、あまりぱっとしませんでしたが、学年ではそれなりに勉強はできる方だったのです。けれども、融通がきかない堅物だったと思います。基本的には良いか悪いかの二元論的な考えしかできなかったのです。もしかすると、私は班長会議の中で、これだけは仕方がないから負担しようという、ジョーカーのような存在だったのかもしれません。学校の行事や普段の生活で楽しくいたい人たちから、教科書のような人間は敬遠されて当然でしょう。

結局本当に無害な人など、アーリーティーンズの私たちには、どこにもいないのです。人を信用できなくなるフィルターをかけられたように、誰もが自分の存在を脅かす可能性があるように感じられたことはよく覚えています。

このような思春期特有の私たちの事情もあって、私と奈央子は、中学校二年間を親密な距離で過ごすことになったのです。これは誰もが驚くかもしれませんが、私と彼女は休日に誘いあって一緒に買い物へ行ったり、互いの家まで遊びに行ったりする仲だったのです。彼女にとって私は、よい意味でも悪い意味でも、心安かったのだと思います。

一方の私は、同じクラスの三人のグループにいました。二人とも大人しくて、学年の中でも優等生だったと思います。メンバーは実加子、由宇、私の三人でした。偶数でないとあぶれることもあるので、大体の女子グループは偶数で構成されていました。しかし、私たちは三人でもうまくやっていて、どうしてもクラス内でペアになるときなどは、私と奈央子が組むことが当たり前のようになっていました。

奈央子との接点は、二年生のはじめての席替えで同じ班になった時にできました。幼稚園で遊んだ記憶ははっきり残っていましたが、中学校でのスタートはここでした。

彼女と席が前後になって暫らくしたころ、授業中に右隣の男子から回ってきた手紙を、私の前にいる奈央子に渡すよう頼まれました。

確か飯島先生の授業だったと思います。先生は完全に黒板を見ていましたから、その男子が渡してもよかったはずです。きっと見て見ぬふりをするか、軽い注意で済んだからです。けれども彼は、私に渡すよう促してきました。その手紙は、当時流行っていたキャラクターのメモ帳をTシャツの形に折った可愛らしいものでした。当時、友達との手紙交換がまるでメールのように流行っていて、Tシャツ形や可愛いお手紙の折り方のような方法があり、様々な折り方が流行っていたのです。

回ってきた手紙は、確かに可愛らしいTシャツだったのですが、

宛名に書かれた『奈央子』の名前の乱雑さ、そして差出人の所には、いやらしく匿名希望と書かれていたのです。蛍光灯に少しすかすと、罵倒語がいくつか読みとれました。暫らく手紙を見つめていますと、その手紙を回してきただろう配達人たちが、くすくす笑いをして私を見ていました。隣の男子も、必死で笑いが声になるのを堪えていたようで、肩が震えていました。

これは、奈央子への宣戦布告であり、クラスの、私への挑戦状でもあったのです。

まずは私が、その内容をわかりつつも彼女に手紙を渡すかどうかです。手紙の内容は、表に書かれた文字の形を読むだけでわかります。この真面目さでできたつまらない人間は、指示通りすんなりと皆の意志に従い火種を撒く一人になるか、彼女を苦しませる原因の一人となる勇気があるかどうかです。どちらにしても、周りから来るプレッシャーがありました。

私は今にも奈央子の背を突いて手紙を渡しそうになりました。あなたが渡せばいい、と隣の男子に突き返すなんてことはできませんでした。最後は、一番立場の弱いものにうまく回ってくるのです。

直前まで届いた手紙が渡される瞬間を、今か今かと配達人たちは待ちわびていました。私がこの手紙を渡すとき、彼らにはもっと面白いことがはじまるからです。

その時です。背後の不穏な空気を読みとったのか、奈央子が私を振り返りました。私はどきりとして身を竦めました。

「それ、私にじゃん」

彼女は私が握りしめていた手紙を見ました。私は一瞬だけ、それを自分の机の下に隠してしまおうと思いました。しらをきって、私の手紙と言ってしまえばいいのです。けれども本人が手紙を読んだかは、後で差出人のグループが彼女の反応や手紙がどこまで届いたかを尋ねればすぐにわかってしまうことです。私にも、そこまでして被る責任というものが見えませんでした。このまま手紙を渡してしまっても、私と彼女を含め、誰もが仕方のないことだと思ったでしょう。クラスでの正義は、ある方向には寛容に働くのです。そして許されるようにできているのです。

手紙を渡すか、数秒悩んでいるうちに、奈央子は力強く私の手の中からそれを奪ってゆきました。そして、正面を向いて、読みはじめたのです。手紙に書いてあるおぞましい内容は予想していましたが、実際どんな文面なのか、もしかしたら書かれているかもしれない差出人の名前を見ようと、少し前のめりになって彼女に近づいていました。

好奇心とは恐ろしいものです。結局は、私も手紙の配達人なのです。しかし、真後ろからでは、手紙の端すら見えませんでした。隣の席の男子は、これ見よがしに覗いてみせて、他の配達人と目配せをして笑っていました。

奈央子は手紙を閉じると、静かに手の中で捻りつぶし、机の引き出しへと入れました。

中学二年生の時、既に彼女の周りではいくつかの問題が明るみになっていました。どこまでを彼女だけの問題としていいのか分かりませんが、生活面に関して問題がありました。

奈央子は遅刻をすることがありました。色気づくのが早かったので、教師からは度々スカート丈や派手な持ち物について注意を受けることがありました。けれども、これは他のいわゆる不良中学生でもありうることでしょう。

特に学年の中で、おそらく教師も認識していた問題が二つほどありました。

一つは、隣のクラスにいた奈央子の元彼の五木田（ごきた）による暴力です。もう一つは、奈央子の後に五木田の彼女になった、風子（ふうこ）のグループ（確か、クラスを跨いで八人ぐらいです）からの嫌がらせでした。

奈央子にも所属しているグループがあったので、当然そのグループと風子の女子グループと五木田も敵対関係にありました。しかし、奈央子のグループは目立って奈央子の味方をしたり、あからさまに風子グループとの関係を授業や部活で断っていたりするわけではありませんでした。これは人数の少ない中学校では当然なのですが、どのグループや部活に所属していようと、複雑な関係を成して、どこかでは同グループに所属せざるを得ないからです。奈央子のグループと風子のグループの女子は、部活になるとどうしてもチームとなったり、部活の派閥の中では仲間であったりしなければならないのです。

関係のないところまで、クラスの軋轢を持って行きたくないのが、大体の総意でした。なので、奈央子は孤立無縁と言えなくても、誰も決定的な味方に成りえなかったのです。

男が関わった時の女ほど怖いものはありません。これはもう、中学生の時からはじまっているのです。

奈央子と五木田は小学校から別でしたから、二人は中学校ではじめて出会ったので間違いないでしょう。もちろん五木田は、学年で目立っていました。背が高く痩せ気味でしたが、中学生にしては体つきがしっかりしていましたし、もちろん誰もが近づき難いと感じる風貌（ふうぼう）でした。視線も鋭く、いつも何かを睨みつけている様子でし

た。

二人が付き合っていたのは、一年生の時の一時期だけだと思います。私は、休み時間に二人が廊下でお喋りに興じる姿を何度か見ていました。それは、いつの間にかはじまり、いつの間にかぱったりと終わってしまったのです。私は他人のゴシップに夢中になるタイプではなかったのですが、目立つカップルについての噂は、あっと言う間に学年中を駆け巡るのです。

幼稚園のころと中学生の私たちは、まったく別の人間といってもいいでしょう。信じられないでしょうが、幼稚園のころ私と奈央子は、他の子も交えて仲良くおままごとをやっていたのですから。幼少のころとは違うのだと自覚がありつつも、私と奈央子、あるいは他のほとんどの同級生との他愛ない記憶が、キルティングをしたときのようにあちらこちらに縫い留められていました。私は時々、とても不思議な感覚に陥りました。きっと誰もが六年分のブラックボックスを持っていたからです。

奈央子と五木田、二人が付き合うようになった経緯や別れた原因などになんの興味もありませんでした。言い換えると、二人からずっと遠いところにいたので、何にも引っ掛からなかったのです。

しかし、私は別れたはずの二人が、一緒にいる所を見たのです。手紙の一件の前か後かは思い出せません。

その日、私の所属していた新聞部は休みでした。実加子は同じ部活でしたが、風邪で休んでいました。もう一人の由宇は、運動神経がよかったのでバスケ部に入っていました。由宇は授業が終わるとすぐに部活仲間と体育館へ向かいました。私はゆっくりと帰り支度をしていました。その時です。奈央子と五木田の言い争う声が、廊下から聞こえてきました。

放課後は大体の人は、部活に出ていました。用のない人は早く帰るように教師から言われていたので、放課後教室にいるのは、忘れ物を取りに来た人、室内で部活をしている人、教師が下校確認に来るまで残る人ぐらいでした。

その日はおそらく、職員会議の準備があって、学年主任がまだ確認していなかったのでしょう。静まり返った廊下に、喧騒が響いていました。私は恐る恐る廊下を覗きました。見て見ぬふりをして、階段を下りて昇降口へ向かいたかったのです。その声は、隣の教室からでした。階段へ向かうには、扉の開いたその教室を通らなければなりません。

二人の口論は、洞窟のような空の建物に反響して、遠くではうまく聞き取れませんでした。私は、開いた扉に背を向けているのが奈

央子であれば、たとえ五木田がこちらの姿に気づいたとしても通り過ぎてやろうと思いました。横切るときに教室を一瞥（いちべつ）すると、ちょうど奈央子が飛び出してきました。ばつが悪い顔をしたのは、私も彼女も一緒でした。興奮して顔を紅潮させていて、口元は切れて血が出ていました。

私はこの教室の中で、確実に起ったことが一つだけ分かりました。五木田が彼女のことを殴ったのです。今朝会った奈央子の顔は、滑らかに白く透き通った肌をしていたのですから。

私は、他の子たちと同様に、五木田には近づきたくはありませんでした。五木田は学校内で、器物損壊を起こしては、手を焼かせる生徒でした。しかしまさか、五木田が人に直接、まして自分よりも力の弱い女子に対して暴力を振るうことはないと、どこか過信していたのです。

五木田と私は、小学校が同じでした。高学年の頃から、身体のエネルギーを持て余し、なかなか集団生活に溶け込めず、生活態度には問題がありました。しかし心根は優しく、仲のよい友達もいて暴力沙汰を起こしたことはなかったのです。

直立不動のまま三人の間に不穏な空気が漂っていた所、後ろから声をかけられました。飯島先生の婚約者である副担任の鈴原先生でした。

「もう帰る時間よ、最終下校時刻まであと少しよ」

そのような内容だったと思います。そして先生も、奈央子の口元の傷に気がついたのです。

この件に関して、私に一切の影響がなかったのは、この状況のせいでしょう。もし私が、職員室などに報告へ行ってしまったら、おそらく私も、風子のグループや五木田を通じた所から、何かしらの報復があったでしょう。

次の日、奈央子はいつも通り学校へやってきました。本当に強い子なのだと再認識しました。口元の切れた跡はピンク色になって化粧の下に痛々しく残っていました。私は、化粧を落とした彼女の素肌を想像しました。その白い肌に映える南天の実のような赤が、私には羨ましくさえありました。

五木田の件に、風子が深くかかわっていたことは明らかです。時系列はもう忘れてしまいましたが、風子は五木田と二年間同じクラスにいて、たしか卒業まで付き合っていたと思います。さすがに卒業間際になると、誰もが新生活や受験で精いっぱいになりますから、本当に詳しくは覚えていません。周囲に向ける注意よりも、自分自身の事で頭がいっぱいになっていました。こう書いていますと、私

は悉く恋愛事からは遠く、また学年のリーダー格や大きな流れを作っていた人々からは疎外されていたようです。

風子は時々奈央子対しに嫌がらせをしました。それは火を見るよりも明らかに主犯格は風子なのですが、周りを固めるグループがあり、さらに好奇心で煽りたてる関係のない者たちや臆病な者たちのせいで、どれを証拠に、発端を彼女である、と言えないようになっていました。先ほどの匿名希望の手紙がよく表しています。

不思議なものです。奈央子は風子だけを恨めればいいのに、素直に風子だけを恨めないのです。加担した者も恨んでいいのかもしれませんが、曲げられた正義のように、不特定多数は恨めない構造になっているのです。誰かが作った構造なのか、集団ゆえの無関心から来るのか、非常に抜け目のない仕掛けになるのです。大人数はこれをうまく利用して一人を追い詰めることができます。一人や少人数の方は、これを打開する術があればいいのですが、人並みの中学生はひたすら口のない石のように耐える選択肢しか見えないのでしょう。

しかし、方法がないわけではありません。一つの方法は、特技です。あっと言わせるほど勉強ができる、運動ができる、名誉ある賞を取ったことがある。けれども、田舎の中学生で、錚々たる結果を持つ者はほとんどいません。

もう一つは、学校以外に自分の場所を持つことです。あるいは、もっと広い世界を知ることです。習い事や、学校に捕われない人たちとの交流でしょう。しかし、大体の中学生は、学校がすべてなのです。

むしろ、風子のような子にこそ、学校が必要なのかもしれません。

風子は学校の覇者でした。その上、清楚可憐な少女という言葉がぴったりと当てはまるような、色白でぱっちりとした目をしていて、世間を騒がすアイドルのようでした。純真無垢な彼女の前には、一点の曇りさえないのです。誰もが彼女から悪しきものを見つけられなかったのです。それが風子の力だったとも言えるでしょう。

風子はそのこともきちんと知っていました。グループにいる女子たちは、まるで彼女をあがめているようでした。見た目には、対等な友人関係に見えますが、精神的な繋がりとしては、女王と家来です。風子のグループ、風子の側にいるだけで、後光を得ることができたのです。風子のグループの誰、と無意識のうちに誰もが枕詞にしました。それだけで、容姿も学業もぱっとしない元気だけいい子

でも、校内でかなりの威厳と評価を得たのです。
風子はそうした友人を、巧妙に利用しました。彼女が、「あの子気に入らないのよね」と一言告げるだけで、周りの誰かが反応し、先ほどの奈央子に宛てたような手紙を書くのです。風子はその報告を受けると、ふうん。と返すだけで、一人ほくそ笑むそうです。
彼女のグループに睨まれるのは誰もが避けたので、彼女には皆がいい顔をするようになっていました。この構造を変えようとする人はいませんでした。後で奈央子から聞いた話ですが、あの手紙を書いた人の中には、奈央子と話したことさえない人もいたそうです。
あの手この手で、風子の周辺から奈央子に対する陰湿な嫌がらせは、何回かあったと思います。
このような、クラスを超えたパワーバランスや人間関係の変化をいち早く私に教えてくれたのは、仲のよかった実加子でした。実加子は各クラスに確実に信用できる小学校からの友達がいて、その子たちから噂が自然と流れてくるのです。大人しい割に交友関係が広かったので、大体の噂は彼女が通過点となって広まってゆきました。もう少し前に出てゆく性格ならば新聞記者は天職だったかもしれません。
風子がどうしてそんなにも奈央子にこだわったのか、そのはっきりとした理由は実加子の所にも流れてきませんでした。私は、奈央子が前の彼女だったからだと思いましたが、すぐに考えを変えました。奈央子と五木田は既に別れていて、奈央子の側にいた私さえ、未練を聞いたことはありませんでした。きっと未練があったのは五木田の方なのです。それが、風子を行動に駆り立てたのでしょう。男が関わったときの女とは、精神状態が正常ではないのです。特に風子のような女王様タイプは、ときには思い込みもひどくなって、次には攻撃的になります。
風子によってもたらされた奈央子への障害は、いよいよ教師の目にも留まります。

「奈央子さん、ちょっといいかしら?」
ある朝のホームルームの時間に、鈴原先生が奈央子を呼びました。鈴原先生と飯島先生が会釈すると、クラスのあちこちからヒューヒューと囃し声が湧きたちました。
「おまえら、うるさいぞ朝から〜」
飯島先生は照れくささを隠そうと、教卓の所で出席簿を空に振り回しました。奈央子はすくっと立ち上がると、鈴原先生のいる扉の

方へ歩いてゆきました。
　このように朝のホームルームや授業中に呼ばれることは、滅多にありません。この後、掃除の時間があって授業となるのですが、奈央子はなかなか戻る気配がありませんでした。
　そのころ、私の班と由宇の班は教室掃除でした。机の移動もあるので、少しでも人手が欲しくありました。奈央子がいないこととほとんど掃除に参加してくれない班員を考えると、すこしピッチを上げる必要がありました。それぞれの持ち場からクラスメイトが帰ってきてしまいます。私は本当に真面目で、計画通り、時間通り、決まりに沿っていることで何故だか安心できたのです。
「ねえ、奈央子が呼ばれたのって、もしかしてあれじゃない？」
　由宇と同じ班の二人が、机を運びながら話し始めました。二人は話しだすと何も手につかなくなるので、私と由宇は机をこの二人の倍くらいは運ぶ覚悟が必要になりました。
「あれって……奈央子の母親のこと？」
「そうそう。なんか奈央子のお母さんだけ飯島との面談時間長かったんだって。しかも、終わった時教室の外まで飯島出て来て、こう、肩に手置いていたんだって。卓球部、旧校舎じゃん。だから見た人いるんだって。なんかね、鈴原と比べものになんないくらい……美人なんだって」
「うっそ。えー。マジで。なに、黒いんだけど」
　二人はすっかり掃除のことを忘れて、お喋りに夢中でした。
　私は、先ほど鈴原先生が迎えに来たことが気になりだしました。鈴原先生はこの噂を知っているのでしょうか？　それともこれは本当のことで、奈央子が呼び出されたのはこのことが関係しているのではないでしょうか？
　不安にならなければいけない理由はありません。しかし、奈央子が鈴原先生とどこかの教室で、二人きりでいるとして、どんなに気づまりだろうかと考えると、私も苦しくなったのです。
　私には愚直な所がありました。すぐに人を信用して、他人と自分の感情を重ねてしまうのです。奈央子が私をバカにする理由も多くはこの性格にあったと思います。突き詰めると、他人に多く期待していた、ということになります。傷つくことには臆病でいながら、誰からも認められる存在でありたかったのです。もちろん結果は裏切られてばかりです。私はその度に傷ついて、さらに傷を埋めるほどの見返りを期待していました。自己犠牲的な私の行為に気づいてくれる人を待ち続けていました。これは当時の、愚かな私を象徴している行為です。

奈央子は一時間目が始まるころ、鈴原先生と戻ってきました。そのまま真っ直ぐに私の所へ来て言いました。

「余計なこと言わないでね」

珍しく、低く重さのある声でした。

私は、奈央子が何を指して言ったのだか見当がつきませんでした。内容を聞こうとすると、今度は私が鈴原先生に呼び出されたから、鈴原先生の所へ向かえと言うのです。

混乱したまま、私は鈴原先生と、女子が更衣室とロッカーに使っている教室へ行きました。そこには椅子が二つと机が一つありました。鈴原先生は窓側の席に座っていて、扉を開けた私と目を合わせました。そのまま、向いの空いた席に座るよう促しました。

「奈央子さんのこと、何か聞いてる？」

机の向こう側に座った鈴原先生は、抽象的な質問を投げかけてきました。私は、何を答えるべきか迷いました。

何か話せと言われれば、それはもうたくさんありました。手紙の件も、放課後の件も、風子からの嫌がらせも、他にも山のようです。そして、目の前に鈴原先生がいることに恐怖感を感じました。先生は優しく柔和な笑顔を持つ方でしたが、かえって今はその頬笑みの影が目立って見えたのです。奈央子は余計なことは言うなと言っていましたし、飯島先生と奈央子の母親の情事が本当なら、むやみに話さない方がいいに決まっているのです。

私の余計な一言で、奈央子の風当たりが今まで以上に強くなってしまってもおかしくはないのです。

「ごめんね。分かりにくいよね。でも、当人も他の子たちも、しっかり答えてくれないのよね。簡単に言うと『別に……』ってみんな言うのよ」

鈴原先生は、私以外にもこの方法を試していたようです。

鈴原先生は、最近奈央子の持ち物が頻繁になくなっていることを飯島先生から聞いたようでした。クラスでは奈央子がいないときに先生から注意がありました。飯島先生は男性でしたので、この先は女性の先生にということなのでしょう。先生たちは、意外にも私たちの様子を観察しているようでした。

鈴原先生は、奈央子に親密な友達が見られないことを気にしていました。大体付き合いのある人は分かっていても、校内で彼女が一人でいる姿が目立っていたようなのです。確かに授業を抜け出す時も決まって一人でした。ダメもとで私を誘うこともありませんでした。

私は、風子たちのことを話そうかと思いました。けれども、それ

には証拠がありません。どうしてもあくまでの話しか出来ないのです。

私は鈴原先生に聞きました。

「奈央子は何と言ったのですか？」

余計なことを言わない方法はこれしか見つけられませんでした。

「何も問題ないと言っていたわ。クラスが違っても風子さんとは話すし、あなたみたいにクラスにも友達がいるって」

鈴原先生はあっさりと教えてくれました。鈴原先生は、私なら他にも引き出せると思ったのでしょう。けれども私は、キッと口を閉じて、彼女言う通りにしました。

「そう言ったのなら、その通りです」

「もう少し、協力してくれない？　もうわからないのよ」

鈴原先生は職務を全うしようとするあまり困り果てていましたが、奈央子との約束の方が重いのです。この際はっきりと言いました。

「それは、先生の仕事です。すみません」

私から聞き出そうというのは筋違いです。と、そこまで言えるほど肝の据わった性格ではないので明瞭な言葉にはできませんでしたが、鈴原先生には私の言わんとすることは伝わりました。鈴原先生にとって、私は意地悪な捻くれた生徒になりましたが、この時私はなんだか憑き物が落ちたようにすっきりしたのです。

先生たちに対して優しくなかった奈央子も、こんな気持ちなのかと思いました。

私は奈央子が風子たちに対抗するための味方にはなれないとわかっていました。人脈も権力も学校の中では最下位なのです。けれども、約束を守ったことで、これからも教室の座席の前にあったりなかったりする、彼女の華奢な背中を見守ってゆかなければならないと思ったのです。

奈央子が悲しければ一緒に泣きましょう。給食の時、班で楽しいことがあれば一緒に笑いましょう。どんな噂が流れようとも、奈央子の言ったことを信じましょう。私がこの目で捉えたものが、彼女のありのままの姿なのです。周りが何と言おうと、私は、私の奈央子を信じるのです。軽んじられた時は、それと奈央子の苦しみとを秤にかけて、彼女の苦しみを重くしましょう。私がどんなに足掻いても、同情以上のことは出来ないのですから。私は奈央子ではないのですから。『私が彼女自身になること』以外のすべてを私は試そう。私はそう、強く誓ったのです。

長く時間をかけてしまいましたが、私の学年が複雑な構造を成していたことが分かってもらえたでしょうか？　奈央子一人に対して、

これだけのことが渦巻いているのです。ことが起きる順番も、当時さえ引っ掻きまわされたように次から次へと移り、山積してゆきました。

この頃には、冒頭で述べた「あんたも、アレやってよがっているんでしょ」という言葉を聞いていました。私は、自分自身を巻き込んでゆく感情と時間の流れにまったく付いてゆけませんでした。

次の記憶では、もう中学三年生の秋です。受験が近づいていました。あなたは、私を少しでも上の高校に上げようと躍起になっていましたので、私が中学時代で一番の山場を迎えていたことは、知る由もなかったでしょう。

私は、奈央子と隣の市のショッピングセンターへ出かけました。中学生ですから、頻繁に出かけることはできません。私は塾の都合もあったので、この時も久しぶりだったのです。受験シーズンであることに彼女は気に留めていない様子でした。

出かけるといつも食事をとっているファストフード店でお喋りを続けていると、立派なあご髭を蓄えたおじいさんが近づいてきました。私はなんだか緊張して手に汗を握りました。まったく知らない人だったので、何か悪いことでも言われるのかと思いました。

「何だ、今日はやけに真面目そうな子と一緒じゃないか」

おじいさんは楽しそうに奈央子に話しかけてきたのです。私は目を丸くして二人を見ました。

おじいさんは、茶色のズボンにチェックのシャツを着ていました。年齢を感じさせる髭に対して、服装は少し若い雰囲気に見えました。

奈央子の私服は華美というほどでもないのですが、中学生には似つかわしくない格好の肩が出ているセーターにタイトなミニスカートでした。一方の私は、ジーンズに長袖のカットソーという何の変哲もないいかにも田舎の地味な中学生といった格好です。とてもNの隣に立つような友達には見えません。

「何おじさん、またいんの？」

奈央子は年配者に対する口のきき方を知りませんでした。私は、少し小さくなってそこにいました。私は、年上の人に、とりわけ年配者に対しては敬語を使うようしつけられていましたから。習慣となったのは子どもの頃だったので、この時はそれが当たり前になっていました。私の当たり前や前提を破壊して歩くのが彼女だとわかっていたつもりですが、どうしても当惑してしまいます。

そして奈央子は『おじいさん』ではなく『おじさん』と言ったこ

とに気づきました。
「何だよ。いちゃだめかよ。へえ、奈央子にもこんな友達いるんだなあ」
おじさんは口角をぐっと上げて、髭を上下させました。
「こんにちは」
私は小声で挨拶しました。人見知りと言うわけではないのですが、街中で知らない人が話しかけてくることがはじめてだったので、どうしてよいかわからなかったのです。彼女はおじいさんと親しいようでした。きっと、子どもを連れ去るような危険な人ではないのでしょう。
おじいさんはそのままどこかへ去ってしまいました。
「ねえ、今の人っておじさんなの？」
「全然違う。なんか、警察だった人みたいで、見回りしてるんだって。変だよね」
奈央子は歯を見せて笑いました。
彼女はどんな所でも目立つようでした。街でも要注意人物になれるのですから、これが天賦（てんぷ）の才能なのかもしれません。
「なんでおじいさんなのにおじさんって呼ぶの？」
「だって、若いじゃん」
通る声でシンプルに答えました。
これは私の予想ですが、おじさんの服装や話し方などから若いと言ったのだと思います。奈央子は少なくとも私よりは、人をしっかりと見ていて、その目で人の内面まで覗きこむことができるのです。上辺だけを流すように見てそれ以上の情報を見逃してしまう私とは、始めから違うのです。洞察力と言う点で、私は彼女よりもはるかに劣っていました。反対に、鋭利な刃物のように感性が研ぎ澄まされていて、その刃は触れ方によっては驚愕するほど弱いのです。
夕方になって、奈央子の携帯が鳴りました。どうやら、迎えが来たようです。夜遅くまで遊んでいましたが、私が相手だと夕方にはお開きになりました。
私は電車の時間が合わなかったので、一緒に彼女を迎えに来る人を待ちました。暫らくすると、黒い毛並みが艶めく黒豹のような車高の低い車が、スピーカーから低音を漏らしながら近づいてきました。私たちの前に停まると、開いた助手席の窓からサングラスをした若い男の人がこちらを見ました。
「奈央子、これから行くけどどうする？」
漏れ出る音のように低い大人の男性の声です。父親や学校の先生の他に、男性をほとんど知らなかった私は、優しさや落ち着きより

力強さや重さを思わせる声に圧されました。
「おっせーし。ちょっとドンキ寄ってからにして」
奈央子は助手席のドアを開けながら言いました。威圧感のある車と、大人とタメロをきいて車に乗り込む姿に、私は住む世界が違うんだというどうしても埋められない距離を感じました。そして人生で初めて、手を伸ばした先が闇に取り囲まれたような空間に、寂しく取り残され気がしました。不安で胸の奥が軋む音が聞こえました。
「じゃあ、また学校でね」
別れの言葉にはっとして、またねと返事をしました。男の人はまるで私なんかいなかったように、勢いよく車を発進させました。
ガソリンの熱い排気を被って呆然としていると、後ろから先ほどのおじいさんに声をかけられました。
「一度斜面を転がり始めた小石は、自ら止まることはできない。よく覚えておいた方がいい。あなたはまだそこにいるんだ。一緒に転がり落ちる必要はない」
私はおじいさんの言うことが分かりませんでした。腑に落ちていない様子から、おじいさんは目を細めてこういいました。
「私は昔、青少年課の刑事だったんだよ。引退後は、中学生や高校生が、悪いことに巻き込まれないように見守っているんだ」
おじいさんは右腕につけた警察のしるしの付いた腕章を見せました。
「こうやって今でも少し、警察の手伝いだ。気をつけて帰るんだよ」
おじいさんは、またショッピングセンターの中へ戻ってゆきました。
この時迎えに来た車の男性は、A氏です。当時A氏は、十八歳でした。大人から見れば、十八歳なんてまだ何も知らない子どもと一緒です。けれども、あの頃の歳の差は、たった一つでも五つも六つも違うように感じられるのです。
十四歳の私にとって、A氏は立派な大人の男性でした。同級生の男子たちよりもずっと身体が大きく、話す言葉も通じないような異邦人のように感じました。

それから二週間と経たない頃です。奈央子の顔色が悪い日が続きました。
元々色白でしたが、今度は青く、シルクのような肌理(きめ)も悪いのです。まるで冷凍室から出てきたあとのようです。蒼白した顔に対し

て身体が震えていないのが不思議なくらいでした。
それから学校を何日か休みました。私は心配になって、週末に友達と勉強会をするからと母にことづけて、外出しました。
彼女の家は新興住宅地の奥の方にありました。小学校の学区は違っていたので、バスで十分ほどかかりました。
何度か行っていたので、複雑な団地の中でもすぐに分かりました。団地の入り口でバスを降りて、数ヶ月前に来た道を辿ります。
その日奈央子以外は居なかったので、玄関を開けてくれました。私を見ると、気を落としたようでした。きっとA氏か家族か、他の人だと期待したのでしょう。扉を開けた先にいてほしい人物は、少なくとも私ではありませんでした。そのことに私も多少傷つきつつも、このように奈央子を落胆させることはよくあったので、私は奈央子の落胆に気づかなかった様に顔には出しませんでした。
「入れば」
そう言われたので、私は後に続きました。
二階の部屋に入ると、彼女はだるそうにベッドに身を投げました。スプリングのきしむ音が、高く響きました。同時に奈央子がよく付けている甘い香水のにおいが、鼻孔をくすぐりました。
部屋は雑然としていました。ファッション雑誌があちこちに山積みになっていて、まだ中学生だというのに、化粧台には化粧道具が一式ずらりと並んでいました。机には学校の指定かばんが堂々と置かれて、ノートを広げる場所はありませんでした。その机の端の所に、ビニールのチャック付きの小袋に入った白い粉が二袋とアルミホイルがありました。部屋にある他のものは色とりどりでしたが、それだけが白く、アルミは蛍光灯の光を強く反射して自己主張していました。
「ねえ……」
私には次の言葉がありませんでした。クスリと言おうか彼女の名前を呼ぼうか、それとも、今日の学校の出来事を話すか、こんな机じゃ勉強できないじゃんと、受験生らしからぬ姿に呆れるか……。
私はクスリを、本当はやっていないと思っていました。楽天的に構えていたのです。彼女が言うことは、いつも冗談半分で聞いていました。私が困惑する所を見たくて、わざとやっているのだと思っていました。
私はここで初めて気が付きました。奈央子の背中を間近で見ていて、あるがままを見守ろうと誓ったのに、私は、彼女の言葉を少しも聞いていなかったのです。
「そんなに、やっていないんでしょ？」

私は恐る恐る聞きました。声は震えていました。こんなに怖いと思ったことははじめてでした。ホラー映画や友達に驚かされた時の怖さとまったく違うのです。足元から、一気に冷や水が駆けあがってくるような感覚でした。頭は立眩みを起こした時のように平衡感覚が鈍りました。

彼女顔をベッドに伏せたまま、右手にピースサインを出しました。

顔色が悪かったのは、禁断症状のせいでした。一度はじめると、また身体がクスリを求めるのだそうです。そうでないと、顔色が悪くなったり、イライラしたり、身体が震えたり、幻覚が見えたり、挙句の果ては、命を落としかねないのです。私は、保健の授業で聞いたことを思い出しました。禁断症状が出始めると、何とかクスリを得ることが優先され、さらなる使用で身体も人生も滅ぼされてゆく。そのくらい、影響があるものだそうです。

私は、禁断症状がどういったものか見たことはなかったのですが、まだ二回しかやっていないので、初期症状のように思われました。

後で調べてわかったのですが、薬を直接血管に注射するようになると末期だそうです。奈央子は、アルミホイルの皿に載せたクスリを熱して煙を吸う、あぶりをやっていたようです。手法としては手軽で、薬物の影響はそれでも少ない方なのです。

私は子どもながらに、このまま彼女ならクスリを断てると思いました。これは後で甘い考えだったとわかるのですが、少なくとも彼女は今ここにあるクスリに手を出してはいないのです。

奈央子は相変わらず横たわったままでした。私は、目の前にある白い粉をどうすれば遠ざけることができるのか考えました。捨ててしまえばいいのでしょう。けれども彼女の家のゴミ箱にも、私の家のゴミ箱に捨てるのも、捨てられず使用したり、誰かに見つかって問いただされたりする危険がありました。私は頭をフル回転させて良策を見つけ出そうとしました。

静寂を破って、突然奈央子の携帯電話の着信が鳴りました。身体を辛そうにずらして、床の上を蠢いている電話を取りました。

「なに?」

私は、彼女の家族だと思いました。暫らく学校を休んでいることは、もちろん知っていたでしょう。きっと休みも留守にしてしまい、心配しているのです。

「え?　今から?　分かった」

電話を切ると、クローゼットから上着を取り出して羽織りました。

「Aに呼ばれた。今からショッピングセンターのフードコートに来いってさ。どうする?　帰る?」

「で、でも、奈央子の調子悪いじゃん」
A氏は奈央子の恋人だったのです。私は、A氏は横暴だと思いました。こんなに辛そうにしているのに自分の都合で外に呼び出すのですから。
「どうしても、行かなきゃダメなの？」
「お金。渡してないから。急ぎだって」
奈央子はちらりと机を見ました。A氏からクスリを買っていたのです。
「じゃあ、私行くから。たぶん一時間ぐらいで戻るけど、帰りたかったら帰っていいから」
そう言い残すと、部屋から出て行きました。私は暫らく何も手に付きませんでした。
私は、平凡な中学校という池から、ずるずると外に這い出してしまっていたのです。気がつけば、見慣れた景色はどこにもありませんでした。あるのは、初めて直面する私に見えていなかったたくさんの物と、それに狼狽する私です。
次の瞬間には、奈央子の部屋を飛び出しました。階段を途中まで降りてから引き返し、クスリの袋を思い出して取りに戻りました。乱暴にポケットへ突っ込んで彼女を追いました。クスリは扱いに慣れていない手榴弾の様に、重たく感じました。私とクスリ、最も縁の遠いもの同士が、ビニール一枚で直接触れそうな距離にいるのです。
走ってバス停が見える所まで行くと、ちょうどバスが来ました。奈央子の団地から駅前までは十分くらいです。私は奈央子が乗り込んだ後に、駆け込みました。
「何来てんの？　待つか、帰っていいって言ったじゃん」
「私も、ついてく」
体育以外で運動をしない私は、ぜいぜいと息切れしていました。彼女は必死に駆けてきた私を不思議そうに見ました。けれども迷惑そうな顔はしていなかったので、私は安心しました。ここで唾棄（だき）するような態度を取られたら、私の存在意義がなくなってしまいます。奈央子を案じて全力疾走した私の彼女を思う気持ちが、少しでも彼女に頼られているという自負が、消え去ってしまうのです。私は、本当に安堵しました。
隣の市にある大型ショッピングセンターのフードコートに着くと、既にA氏がいました。フロアの中央を占める広いフードコートの中心の辺り、天井に届きそうな観葉植物を囲んで配置されているテーブル席の一つにいました。土曜日の夕方ですから、フードコートに

は休憩中の買い物客が多くいました。A氏は私たちに気が付くと、以前もしていたサングラスを下にずらしました。私は怯えて、その目を見ることができませんでした。

「誰？」

A氏は私でなく、奈央子に聞きました。

「友達」

「へえ」

地味な格好からクスリを使ったりしないと思ったのでしょうか、A氏は私に全く興味を示しませんでした。

「金は？　ちゃんと売ったんだろ？　友達に」

A氏は最後だけにやついて言いました。“友達”に私は含まれていません。そして、クスリの話を堂々とするのですから、私は誰かに言ったりするとは思われていないのです。そのくらい、A氏には取るに足らない人間なのです。

奈央子は少し黙っていましたが、重い口を開きました。

「売れなかった」

「は？　なに、まさか自分で使っちゃった？」

奈央子がクスリを売るとするなら、A氏から買った金額より高額で売らなければならないでしょう。きっと、A氏の上にいるもっと力のある人からの命令なのでしょうから。彼女の立場は本当に弱いのです。A氏という大人に支配されているのです。恋人ならさらに立場は弱くなるでしょう。こんな言い方は失礼ですが、奈央子は可哀そうでした。私は隣で小さくなっている彼女の手を握りました。緊張して頭の中まで硬直した私には、これしか意志表示の方法がありませんでした。

「なあ、使っちゃったの？」

A氏の声色は、もう恋人や中学生に向けるものではありませんでした。脅しの声です。私はテレビドラマ位でしか聞いたことがなかったので、本物の声に足がすくみました。見えない威圧感で、こちらからは何も言いだせないのです。

「使ってない。家にあるよちゃんと」

彼女は気丈に答えました。けれども同時に、私の手を握り返してきました。私よりもずっと強くです。

A氏は私たちを見て、舌打ちをしました。

「売って来いって言ったじゃん。ったく役に立たねえな。こんなのと一緒にいるからじゃねえの？」

A氏は私を指差しました。私はそのまま拳が飛んでくるように思えて、両手で防ごうと手のひらを顔の前で返し身構えました。

「何怖がってんだよ。はは。おもしれえ」
A氏は噴き出して笑いました。私はただ怖くて、動きを止めたまま俯いて、怯えているしかありませんでした。
「うるせーな。黙れよ」
間近で金切り声が耳に響きました。私は驚いて隣を見ました。柳眉を寄せて、A氏に咬み付いたのです。その表情には、怒りと一緒にA氏を信頼していた分の悲しみと悔しさが滲み出ていました。
「お前そんな事言える立場かよ。この前ただで使わせてやったのによ」
A氏は彼女の手首を掴み、逃げられないようにしました。
私は今にもあの時五木田にされたように、もしかするとそれよりも酷い怪我をさせられるような気がしました。もう、頭の中は真っ白で、それでも奈央子が傷つけられるのだけは避けたかったのです。
「バカ！」
私は大声で叫びました。私自身、空砲のように飛び出した大音声の反動を感じ驚きました。そして、ポケットの中に入れてきた手榴弾を思い出したのです。
「バカ！」
私は、ポケットに入っていたクスリ二袋を、A氏に向かって投げつけました。A氏は左腕でそれを受けると、床に落ちたクスリを急いで拾いました。私はその後ろ頭に向かって、震える声のままもう一度言いました。
「バカ！」
次の瞬間には、A氏に殴りかかっていました。けれども、非力な中学生です。A氏はすぐに逃れて、距離を取りました。私は、その後もA氏に向かって、「バカ」と叫び続けました。
その言葉しか、私は罵倒語を知らないようでした。今なら、もっと技巧をこらした罵詈雑言をこの口からいくらでもマシンガンのように吐き散らすことができます。
泣きむせび、嗚咽（おえつ）も一緒になって、何もかも分からなくなりました。けれどもそうしたかったのは、きっと奈央子だったのです。実際に傷つけられたのは彼女だったのですから。では、どうして私は、彼女の怒りを借りたように、まるで私のことのように、全身でA氏を責めたのでしょうか。
この時ばかり、私は『奈央子』だったのです。彼女よりも私は、はるかに奈央子だったのです。語彙（ごい）が少なく、バカとしか叫べない

私は、誰よりも彼女の気持ちをわかっていました。感情まで達していない奈央子の中に蠢(うごめ)くカオスまでもが、私の中に激流のごとく流れ込んできたのです。私の中だけに収まるものではありませんでした。堰(せき)を切ったように涙は零れおち、全身は硬直し、熱いマグマのような感情は捌(は)け口を求め全身を駆け巡りました。

休日のフードコートで、大声で叫ぶのですから、辺りは騒然としました。すり鉢のように私たちの周りには空席ができ、近くにいた清掃員が警備員を呼びに向かいました。私は、もう何も言葉が出てきませんでした。いつの間にか彼女も静かに泣きはじめていたようです。

私と奈央子は抱き合いました。周りから顔が見えないように、お互いの間に埋めました。私たちは、どちらの支えで立っているのか分からないほどでした。

駆けつけた警備員と見覚えのある腕章を付けたおじさんが私たちに声をかけたとき、A氏は既に去っていました。

その後、私たちはA氏とは会っていません。

けじめをつけるために、奈央子は一度くらいは会ったかもしれません。その後の関係を詳しくは話しませんでした。

A氏はおそらく、まだ私たちの街のどこかで暮らしているのでしょう。けれども、もうまったく繋がりを持たない人です。

A氏は私の人生の中で、一番の敵でした。そして私は、A氏の存在にもっと早く気がつけなかったことを後悔しました。

何度か年上の恋人の話をしました。クスリの話をして私の戸惑う所を見ていました。私が長い間忘れられない言葉を残しました。

私はA氏に残ったクスリを投げつけて最後の処理に成功しましたが、奈央子の残りの中学校生活は、禁断症状との戦いにあてられました。とても軽度の症状で済みましたが、体調がよくない日が続き学校は休みがちでした。暫らく休んだ日に家まで行ってみると、ただでさえ痩せていた身体が、さらに細く脆く見えたこともありました。見るに堪えず、家まで行ったのはこれきりにしました。時々学校に来た時の、奈央子の元気な姿を最後の彼女の中学時代の姿として、必死に記憶に焼き付けました。

私の中の彼女は、先生の手を焼かせる問題児で、一匹狼で、簡単なことには負けない強い人間で、恋を知っている大人の少女でした。一方で自由奔放な性格で私を振り回し、少し見下げている所があり

ました。これが友人関係かと問われれば、疑問が多く残ります。しかし私は彼女を誰よりも誠実な人間だと思いました。決して私に嘘はつかなかったのです。

私は頭の足りない、バカな人間だったのでしょうか？　このような人を誰よりも信じたのです。

私はもう、見えるものだけで決めつける二元論者ではありませんでした。どんなことも簡単に決めつけてはならないのです。特に私のような人間は時間をかけて、ある程度付き合ってみないと見えないものが氷山の一角に隠れて膨大に広がっているのです。

これが、私と奈央子の間にあった事、あなたに秘密にしていたことです。

ここまで書いたように、私の中学校時代は、不信と不安と、猜疑（さいぎ）に満ちていました。あなたが考えているよりももっと、私の中学時代は、不信と不安と、猜疑に満ちていたのです。

ママ、あなたは昼間の人でした。人の活動時間に合わせて生きられる人でした。その時間に何よりもいきいきと輝ける人でした。だから、私のように、不器用に夜の時間に手探りで生きるタイプの人を理解できなかったのだと思います。人と過ごす時よりも、深夜一人、物思いに耽る時間が私には必要不可欠で、そちら側で生きるのが私だったのです。

あなたは、何度も何度も私を眠りから醒まそうとしました。おかげで、私は昼と夜の空間に閉じ込められてしまいました。どちらにも、私の場所がなくなってしまったのです。一向に目を開けない私に、あなたは何度も痺れを切らしました。無駄な行為だということが、あなたは理解できず、私は、無知なために、あなたが何故そんなにも私を一生懸命起こそうとするのか見当もつきませんでした。

あなたは、私が世間に置いていかれることに不安を覚えたのでしょう。生きるということの定型は、いつもあなたが基準だったのですから。まず覚醒していなければ、何もはじまっていないのと同じです。

空が白々とした明け方のような、一面が夕日で灼けているような、私の精神は妙な時間帯を彷徨い続けました。すべてが目覚める前、暗闇に包まれようとする悄然（しょうぜん）、私は身に起るどんなこともありのままに受け入れて、私と同じ空間に漂わせるしかありませんでした。

どんなにちいさなことも取りこぼさないように、水槽に輝くピグミーのように泳がせて、どこからでも目立つようにしました。

ブラックライトで照らしだされた熱帯魚の水槽。

私以外にこの感覚を教えようとするのなら、この表現が一番近いのでしょう。私は、海洋のような広い水槽に私自身を漂わせて、必死にすべての光を追ったのです。

私が一つの出来事から受け取る情報量は、私の処理能力をはるかに凌駕（りょうが）していました。これは学校の授業の内容も、文化祭などのクラス行事も、人間関係の些細なことも、仕事上の事務的な作業も、自分の失敗をカバーすることも、すべて同じでした。

私は、世間から見ると実際年齢よりも精神が未熟で、平均的な人間の持つ決定的な能力が欠如していたことは明らかでしょう。

私はあなたのように生き生きと前向きでいられたことはほとんどありませんでした。どんな時も、大きなしこりが胸の中にあって、生きにくさを感じていました。

私は、自分ばかりが欠陥品だと思っていました。しかし成長するにつれ、人は誰もが自分という人間の長所と短所を持ち、自分よりも能力が高く、社会から価値があると認められている人に対して、嫉妬心を持つのだと分かりました。私の中の生きにくさの多くは、自分自身と他人を比較した時に生まれる、羨望と劣等感なのです。

特に私は、あなたに一番嫉妬していたと思います。

もしも、私が奈央子のことをあなたに話していたら、あなたはどう対処していたのでしょうか。私が話せなかったのは、実際、嫉妬という感情からはじまっているのだと思います。

私はおとなしい性分でしたので、誰の前でも自由奔放に振舞える彼女を本当に羨ましいと思っていたのです。私にはそれがどうしても（今でも）できないのです。そして、バカにされることも多かったので、彼女について説明しようとすると、その部分も必要になりました。私たちの関係を表わすには、外すことのできない部分なのです。そして私は、親からの自立心が強くなっている時でした。今日あったことはなんでも親に言えばいいと思う時代はとうに過ぎていたと思っていました。優秀なあなたと違っても、自立心だけは立派にいてやろうと強く思っていたのです。

蛇足ですが、ここでその後の奈央子について付け足しましょう。高校進学後、暫らく連絡をくれませんでした。私も、当時のことが思い出されて、自分から連絡する気にはなれませんでした。二十歳

になって成人式の時、彼女は会場に現れませんでした。私は二度と会うことはないのかもしれないとの気持ちが強くなっていました。すると、ある日はがきが届いたのです。彼女は歳の離れた人と結婚して、一児の母になっていたのです。娘の名前はハルカちゃんといいました。意外にも近くに住んでいたのです。

大学卒業後、たまに遊びに行くようになりました。ハルカちゃんはとても元気な女の子です。これからはこちらで研一と暮らすので、会うことが増えるのではないかと思います。

長々と書き連ねてきましたが、そろそろこの手紙を終わらせなければなりません。

あなたがしていた誤解を解きたかった。私の子ども時代は決して楽しいことばかりではなく、あなたや一般的に考えられている、子どもらしい気楽な時代ではありませんでした。けれども間に合わなかったようです。こうやって母と娘は何代にもわたってすれ違ってゆくのでしょうね。悲しいことといえばそうかもしれません。しかし、誰もが通過しなければならない、試練の一つなのかもしれません。

ところで、私が見ていたあなたについて言及していませんでした。ここで少し、娘から見た母の姿を伝えておきましょう。

あなたは、キャリアコンサルタントで、朝から夜まで働き通しでしたね。拘束時間が長く、ノルマと人相手のストレスのかかる仕事で、パソコンに向かって家でも文書作成してメールで会社にデータを送っていた姿をよく覚えています。あなたは仕事ができる人だったので、会社でも出世街道にいましたね。でも、あまり家庭で仕事内容について話すことは少なかったと思います。

あなたは、中学生の私には随分と放任主義を貫いていました。私も自立しようと、自分のことはこの時にできるようになりました。けれども高校生となると、あなたは一転、変わりました。何かと私の行動や発言、進路や成績の問題に、随分と首を突っ込んで意見するようになりました。

あなたの人生では、高校時代が転換期になったのではないでしょうか？

あなたは自分自身の学生時代を私に語ってくれることは滅多になかったと思います。あなたはこの時期に、人生の目標が決まったり、生涯働き続けることを決心したり、その後の人生を規定する出会いが多くあったのでしょう。私もその様な時期になり、悪い方向に進

まないよう注意深く観察していたのでしょう。

多くの思春期の子どもがそうであるように、私はあなたに反発心を強めました。あなたの正論を、そっくりそのまま受け入れることがどうしても難しかったのです。具体的なことはもう覚えていませんが、もうすべてに反対したくなったのです。表向きは言われたとおりにしていても、心の中では激しく苛立っていたと思います。

私は大学も社会人になってからも実家に残りました。それは父が早くに亡くなっていたことも関係していると思います。就職には何とか成功しましたが、厳しい勤務に疲れてしまい、一人で生活することなど考えられませんでした。おばあちゃんは幸い健康でしたし、あなたがしっかり稼いでくれたので生活できたのです。私が働きだしてからは、私の収入も少しは生活の足しになったと思います。

あなたは、私が大学生になると、高校の時よりもさらに私の生活に口を出すようになりました。帰宅時間、進路相談、交友関係、食べ物、容姿、何でもです。

あなたは、私に依存を高めていたように思います。これは私の予想の範疇を出ませんが、あなたは、父がなくなった後にいくつか恋をしていたのだと思います。男女の関係とはならなくとも、定期的に会えてお互いを支え合える関係にある人がいたのです。再婚など関係の発展にならなかったことを、今の私なら残念だったわねということができますが、当時まだまだ子どもだった私は、あなたからその様な打診があったら戸惑ったかもしれません。とにかくあなたは、新たなパートナーを得る機会には恵まれませんでした。

その代わりに、とは言い過ぎなのかもしれませんが、私はこう感じていました。あなたは私に干渉することで手綱を手中に収め、私を引き寄せようとしたと。

既に私は自立した大人でした。経済的・社会的な知識は未熟でしたが、親を必要とはしていなかったのです。私の親離れは既に終わっていたのです。あなたは未だに子離れができていないと、私は常々思っていました。一方で、これが大人になった子どもが背負っていかなければならない、親の姿なのだとも思いました。

そしてあなたは自身が、親離れもしないまま大人になったのだと思いました。

あなたは、長女だったのでそのまま家を継ぎました。おばあちゃんは私が生まれたのを機に近くの農場で働くのを辞めて、家事と私の世話をしてくれるようになりました。あなたが忙しくて帰れない日もおばあちゃんがいてくれたので、保護者には苦労しなかったのです。私が働くようになってからも、おばあちゃんは私たちに夕食

を作って待っていてくれました。もう七十を超えた高齢です。私は、おばあちゃんの作る食事の味付けが濃すぎたり薄すぎたり、時々とんでもないものが材料に含まれていたとしても、出来るだけ不満を言わずに食べました。私か母が作ってもよかったはずです。帰宅時間が遅ければ、デリバリーを頼んでもよかったはずです。そのくらいのお金には困っていなかったでしょう。おばあちゃんは、もう十分な老人でした。台所に立ち続けることは、骨の折れる仕事です。あなたも休日には料理をしたので、若くても大変な仕事だとわかっていたでしょう。あなたはそれでも、おばあちゃんに料理をすることを強いていました。そして家に帰って美味しいご飯を食べることを何よりも楽しみにしていましたから、おばあちゃんの作る味には人一倍強くこだわっていました。何度言っても変わらないのに、おばあちゃんの味付けや料理のセンスを扱下ろしながらも、変わることを信じて何度もアドバイスを続けていました。

おばあちゃんが急に脳梗塞で倒れて亡くなるまで、あなたはおばあちゃんに期待していました。あなたの母は、あなたのために変わってくれると、最後まで希望を捨てていなかったのです。

あなたは、どのように育ったのかほとんど語ってはくれませんでしたね。あなたが生まれたのは、戦後二十年、日本は高度経済成長期でした。今も昔も田舎が都会よりも貧乏なことは変わらないでしょう。苦しかったこともあるでしょう。私が興味を持つわけがないとも思ったのでしょう。詳しい生い立ちを知らない私は想像するしかありませんが、あなたはおばあちゃんに叶えてもらえなかったことがいっぱいあるのでしょう。成功の人生を歩みつつも、諦めきれなかったものの恨みを、おばあちゃんにぶつけていたのでしょう。同じように、だんだん大人になってゆく私を見て苛立っていたでしょう。あなたが作り出した私が育つ環境には、あなたがどうしても欲しかったもので埋め尽くされていたのでしょうから。それでもあなたの思い通りに私は育たないのですから、口出しはいくらでもしたくなります。羨ましくてしょうがなかったでしょう。

時々、友達からの報告に閉口することがあります。結婚式に母の意見を取り入れたということ、母と同じドレスを着たということ、母も太鼓判の旦那ということ。仲のいい親子なのかもしれません。私は、その様な報せをメールやネットで目にしたり話を聞いたりする度に、嫌悪感と拒絶反応で虫唾（むしず）が走ります。彼女たちは、自分の母親を、まだ味方だと信じているようです。

彼女たちは若かりし頃、母親から羨望の眼差しを受けなかったのでしょうか？　白雪姫やシンデレラに登場する継母のような貪欲さ、

狡猾さ、自分のコントロール下に置き続けたい願望、もう一度自分の人生をやり直したいという、言葉だけではなく存在によるプレッシャーを感じなかったのでしょうか？　一度でも、母親たちの心の奥深くに、彼女たちの思春期以降に住まう、おぞましい女の性に気づかなかったのでしょうか。

私のあなたへの気持は、好きや嫌いで表わせるものではありません。この世にあるありったけの対義語を並べてきても、どれも当てはまり、どれも的を射ていないのです。名前を付けるのなら、『娘が母親に向ける感情』そのものなのです。

アンビバレントなこの気持ちを、誰も理解することなく、命が尽きてしまいます。大体の場合、母親が先に亡くなり、娘が涙を流すという一連のセレモニーを通して、それまでの長い、長い母娘の葛藤を、うやむやに滲ませてしまうのです。あなたに対して抱いた激しい烈火のごとき感情も、あなたを荼毘（だび）に付したと同時に白い煙となって、空にたゆたう白と灰色のなんてことのない綿雲の一つに変化してしまいます。まるではじめから何もなかったように、起伏の激しかった心の山系を学校のグラウンドのように整地してしまうのです。

今は、あなたが私の人生から永遠に消え去ったという喪失感が、鉛のように圧しかかっています。そうやってあなたは、命がなくなってからも私を責め続けるのです。消え去ったのはあなたの存在であって、私の母親というのは、いつまでも私に付随してくる影です。私はもうわかっています。毎日、鏡を覗く度に、私の形が、はるか昔に見ていた、あなたになるのです。

もう、これ以上記しても無駄でしょう。この手紙を書く私の中に、あなたがいることを感じます。あなたは、もうこの手紙を読んでいるのです。

生まれてくる子どもに、あなたなら何を教えますか。私に子どもができた時は、生まれてくる子が女の子でないことを願うばかりです。もしも女の子が生まれてしまったら、私は彼女に私が得てきたものは何も与えません。私が生きてきた中で得た処世術は役に立ちそうにもなさそうですから。母親は、娘のことを知っているつもりでも、実際のところ何も知らないのと同じなのです。

生まれる子は女の子でないことを願っているのに、女の子が生まれてしまった場合のことしか思いつきません。

私は、生まれてくる子のはじめての秘密は、どこにでもいる普通の女の子のように、彼女の恋であってほしいのです。そしてもし奈

央子のような子に会うことがあったのなら、私のように、手遅れになるまで放っておくようなことはしてほしくないのです。

……願うだけのつもりが、私はもう、私の人生を架空の娘に預けはじめてしまっています。

私の後悔、私の失態、私の罪悪、私の贖罪（しょくざい）……すべて私のものなのに、子どもは、何もかもを奪ってゆくのでしょうか。生涯子どもを持たない女性は、一生それらに苛まされながら人生を送るのでしょうか。どちらも違うとわかっていても、私は、どちらも完全に否定することができません。私は、私の感じてきた喜びも苦しい後悔も、誰にも受け渡したくはないのです。

私たちは、そういったものを抱えながら生き続けます。秘密を増やしながら女でいなくてはなりません。

女が正義や正直や罪悪のために命を切り捨てることは滅多にないでしょう。命をもって清廉潔白を証明しようとすることも多くないでしょう。命をかける時は、きまって生涯一番の人を愛してしまった時です。そうでなければ、今にも身体を突き破って爆発しそうなドロドロとした気持ちを、必死にひた隠し、笑顔の仮面で他人を騙し通し、苦虫を噛み続けることを人生に強いて生きてゆくのです。

その証拠に、私は研一と結婚します。彼は、自分の研究にしか興味がありません。仕事と研究の成果以外の方は、体裁が悪いから結婚してみて、次はなんとなく家族を作ってみて、すべては帰って寝る場所のための雑用にすぎないのです。私は彼を愛してはいません。けれども生活を一緒に出来る程度には、心を許し、契約できる関係なのです。それで、もう十分ではありませんか？　お互いの心の底に秘めたものに触れ合うことはなくとも、触れないことを互いに理解し合っているのです。

おそらく彼にも、私がこの手紙に書いたような、その後の人生をも捉えて離さない何かがあるのです。彼が人生をかけて達成したいと願う野心かもしれません。彼にしか分からない罪かもしれません。彼が決して私に向けることのない愛情かもしれません。

ですから私とあなたが理解なく三十二年も親子関係でいたことは、なんの問題でもないのです。

結局、すべてが虚像であったとしても、その中にたった一つでも燦然（さんぜん）と輝く本物があれば、それだけで人は生きてゆけるのです。

あの頃、純粋な少女だった奈央子と私にあったことは、まぎれもなく日常に潜んだ残酷な事実で、それがきっかけで生まれた私たちの関係は何にも換え難い本物だったと思うのです。

私はここに命を受けこの歳まで生きてきました。多くの人に出会い、別れ、奈央子という友人に対し償いきれない罪があります。それだけであなたの娘でよかったと思うのです。

ハルカは長い文章から顔をあげると、それまで立ったまま夢中で読みふけっていたことに気がついた。元に戻しておこうとしただけだったのに、蓉子が母に宛てた、決して誰も読むことのない、秘密の手紙に捕われてしまったのだ。

部屋のドアの向こうで、彩香のはしゃぐ声が聞こえた。

「彩香を寝かせてくるから、ちょっと待っていてね」

蓉子はドア越しにハルカに言った。

「はい」

ハルカは短く答えた。

ハルカにはわかっていた。手紙に出てきた奈央子とは、ハルカの母のことなのだ。

蓉子は戻ってくると言っていた。早く手紙を戻して、この部屋を去らなければならない。ハルカはそうはわかっていても、手元が痺れたときのように不器用になって、ほとんど順番通りになっていた手紙を再び床に落としてしまった。同時に、涙も溢れ出てきた。すぐに頬を伝って、次々と流れた。涙でこの手紙を濡らしてはいけないと、必死でかき集めた。数滴落ちてしまったかもしれない。流れ落ちる涙は、留まることを知らなかった。

「ハルカちゃん？」

ノックして部屋に入ってきた蓉子に、ハルカはたくさんの便箋を抱いたまま、蓉子の肩に縋った。手紙を集めるのも、涙を止めるのも間に合わなかった。どうしたの？　と聞きながら、蓉子はハルカと床に座った。

「ごめんなさい。ごめんなさい蓉子さん」

ハルカは、風呂上がりの蓉子の濡れた髪に顔を埋めた。家で使っているシャンプーとは違う香りがした。自分も、早く蓉子と同じ匂いになりたいと強く感じた。

「こんなところにあったのね」

蓉子はハルカが落とした一枚を見た。蓉子の母親が亡くなった五年前、母の死を乗り越え、決別するために認(したた)めたものだった。

「ちゃんとわかる所に置いておいたつもりだったのだけど。私、随分前から探していたのよ。ありがとう、ハルカちゃん」

蓉子はすすり泣くハルカを宥めた。ハルカはますます力強く、彼女に抱きついた。こうしている間も、蓉子が先に思うのは、ハルカでなく母親の奈央子であることが悔しかった。今、彼女に抱かれているのは、奈央子の娘のハルカでしかないのだ。蓉子は、いつになってもどんな状況でも、そのままのハルカとしてみてはくれないのだろう。ハルカは、蓉子との間に本物を手にすることはできないのだろうと悟ったのだ。

「手紙を見たこと、気にしなくて大丈夫だから。これは、私とハルカちゃんの秘密よ」

蓉子が耳元で囁くと、ハルカは蓉子の中でコクリと頷いた。

「蓉子さん、お風呂借りていい？」

「ええ。もちろんどうぞ。お布団敷いておくわね」

「いつもごめんね。ありがとう」

「いいのよ。さあ、お手紙も。今度こそ、忘れない所に大事にしまうわね」

ハルカは風呂場へと向かった。

一人になると、流れ損なった涙が再び落ちてきた。手を使って拭っても、まだ先があるようだった。

どうしてこんなにも悲しくなるのだろう。風呂に浸かりながらハルカは自問してみるが、なんの答えも心からは返って来なかった。ハルカの心は、まだ答えを用意していないのだ。

すべてが虚像であったとしても……先ほど蓉子の書きつづった一文を思い出してみる。

いつかきっと、どれが本物かは自分で決める。

きっともう、ここには家出には来ないだろう。母にもきっと、少し優しくなるだろう。

ハルカが今まで感じたことのない予感が、次々と浮かび上がってきた。メリーゴーランドのように、目の前を色とりどりの未来像が駆け抜けてゆく。

けれどもやっぱり最後には、蓉子のようになりたいと思うのだ。

〈了〉

【編集後記】

■文芸「草の丘」の第6号を発刊する運びとなった。会員の創作意欲は旺盛で、詩一編と小説が連載を含めて五編集まった。いずれも多様な人間模様を、ユニークな切り口で描いた力作である。しかし、創作に充てる時間が不十分で、荒削りの表現が目につく。

本誌の編集方針は会員のレベルアップを目指し、原則として発刊の一ヶ月前に掲載作をメールで送り合う。会員は届いた原稿に目を通して、作品のモチーフや構成、表現などを互いに批評する。そのようにして完成度を高めているが、時間的な制約もあり十分とは言えない。推敲不足の表現や誤字・脱字等が散見され、編集者としては心苦しい。しかし、懸命に書いた作品なので、寛大な心でお読み頂きたい。

■今回は、愛知県と福島県に住む方から、本誌に作品を掲載したい旨の打診があった。残念ながら掲載には至っていないが、ｗｅｂによる作品の発表は予想していた以上に反響が大きい。限られた地域を超えて全国の方に読んで頂ける点は、普通の同人誌より優っていよう。

このｗｅｂ同人誌が一人でも多くの読者の目にとまること、そして会員として作品を発表してくださる新人の登場を心より期待している。

〈香取　記〉

【会員の連絡先】

いんば　華子
bulldog_dolla_mon@hotmail.com

唐瀬　光
effect_fact_mouth_karase@yahoo.co.jp

中川　とら
nakagawatoral@gmail.com

畑中　康郎
ktakasug@am.em-net.ne.jp

土方　杳
nykkmgs@moon.email.ne.jp

高橋より（イラスト）
junko328p@softbank.ne.jp

草の丘　第六号

発　行　二〇一四年六月二十二日

編集兼発行人　印旛文学の会　香取　淳

連絡先メール　katorijun27@gmail.com

ＵＲＬ　http://bungeikusano-oka.raindrop.jp